

2025 年 4 月

食料安全保障月報

(第 46 号)



令和 7 年 4 月 30 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021 年 6 月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月 1 回、月末を目処に公表します。

2025 年 4 月食料安全保障月報（第 46 号）

目 次

概要編

I	2025 年 4 月の主な動き	1
II	2025 年 4 月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2024/25 年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2024/25 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「インドのコメ需給動向と輸出規制の変遷」	6

（資料）

1－1～3	穀物等の主要輸出国の生産量（過去 10 年平均との増減比較）	1 1
1－4	穀物等の国際価格の動向	1 4
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 5
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 6
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 8
5	食品小売価格の動向	2 2
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	2 3
7	FAO 食料価格指数	2 5

今月のコラム

「インドネシアの食料事情②：日本からの農林水産物・食品輸出」	2 6
--------------------------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2025/26 年度の作付意向面積は前年度から 1.6%減となる見込み
	＜カナダ＞	2025/26 年度の生産量は前年度から 1.3%減となる見込み (AAFC)
	＜豪州＞	2024/25 年度の輸出量は下方修正され 25.5 百万トンの見込み (USDA)
	＜EU27＞	2025/26 年度の生産量は 134.4 百万トンの見込み (EC)
	＜ロシア＞	2024/25 年度の輸出量は前月から下方修正され 44.0 百万トンの見込み
	＜ウクライナ＞	2024/25 年度の輸出量は前月から上方修正され 16.0 百万トンの見込み
	＜中国＞	2024/25 年度の輸入量は前月から下方修正され 3.5 百万トンの見込み

2	とうもろこし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	9
	＜米国＞ 2025/26 年度の作付意向面積は、前年度から 5.2%増加する見込み	
	＜ブラジル＞ 2024/25 年度の生産量は前年度から 5.9%増加する見込み	
	＜アルゼンチン＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度から 2.0%減少する見込み	
	＜ウクライナ＞2024/25 年度の生産量は、前年度から 17.5%減少する見込み	
	＜中国＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度から 2.1%増加する見込み	
3	コメ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	15
	＜タイ＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 0.5%増加する見込み	
	＜米国＞ 2025/26 年度の作付意向面積は、前年度から 0.5%減となる見込み	
	＜中国＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 0.5%増加する見込み	
	＜インド＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 6.7%増加する見込み	
	＜ベトナム＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 0.8%増加する見込み	
II	油糧種子	
	大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
	＜米国＞ 2025/26 年度の作付意向面積は、前年度より 4.1%減少する見込み	
	＜ブラジル＞ 2024/25 年度の生産量は前年度から 9.4%増加する見込み	
	＜カナダ＞ 2024/25 年度の生産量は前年度から 8.4%増加する見込み (AAFC)	
	＜中国＞ 2024/25 年度の生産量は、史上最高の前年度から 0.9%減少する見込み	
	＜アルゼンチン＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度から 1.6%増加する見込み	
	(参考 1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2024/25 年度)・・・	27
	(参考 2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・	27
	(参考 3) 各国のクロップカレンダー一覧 (主要品目毎) ・・・・・・・・	28

特別分析トピック

「世界の食料需給の動向と中長期的な見通し―世界食料需給モデルによる 2034 年の世界食料需給の見通し―」

【利用上の注意】

表紙写真：ブラジルパラナ州ウライ市のとうもろこし畑。作付けは 3 月 12 日に行われた。作付作業後数日間は発芽に良好な天候となったが、その後の降雨不足により発芽にばらつきが生じている。(パラナ州ウライ市 2025 年 4 月 1 日 撮影者：Thiago Terabe)

(概要編)

I 2025 年 4 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2024/25 年度の作況について、北半球での収穫が終了した一方、南半球では、生育期から収穫期を迎えている。同時に北半球では 2024/25 年度の春播き作物の作付けが始まっている。

2024/25 年度の状況について、品目別にみると、4 月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、EU、ロシア、英国で単収・収穫面積ともに前年度より減少するものの、豪州、米国、インド、アルゼンチンで単収・収穫面積ともに増加、カザフスタン、中国、カナダで単収が増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022 年 3 月に史上最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナ産穀物の輸出再開に関する 4 者合意（黒海穀物イニシアティブ）については 2023 年 7 月にロシアが離脱し停止。現在、黒海の臨時回廊からの輸出が順調に機能しているものの、EU 向け輸出の動向も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジル、中国、南アフリカで単収・収穫面積ともに前年度より増加するものの、米国で収穫面積が減少、ウクライナで単収・収穫面積ともに減少、EU、ロシアで単収が減少すること等から、世界全体の生産量は前年度を下回る見通し。

大豆については、ブラジル、米国で単収・収穫面積ともに増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。

いずれの品目も、旺盛な消費需要により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視が必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、主に穀物と砂糖の価格指数の低下が肉と植物油の上昇を相殺したこと等により、2 月の 126.8 から、3 月（最新値）は 127.1 とほぼ横ばい（参考：2024 年 3 月 118.9、2023 年 3 月 128.0、2022 年 3 月 160.2、2021 年 3 月 119.1、2020 年 3 月 95.2）。海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近 5 カ年の平均値の約 7 割の水準で推移。

早期注意段階の継続について

緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2021 年 7 月に、主要輸入農産物の国際価格や海上運賃の上昇、国際的な物流の遅れ等の当時の状況を踏まえて適用。2025 年 4 月も引き続き適用した一方で、主要穀物等の国際相場や海上運賃についてはここ最近下落傾向で推移しており、引き続きその動向に留意。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

USDA の 4 月需給報告によれば、2024/25 年度の小麦の生産量は、単収が減少するものの収穫面積は増加することから、前年度より 1.7%増加し 2,340 万トンとなる見込み。また、とうもろこしの生産量は、収穫面積・単収ともに減少することから、前年度より 18%減少し 2,680 万トンとなる見込み。2024/25 年度の小麦の輸出量は、期首在庫の減少を受け、前年度より 14%減少し 1,600 万トンとなる見込み。とうもろこしの輸出量も前年度より 25%減少し 2,200 万トンとなる見込み。

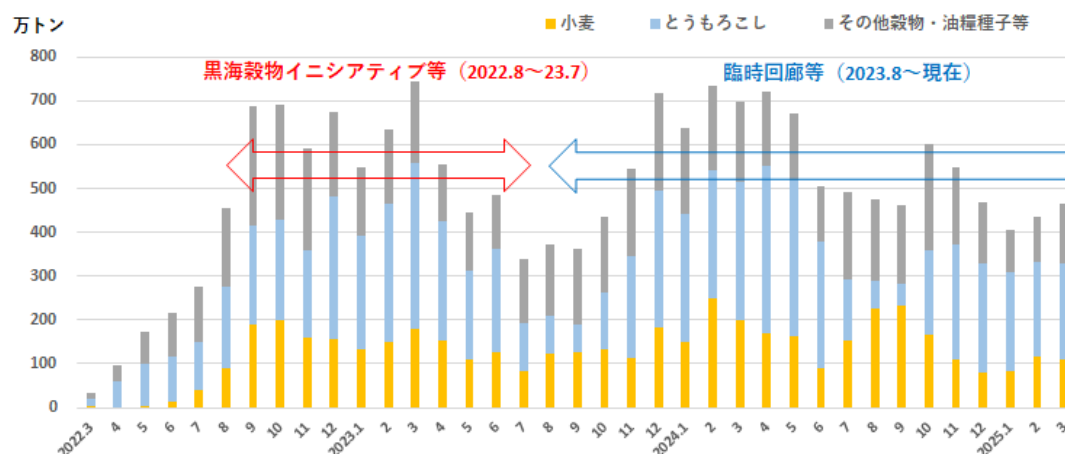
ウクライナ農業政策食料省によれば、2024/25 年度の小麦及びとうもろこしの収穫作業は終了した。また、2025/26 年度の冬小麦の作付作業も終了している。2025 年 4 月 4 日現在、2025/26 年度の春播き穀物・マメ類の作付面積は、前年同期を 8.7%上回り 92 万 6,000 ヘクタール、うち小麦の作付面積は 11 万 6,500 ヘクタール。同省は、春播き穀物・マメ類の作付面積を 2024/25 年度と同水準の 570 万ヘクタールと計画しており、春小麦の作付面積は 28%増加させるとしている。

臨時回廊からの輸出状況

2022 年 7 月 22 日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの 4 者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年 8 月以降、オデーサ港等 3 港（オデーサ港、チョルノモルスク港、ピウデンヌィ港）からの輸出が再開したが、2023 年 7 月 17 日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。ウクライナ農業政策食料省によれば、同イニシアティブ履行期間中の輸出実績（2022 年 8 月～23 年 7 月）は、穀物・油糧種子等 6,846 万トン（うち、小麦 1,728 万トン、とうもろこし 2,949 万トン）。

ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関（IMO）に通報し、2023 年 8 月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊や、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。輸出ルートのうち、EU 域内を経由した輸出（鉄道又はトラック）は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量が大半を占めている。

（参考）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022 年 3 月～2025 年 3 月）



出典：農業政策食料省のデータをもとに農林水産省で作成

注：データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計。

第二次トランプ政権の対中関税措置と中国の報復措置

トランプ大統領は 2025 年 1 月 20 日の就任以来、次々と新たな関税措置を発表している。各国政府がトランプ政権との対話に向けて動くなか、中国は報復措置を発表し、米中両国の追加関税の応酬がエスカレートしている。4 月中旬までに行われた米国の対中関税措置と中国の報復措置について、農産物関連分野を中心に整理した。

表 第二次トランプ政権による関税措置の変遷

日付	対象国	措置内容	対中国 追加関税率	対中国 合計関税率	中国の報復措置
2月1日	メキシコ カナダ 中国	メキシコ産とカナダ産の全製品に25%の追加関税（ただし、カナダ産のエネルギー・資源は10%）、中国産の全製品に10%の追加関税を2月4日から適用			
2月3日	メキシコ カナダ	メキシコとカナダに対する追加関税適用開始の1か月延期を発表			
2月4日	中国	中国原産の輸入品に対する10%の追加関税を適用	+10%	10%	2月4日、米国原産の輸入品のうち、石炭・液化天然ガスなど8品目に15%、原油、農業機械、自動車など72品目に10%の追加関税を2月10日から適用
2月10日	全世界	鉄鋼・アルミニウムに25%の追加関税を発表→3月12日適用			
3月3日	中国	中国原産の輸入品に対し追加関税をさらに10%上乗せし20%に	+10%	20%	3月4日、米国産の鶏肉や小麦、とうもろこしなど29品目に15%、大豆、豚肉、牛肉、水産物、果物、野菜、乳製品など711品目に10%の追加関税を3月10日から適用
3月4日	メキシコ カナダ	メキシコ原産品に対して一律25%、カナダ原産品に対してはエネルギー・同資源に10%、それ以外の産品に25%の追加関税を適用			
3月6日	メキシコ カナダ	メキシコとカナダの原産品に対する追加関税の適用対象から、USMCAの原産地規則を満たした品目を除外すると発表。また、USMCAの原産地規則を満たさないカリウムに対する追加関税を25%から10%に引下げ			
3月26日	全世界	自動車・自動車製品に対する一律25%の追加関税を発表→自動車は4月3日適用			
4月2日	全世界	全ての国から輸入される全ての品目に10%の追加関税を設定し、57か国の国・地域には個別に設定した「相互関税」を上乗せ。中国の相互関税は34%。10%追加関税は4月5日、相互関税は4月9日適用	+34%	54%	4月4日、米国原産の全ての輸入品に34%の追加関税を4月10日から適用
4月8日	中国	中国に対する相互関税率を34%から84%に引き上げ	+50%	104%	4月9日、米国からの全ての輸入品の追加関税率を84%に引き上げ、4月10日から適用
4月9日	全世界	「相互関税」発動。ただし、報復措置を講じていない国には、90日間の相互関税の適用停止。追加関税一律10%は継続。報復措置を講じた中国に対しては、相互関税率を125%に引き上げ	+41%	145%	4月11日、米国からの全ての輸入品の追加関税率を125%に引き上げ、4月12日から適用

白書「中米経済貿易関係に関する中国側の立場」

2025 年 4 月 9 日、中国国務院新聞（報道）弁公室は、白書「中米経済貿易関係に関する中国側の立場」を発表した。本白書では、今般の米国の対中関税措置に対する中国の政策や立場について説明し、中米経済貿易関係の本質は相互に利益のあるウィンウィンの関係であり、中国は中米の第一段階の経済貿易協定を誠実に履行しているが、米国は同協定の関連義務に違反していると指摘。また、中国は自由貿易の理念を実践し、WTO のルールを真摯に遵守しており、貿易政策のコンプライアンスを全面的に強化し、WTO 加盟時の関税引下げの約束を誠実に履行しているとし、米国の一国主義、保護主義は二国間の経済貿易関係の発展を損なっている。中米は平等な対話と相互に利益のある協力を進めることを通じて経済貿易上の対立を解決することができ、対立ではなく、平等な対話と相互に利益のある協力による対処が必要であり、両国の関係改善が世界経済にも好影響を与えると主張している。

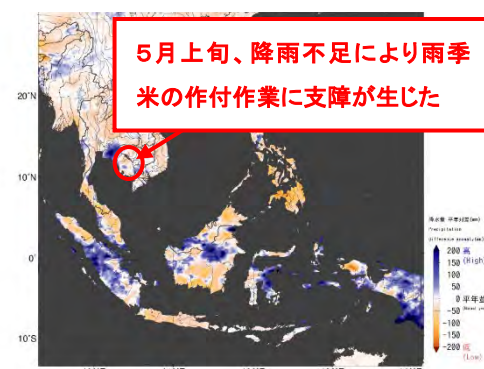
1 ブラジル：大豆生産量は史上最高の見込み

USDA によれば、2024/25 年度のブラジルの大豆生産量は史上最高の 1 億 6,900 万トンと、前月予測から変更なく、前年度から 9 % 増加し、過去 5 年平均を 18% 上回る見込み。収穫面積は史上最高の 4,740 万ヘクタールと、前月予測から変更なく、前年度から 3 % 増加し、過去 5 年平均を 13% 上回る。単収は史上 2 番目の 3.57 トン/ヘクタールと、前月予測から変更なく、前年度から 6 % 増加し、過去 5 年平均を 4 % 上回る。近年、作付面積の増加は鈍化しているが継続的に増加している。今期はブラジル全土で作付面積が大幅に増加した。北東部と中西部では、生育期を通じて降雨に恵まれ単収が増加し、干ばつに見舞われたリオグランデ・ド・スール州やマットグロッソ・ド・スール州南部の単収減を相殺した。業界および政府によれば、主要生産州のマットグロッソ州とゴイアス州では記録的な単収が報告されており、北部、北東部、南東部のその他の各州でも記録的、もしくはそれに近い単収が報告された。

2 カンボジア：乾季米の収穫面積増によりコメ生産量が増加

USDA によれば、2024/25 年度のカンボジアのコメ生産量は 780 万トン（精米ベース）と、前月予測から 6 % 上方修正され、前年度から 5 % 増加する見込み。収穫面積は 370 万ヘクタールと、前月予測から 2 % 上方修正され、前年度から 5 % 増加、単収は 3.46 トン/ヘクタール（粳ベース）と、前月予測から 4 % 上方修正され、前年度から 2 % 増加する見込み。カンボジアのコメは通常、雨季と乾季の二期作が行われている。主な栽培は雨季米で、5 月に作付けを開始し、8 月に収穫を開始する。乾季米は 11 月に作付け業を開始し、2 月に収穫を開始する。今期の雨季米は、雨季の開始の遅れによる乾燥が作付けと生育初期に好ましくない影響を与えたものの、その後天候が好転したことから作物は順調に生長した。乾季米は、好天と灌漑整備による十分な水分供給により、作付面積が拡大した。

図：カンボジアの降水量（平年対差）
（2024 年 5 月 1 ～ 15 日）



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

3 中国：中国共産党と国務院、農業強国建設加速化計画（2024～35 年）を発表

新華社通信によれば、2025 年 4 月 7 日、中国共産党と国務院は、農業強国の建設を加速させるための 12 か年計画を発表した。2027 年までに約 7 億トンの食糧生産能力を達成し、重要農産物の合理的な自給を保持し、2035 年までに食糧の生産能力を安定させ、本世紀半ばまでに農業強国の完成を目指す。本計画の 7 本柱は、①食糧安全保障の基礎を固める、②農業科学技術の革新、③現代的農業経営体系の整備、④農業産業体系のレベルアップ、⑤農業の対外協力・連携の深化、⑥住みよく働きやすく美しい農村づくり、⑦都市と郷村の融合発展の促進となっている。

食糧安全保障については、次の 5 つの目標を掲げた。①耕地の保全・整備体制の強化：耕地は 1 億 2,433 万ヘクタール、永久基本農田（中国当局が指定する優良耕地）は 1 億 307 万ヘクタールの確保をレッドライン（必要最低面積）とする。②食糧と重要農産物の生産力の向上：食糧・食用油等の主要作物の作付面積と単収の増加、コメ・小麦等主要作物の安定生産の確保、菜種・落花生等植物油原料作物の生産の潜在力を発掘等、③食糧生産支援政策の整備：食糧を栽培する農民の収益保障の仕組みを整備、④食糧と重要農産物の備蓄と流通管理の強化：国家備蓄の管理体制を改善し、食糧と重要農産品のサプライチェーン全体のモニタリングと早期警報システムを整備。⑤多様な食物供給体制の構築。

II 2025 年 4 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、3月末、190ドル/トン台後半で推移。4月に入り、米国の関税措置による報復関税に伴う米国産の需要低下懸念等を受けて190ドル/トン台半ばまで下落したものの、米国小麦産地の乾燥等による冬小麦の作柄懸念やドル安等を受けて上昇し、4月中旬現在、200ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、3月末、170ドル/トン台後半で推移。4月に入り、米国の期末在庫が下方修正されたことや米国の90日間の相互関税の適用停止等を受けて190ドル/トン台前半まで上昇したものの、ブラジルの生育に適した天候等を受けて下落し、4月中旬現在、180ドル/トン台後半で推移。

コメは、3月末、430ドル/トン台後半で推移。4月に入り、アジア及び南米地域における十分な供給、アフリカにおけるインド産米等との競合を受けて下落し、4月中旬現在、410ドル/トン台前半で推移。

大豆は、3月末、370ドル/トン台前半で推移。4月に入り、米国の関税措置による報復関税に伴う米国産の需要低下懸念等を受けて360ドル/トン前半まで下落した。その後、米国の90日間の相互関税の適用停止等を受けて上昇し、4月中旬現在、380ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、コメはタイ国家貿易委員会価格

III 2024/25 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より0.3%増の28.28億トン。消費量は、前年度より1.5%増の28.62億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率も前年度を下回り26.6%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前年度より、とうもろこしで減少も、小麦、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.28億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.62億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、コメで増加も、小麦、とうもろこしで減少し、穀物全体で減少し、4.92億トンの見込み。

期末在庫量は、7.60億トンと前年度より減少、期末在庫率も、前年度より減少する見込み。

(注：数値はUSDA「PS&D」による)

IV 2024/25 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り6.77億トン。消費量は前年度を上回り6.69億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る21.0%となる見込み。

(注：数値はUSDA「PS&D」による)

V 今月の注目情報：インドのコメ需給動向と輸出規制の変遷

インドの2024/25年度のコメ生産量は、前年度に比べ7%増の1億4,700万トンと史上最高を記録する見込み。インド政府は2022年9月9日以降、輸出規制措置を発動・強化してきたが、今期のコメ豊作見通しを受け、2024年9月14日以降、順次規制措置を緩和し、2025年3月7日には最後まで規制していた砕米の輸出再開を発表した。2024/25年度のインドのコメ需給動向とコメ輸出規制の背景と変遷についてまとめた。

注：文中の「2024/25年度」等は市場年度で、インドのコメは2024年10月から2025年9月。
(品目別需給編P.27参照)

1 2024/25年度のコメ生産・輸出動向

(1) 生産動向

USDAによれば、2024/25年度のコメの生産量は1億4,700万トン（精米ベース）と、前月予測から1%上方修正され、前年度から7%増加し史上最高を記録する見込み。収穫面積は史上最高の5,100万ヘクタールと見込まれ、前月予測から2%上方修正され、前年度から7%増加し、過去5年平均を10%上回る見込み。単収は4.32トン/ヘクタール（粳ベース）と、前月予測から1%減少するものの、前年度と変わらず、過去5年平均を3%上回る見込み（図1）。

今期の記録的な生産量は、農家が綿花より単収が高くリスクが低いコメに作付けをシフトしたことによる作付面積の増加と生育期間中に理想的な天候に恵まれたことによる。インドでは、カリフ（雨季）米、ラビ（乾季）米、夏季米があり、カリフ米（作付期：5月～8月）が総収穫量の82%を占め、ラビ米（作付期：11月～2月）は約11%、夏季米（作付期：3月～5月）は7%を占める。インド農業省の2024年9月の報告によれば、今期のカリフ米の作付面積は4,135万ヘクタールと、前年同期より2%増加し、過去5年平均を約3%上回っている。

(2) 輸出動向

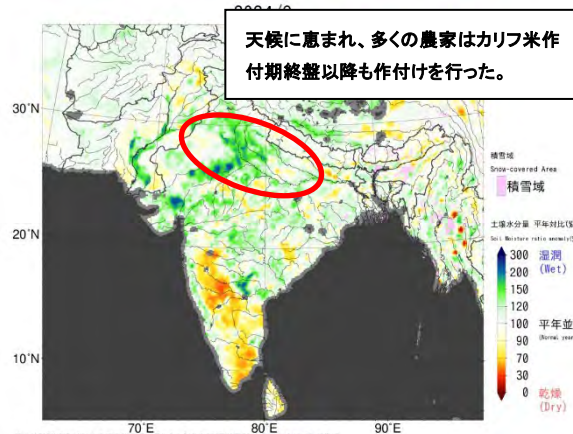
インドの2024年のコメ輸出先国は166カ国に及び、ベナン、ギニア、コートジボアール、トーゴ等のアフリカ諸国、サウジアラビア、イラク、イラン等の中東諸国、ベトナム等の東南アジアなど多岐にわたっている（図3）。

図1 インドのコメの生産量、収穫面積、単収の推移



出典：USDA「PS&D」(2025.4)をもとに農林水産省で作成

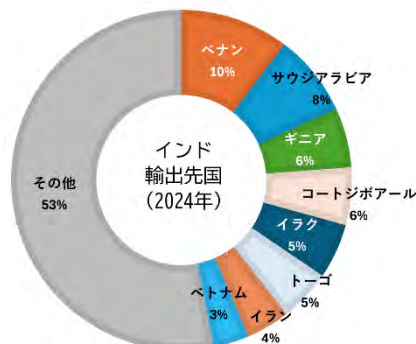
図2 インド土壌水分量（平均対差）（2024.9）



注：JAXA/AMSR2/AMSR-2土壌水分量プロダクト、「JAXA/AMSR2土壌水分量プロダクト」を加工して作成。
Note: Created by processing JAXA/AMSR2/AMSR-2 Soil Moisture Product and "Soil Moisture Area Product".

出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

図3 インドのコメ輸出先国



出典：S&P Global Intelligence をもとに農林水産省で作成

USDA によれば、2024/25 年度のコメの輸出量は 2,450 万トンと、史上最高の生産量と政府のコメ輸出規制の緩和を受け、前年度から 70%増加し、史上最高を記録する見込み。

2010/11 年度まではタイが世界第 1 位のコメ輸出国であったが、2011/12 年度以降は、2013/14 年度を除き、インドが世界第 1 位のコメ輸出国の座を維持している（図 4）。

2 コメ輸出規制発動（2022 年 9 月）の背景

（1）小麦の価格高騰とコメの消費促進

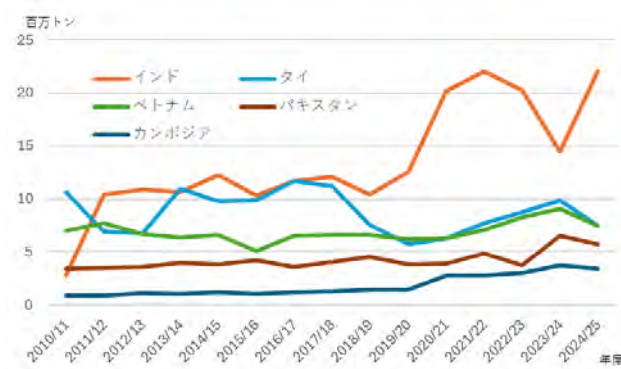
2022 年 2 月、ロシアによるウクライナ侵攻が開始された。これにより、世界的な小麦供給減少、燃料や肥料を含む投入財価格の高騰への懸念が急速に高まり、小麦の国際価格は史上最高を記録した（図 5）。

インド政府は、2022 年 5 月 13 日、上記による世界経済及び社会・政治情勢の変化に起因する小麦の国際価格の高騰及び国内の小麦生産量の減少を受け、インド国内の小麦在庫量を確保し、小麦価格の高騰を抑制するために、小麦の輸出を全面的に禁止した。さらに同月 14 日、インド政府は、公的配給システムにおいて、コメの配分を増やし、小麦の配分を減らすことを発表した。例えば、小麦とコメが 60 : 40 の比率で供給されていた州では 40 : 60 の比率に、75 : 25 の比率は 60 : 40 となる。小麦の供給減少への懸念とインフレを受けて、政策により国内でのコメの配給・消費が促進された。

（2）インドのコメの輸出増加

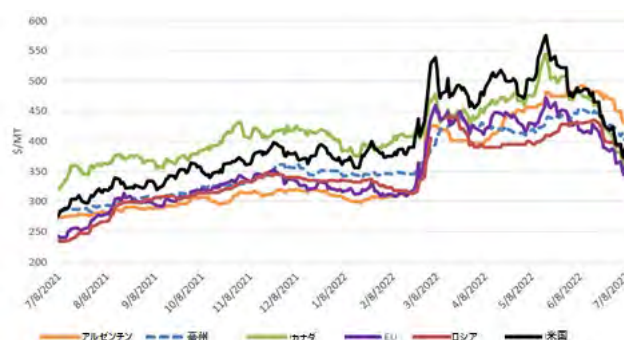
2021 年から、世界的な飼料価格（とうもろこし、大豆）の高騰とコメ価格の下落（図 6）を受け、中国やベトナムへの飼料用碎米の輸出量が増加した。パーボイルド米もアフリカ諸国のコメの需要増、天候不順と洪水によりコメの生産量が減少したバングラデシュからの需要増を受け輸出量が増加。また、その他の精米についても、インドの輸出価格が他の主要輸出国に比べて割安であり、低所得輸入国にとって魅力的な価格であったことから、アフリカ諸国への輸出が急増した（図 7）。

図 4 コメ輸出量の国別推移



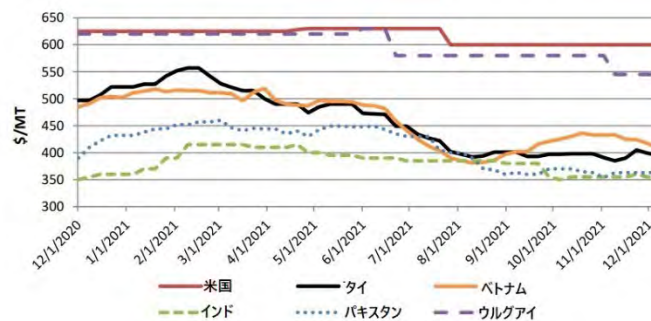
出典：USDA「PS&D」（2025.4）をもとに農林水産省で作成

図 5 小麦 FOB 価格の推移（ドル/トン）
（2021 年 7 月から 2022 年 7 月）



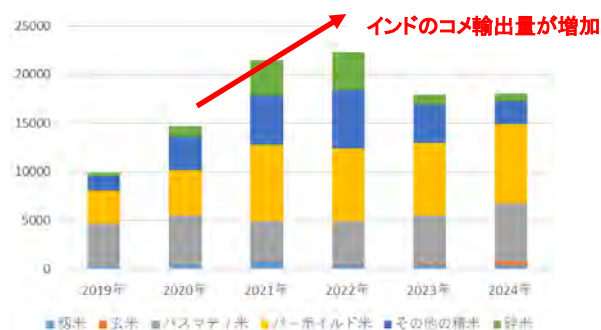
出典：USDA「Grain: World Markets and Trade」（2022.7）

図 6 長粒米 FOB 価格の推移（ドル/トン）
（2020 年 12 月から 2021 年 12 月）



出典：USDA「Grain: World Markets and Trade」（2021.12）

図 7 インドの品目別コメ輸出量の推移（千トン）



出典：インド商工省商務局 HP データ（2024.11）をもとに農林水産省で作成

3 コメ輸出規制の発動～2022年9月から2023年7月までの動向～

(1) 2022年9月9日の輸出規制の内容

インド国内のコメ消費増や海外からの需要増によるインドのコメ需給のタイト化を受け、インド政府は碎米の国内供給を優先するため、2022年9月9日、碎米輸出を禁止した。さらに、バスマティ米・パーボイルド米以外の精米、粳米、玄米に20%の輸出税を適用した。

(2) インドの輸出規制後の状況

2021年及び2022年においてインドの碎米の最大輸出国であった中国では、インドの碎米輸出禁止によりインドからの輸入量が大幅に減少した。セネガルとベトナムはインドからのコメ輸入を継続したが、碎米からバスマティ米・パーボイルド米以外の精米の輸入へとシフトした(図8)。なお、一部政府間合意によって碎米輸入が許可されることもあった。

小麦価格の高止まりは、アジアの一部でこれまでの小麦の消費拡大傾向から、コメへの回帰を招いた。フィリピンとバングラデシュでは、輸入関税を引き下げ、コメの輸入を促進した。

インドネシアでは、2023年6月からのエルニーニョ現象の影響による干ばつにより、コメの生産量が減少したことから、同国政府は、国内在庫の確保のためにコメ輸入を大幅に増加させた。主な輸入先国はタイ、ベトナム、インド、パキスタン、ミャンマーで、インド以外のタイ、ベトナム、パキスタン、ミャンマーからの輸入量が増加した(図9)。

上記より、2022年9月からのインドの輸出規制に加えて、小麦価格の高止まりにより更なるコメ需要の増加、コメ主産国であるインドネシアの不作により、コメの需給状況は更にタイトになり、輸出価格が上昇傾向となった(図10)。

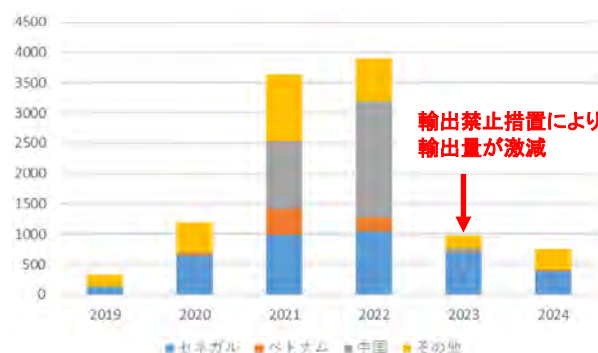
4 コメ輸出規制の強化

～2023年7月から2024年9月までの動向～

(1) 2023年7月20日以降の輸出規制の内容

インド政府は、国内でのバスマティ米・パーボイルド米以外の精米の小売価格の上昇や、輸出関税を課してもなお輸出量が減少しない状況を受けて、2023年7月20日、バスマティ米・パ

図8 インドの碎米輸出量の推移(千トン)



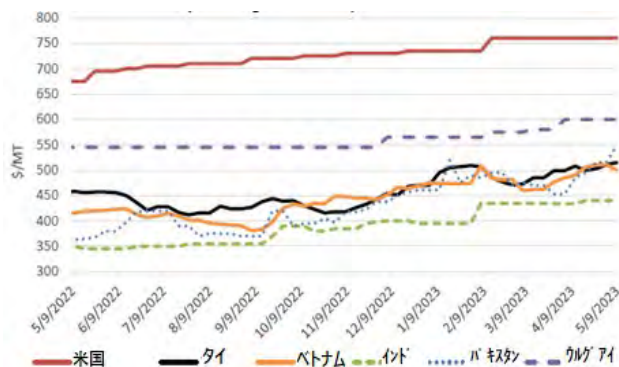
出典：インド商工省商務局 HP データをもとに農林水産省で作成

図9 インドネシアのコメ輸入量と輸入先国



出典：S&P Global Intelligence をもとに農林水産省で作成

図10 長粒米 FOB 価格の推移(ドル/トン)
(2022年5月から2023年5月)



出典：USDA 「Grain: World Markets and Trade」 (2023.5)

ーボイルド米以外の精米の輸出禁止を発表した。また、同年8月25日にはパーボイルド米に20%の輸出税を課すとともに、バスマティ米には1トンあたり1,200ドルの最低輸出価格を設定した。これらの措置は、2024年に総選挙を控え、インド政府の食料価格の高騰を解消しておきたいという狙いもあったとみられる。

（2）インドの輸出規制強化後の状況

2023年7月以降の輸入規制強化により、2023/24年のインドのコメ輸出量は1,443万トンと前年度から29%減少した（図4）。

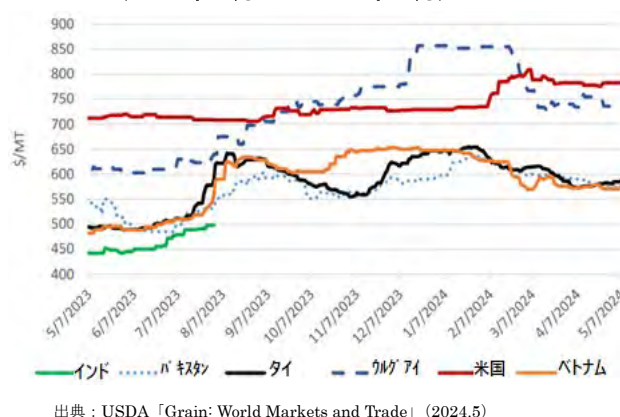
コメの輸出価格は、2023年7月に急上昇したあと数か月高止まりし、2024年1～2月頃にかけてピークを迎えた（図11）。

インドネシアでは、引き続き在庫補充と国内コメ価格高騰の緩和を目的とし輸入量を拡大した（図9）。中国では、インドの輸出規制とコメの国際価格の高騰により、2023/24年度（2023年7月～2024年6月）の輸入量は前年度比65%減の153万トン（USDA/PS&D）と、大幅に減少した。

ベナン、モザンビーク、マダガスカル等、インドのみからコメを輸入していたアフリカ各国は、輸入先国をパキスタンやタイにシフトした。モザンビーク等ではインドからの輸入を非バスマティ米から課税措置のみのパーボイルド米にシフトした。

タイ、ベトナム、パキスタンでは、インドの輸出規制により輸出を拡大させた（図4）。

図11 長粒米 FOB 価格の推移（ドル/トン）
（2023年5月から2024年5月）



5 コメ輸出規制の緩和 ～2024年9月から現在までの動向～

インド政府は2024年9月14日、2024/25年度のインドのコメ生産量が史上最高となる見込みを受け、国内で十分なコメの入手が可能になったとの判断から、バスマティ米の最低輸出価格を撤廃することを発表した。同月27日、粳米・玄米・パーボイルド米の輸出税を20%から10%に引き下げることを発表した。また、同月28日、非バスマティ米の輸出禁止を撤廃した。この発表時には最低輸出価格を490ドル/トンに設定したが、10月23日、非バスマティ米の最低輸出価格の撤廃を決定した。更に政府は2025年3月7日、輸出禁止していた碎米輸出の再開を発表した。

2022年9月9日以降の輸出規制内容の変遷は表1のとおり。

2025年4月中旬現在、2024/25年度のインドのコメ生産量が史上最高となる見込みを受けた2024年9月以降の一連の輸出規制緩和や、インドネシアや中国の増産によるコメ輸入量の減少等により、コメの国際価格は下落傾向で推移しており、インドのコメ輸出規制が開始された2022年9月とほぼ同水準となっている。

コメの国際価格は、コメの需給やコメ輸出入国の政策だけでなく、社会・政治情勢の変化や、小麦などの他の穀物の需給状況や価格変動の影響等を受け大きく変動することから、引き続き注視していきたい。

表 1 : インドのコメ輸出規制の変遷

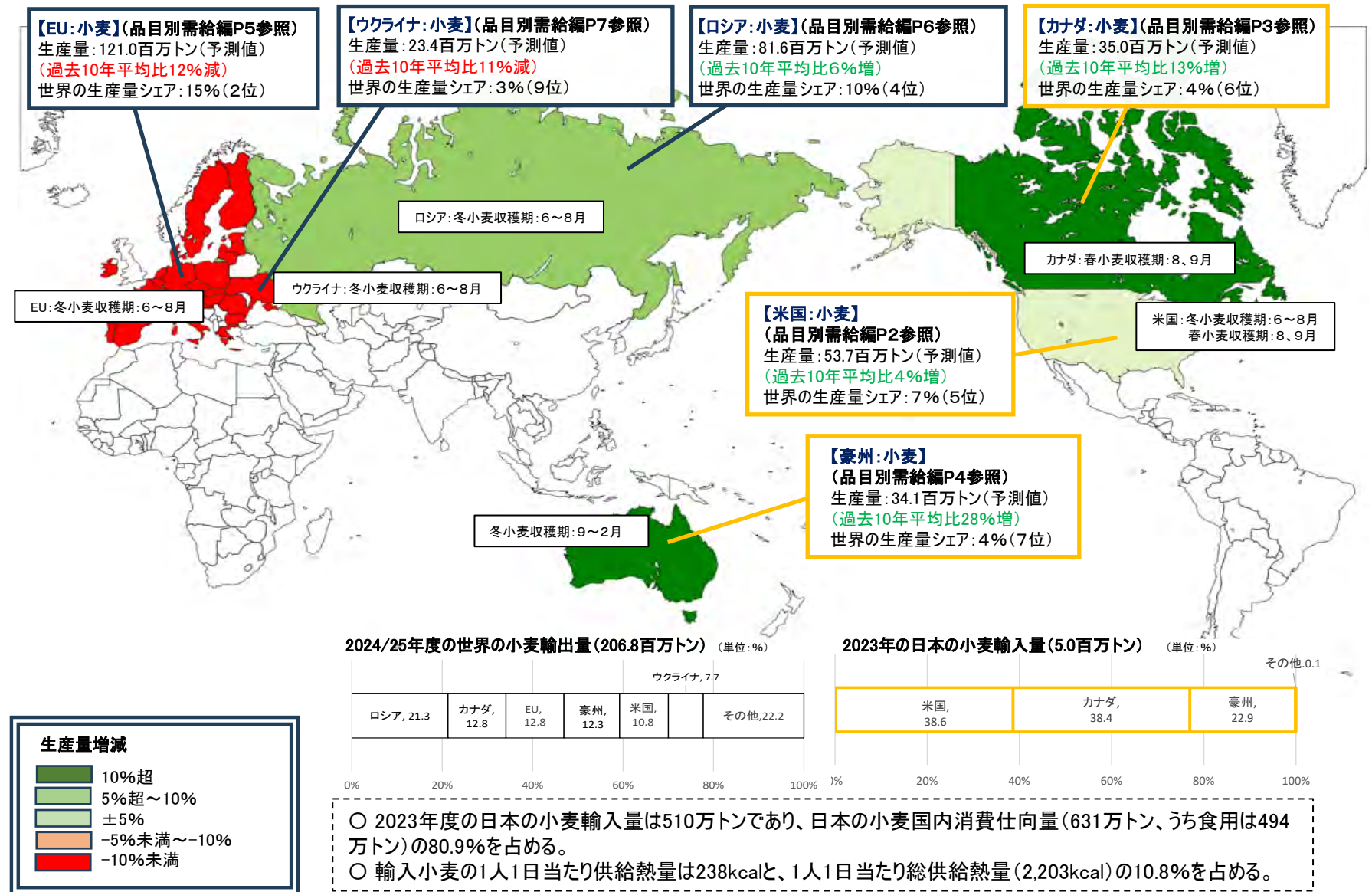
対象品目	HSコード	措置内容							2024年 輸出シェア (%)
		2022/9/9	2023/07/20	2023/08/25	2024/09/14	2024/09/27 -28	2024/10/23	2025/03/07	
全てのコメの 粳米	1006 10	輸出税 (20%)	輸出税 (20%)	輸出税 (20%)	輸出税 (20%)	輸出税 (10%)	輸出税 (10%)	輸出税 (10%)	1.99
全てのコメの 玄米	1006 20	輸出税 (20%)	輸出税 (20%)	輸出税 (20%)	輸出税 (20%)	輸出税 (10%)	輸出税 (10%)	輸出税 (10%)	2.31
バスマティ米の 精米	1006 30 20	12,000 ルピー/ トン (日本円で約 2万円/トン)	12,000 ルピー/ トン	12,000 ルピー/ トン 最低輸出価格 1,200 ドル/トン	12,000 ルピー/ トン	12,000 ルピー/ トン	12,000 ルピー/ トン	12,000 ルピー/ トン	32.92
パーボイルド米 の精米	1006 30 10	無税	無税	輸出税 (20%)	輸出税 (20%)	輸出税 (10%)	輸出税 (10%)	輸出税 (10%)	45.25
バスマティ米・ パーボイルド米 以外の精米	1006 30 90	輸出税 (20%)	輸出禁止	輸出禁止	輸出禁止	無税 最低輸出価格 490 ドル/トン	無税	無税	13.31
碎米	1006 40 00	輸出禁止	輸出禁止	輸出禁止	輸出禁止	輸出禁止	輸出禁止	輸出再開	4.22

※いずれの場合も食料安全保障上の理由でインド政府が認める場合は、輸出を許可。

※有機米は本措置の対象外。

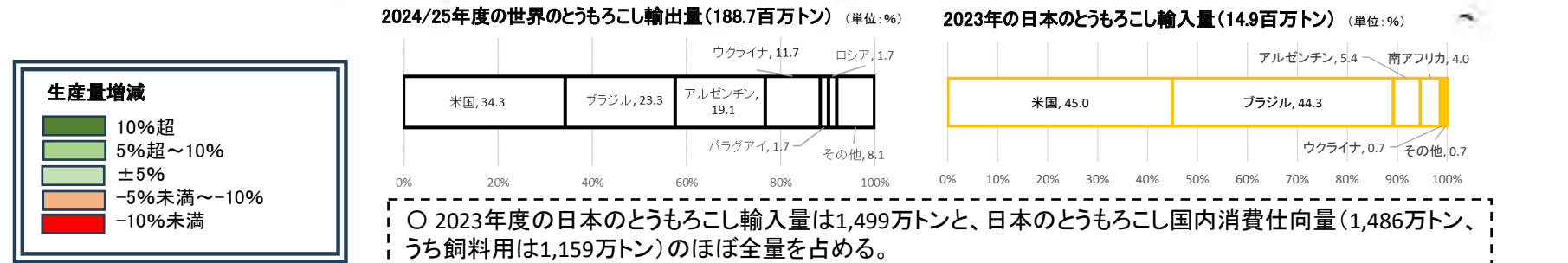
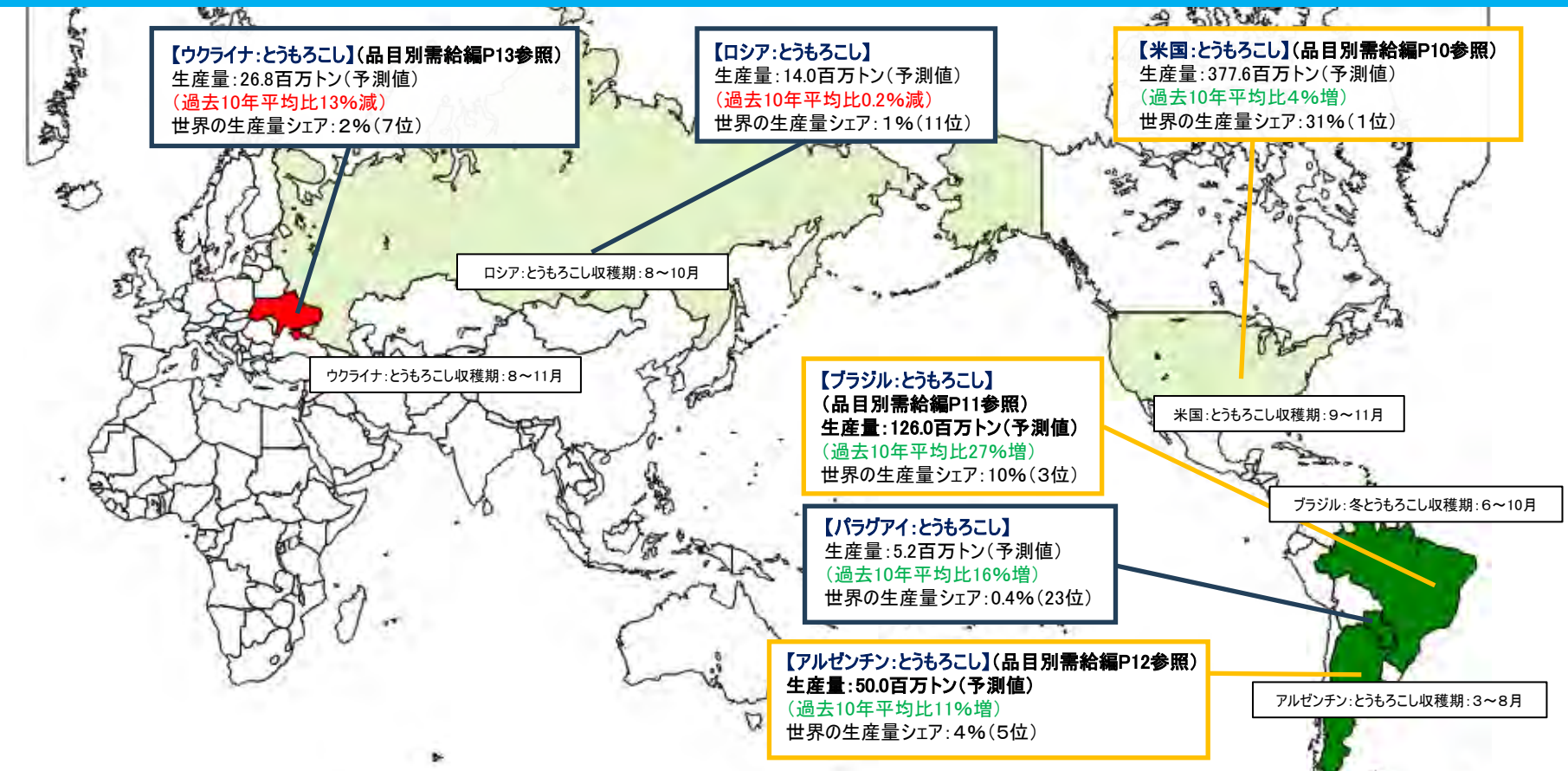
※赤字は輸出規制の強化、青字は緩和

資料1-1 小麦の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2024/25年度(4月版)



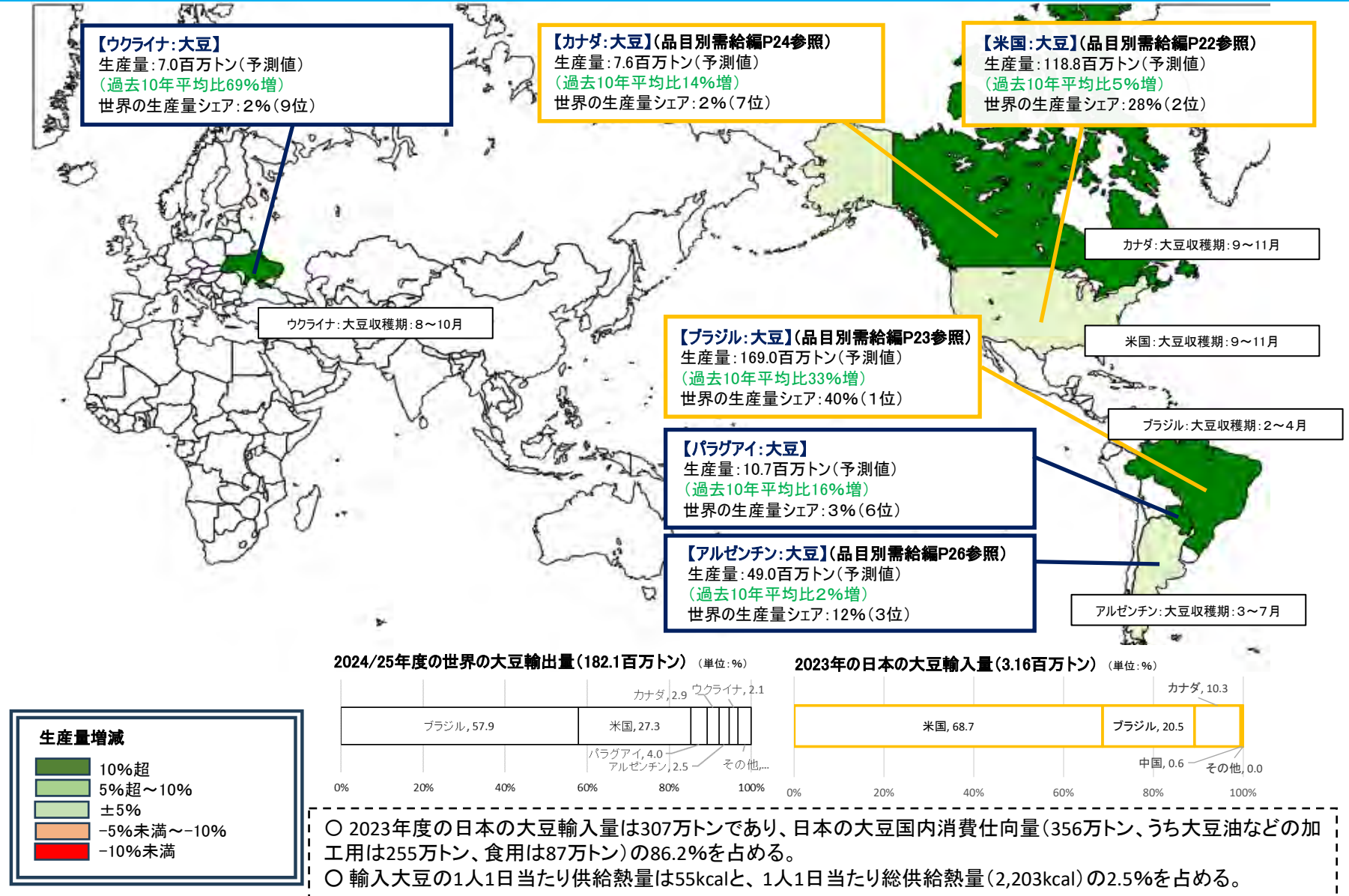
出典: USDA「PS&D」(2025.4)、財務省「貿易統計」(2023年の実績値)、農林水産省「令和5年度食料需給表」、AMIS「Supply and demand balances manual」をもとに農林水産省で作成。

資料1-2 とうもろこしの主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2024/25年度(4月版)



出典:USDA「PS&D」(2025.4)、財務省「貿易統計」(2023年の実績値)、農林水産省「令和5年度食料需給表」、AMIS「Supply and demand balances manual」をもとに農林水産省で作成。

資料1-3 大豆の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2024/25年度(4月版)

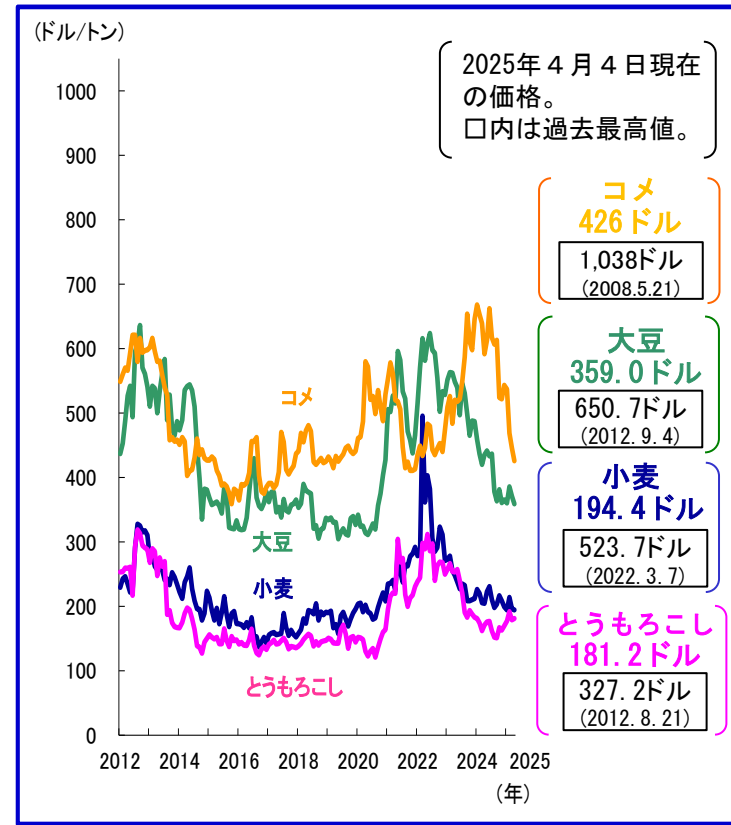
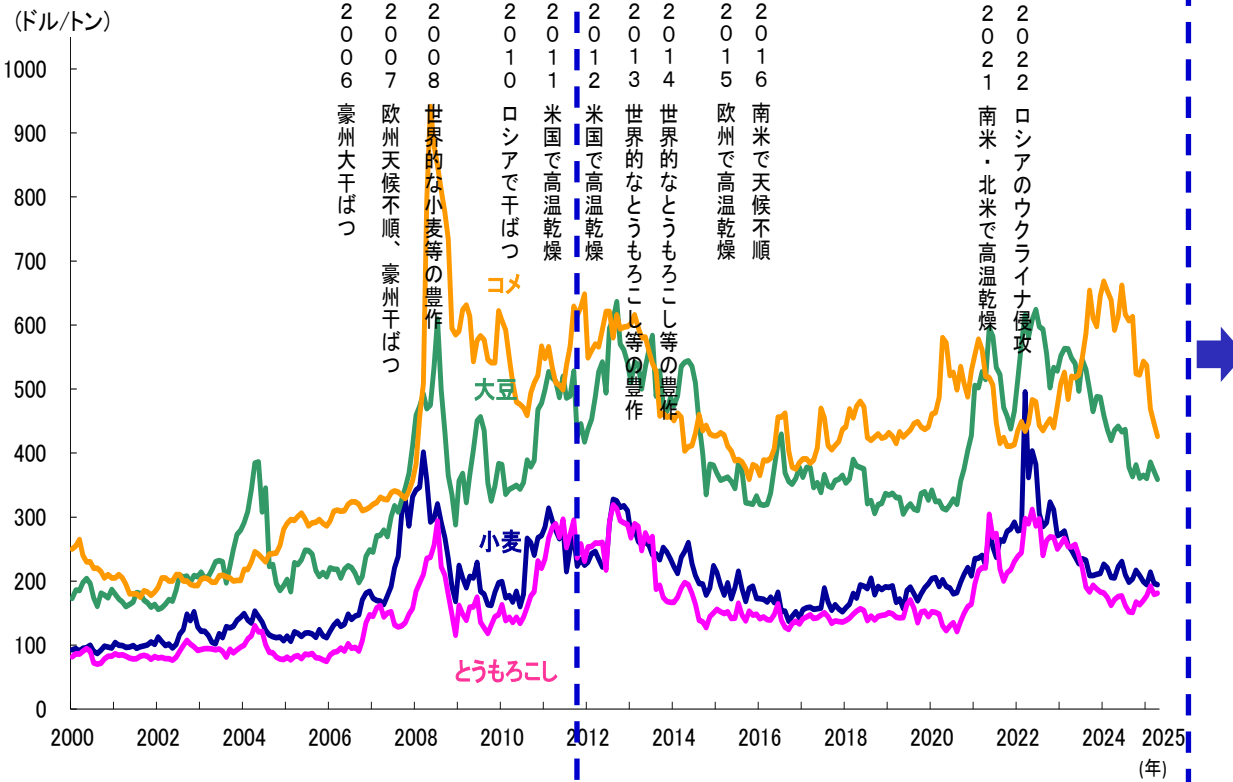


出典:USDA「PS&D」(2025.4)、財務省「貿易統計」(2023年の実績値)、農林水産省「令和5年度食料需給表」、AMIS「Supply and demand balances manual」をもとに農林水産省で作成。

資料 1－4 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで低下。コメは、2022年9月以降、インドの輸出規制強化、インドネシアの需要増等から上昇も、インドの輸出規制解除等を受け低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要等により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



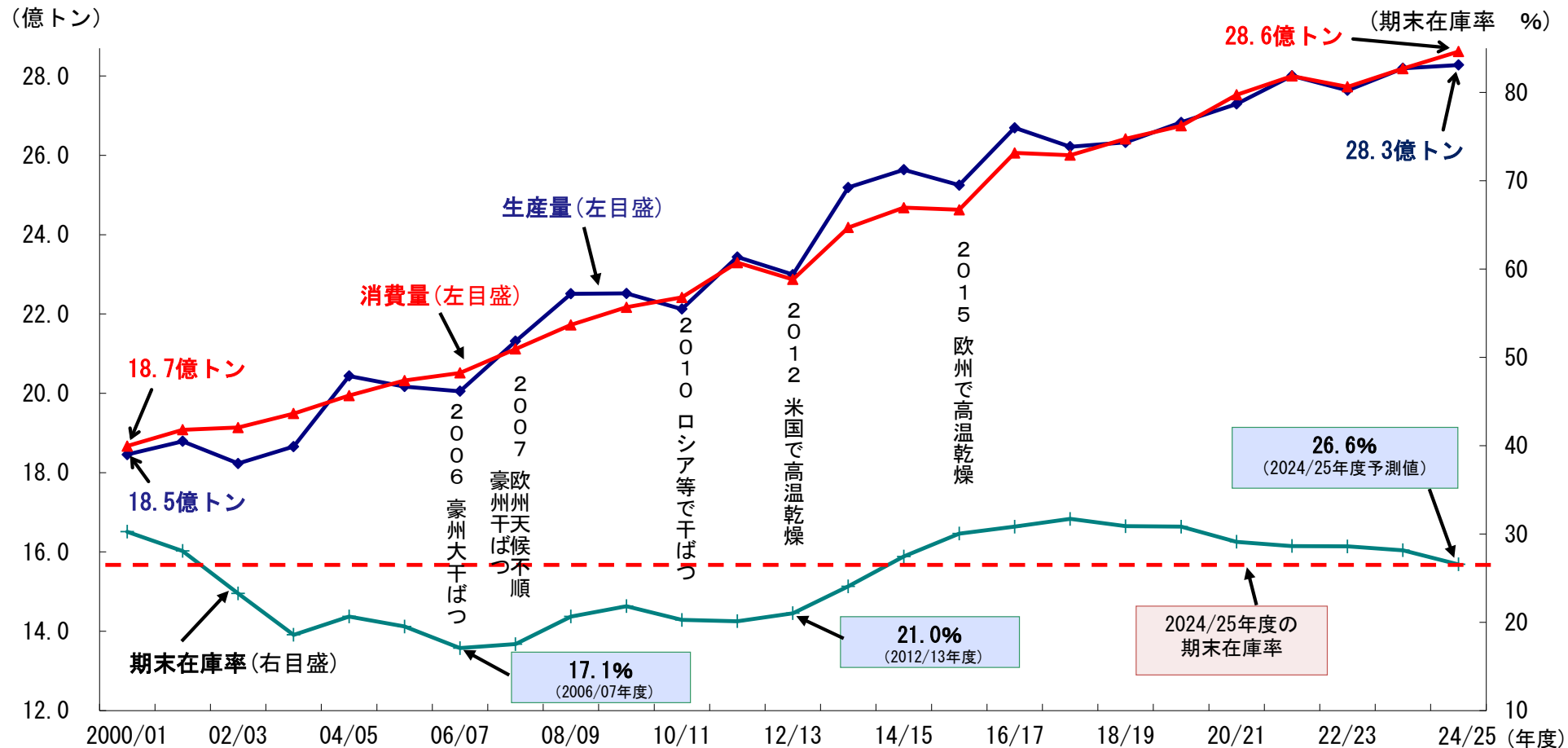
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2024/25年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2024/25年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、26.6%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

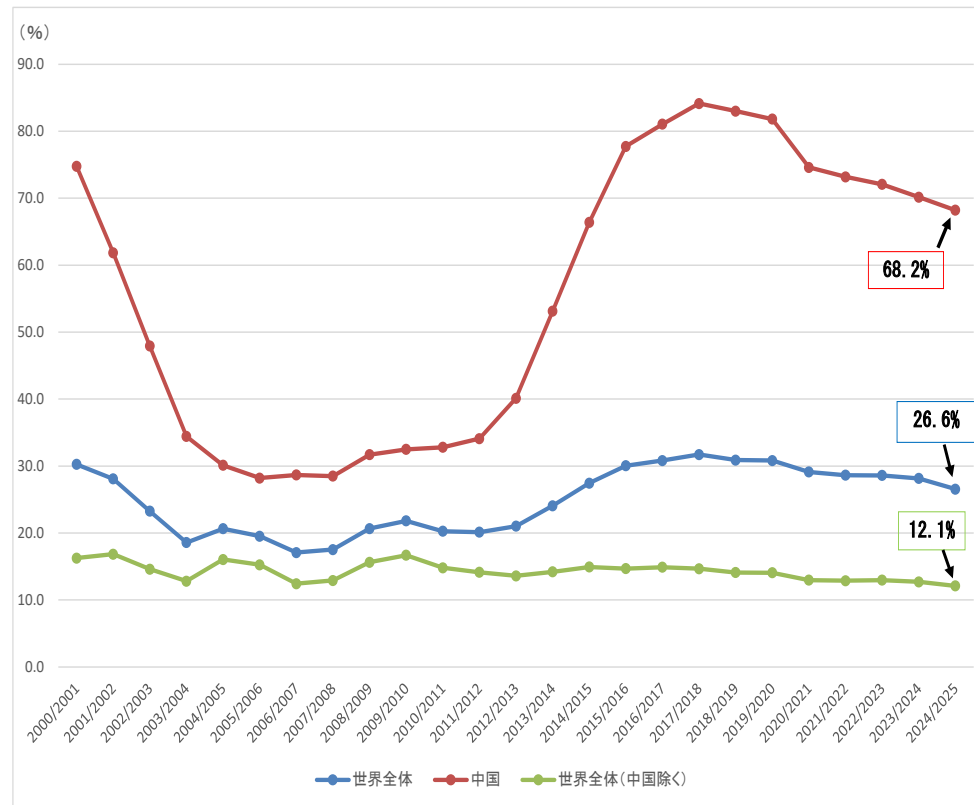


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(April 2025)、「FPS&D」

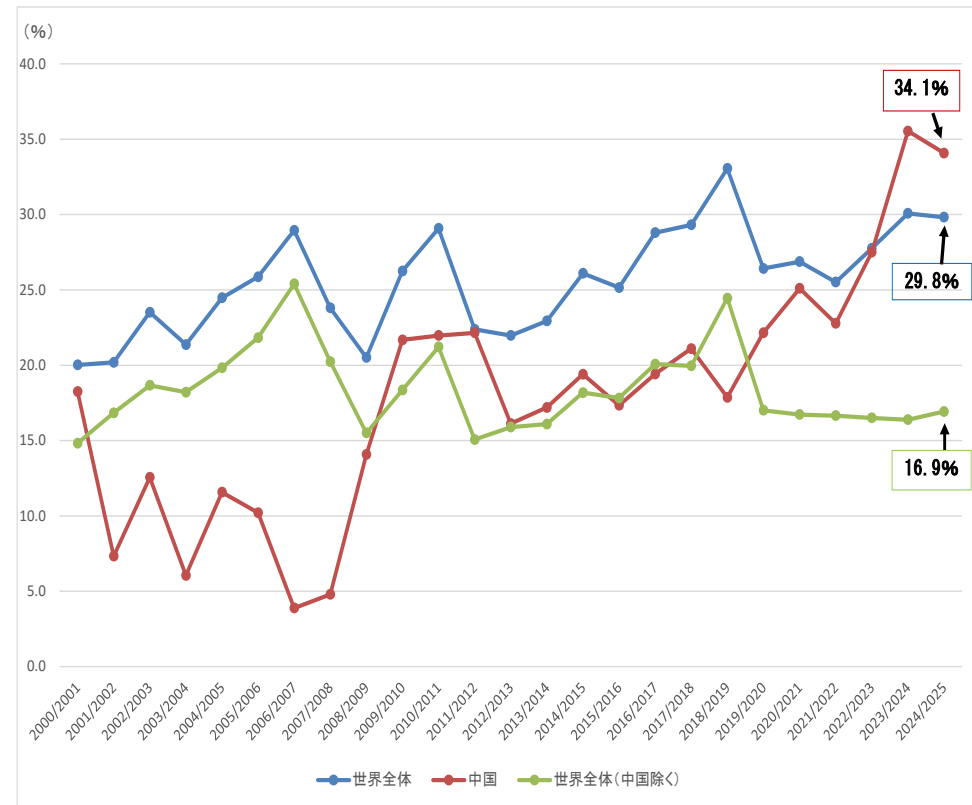
(注) なお、「FPS&D」については、最新の公表データを使用している。 — 15 —

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(April 10, 2025)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

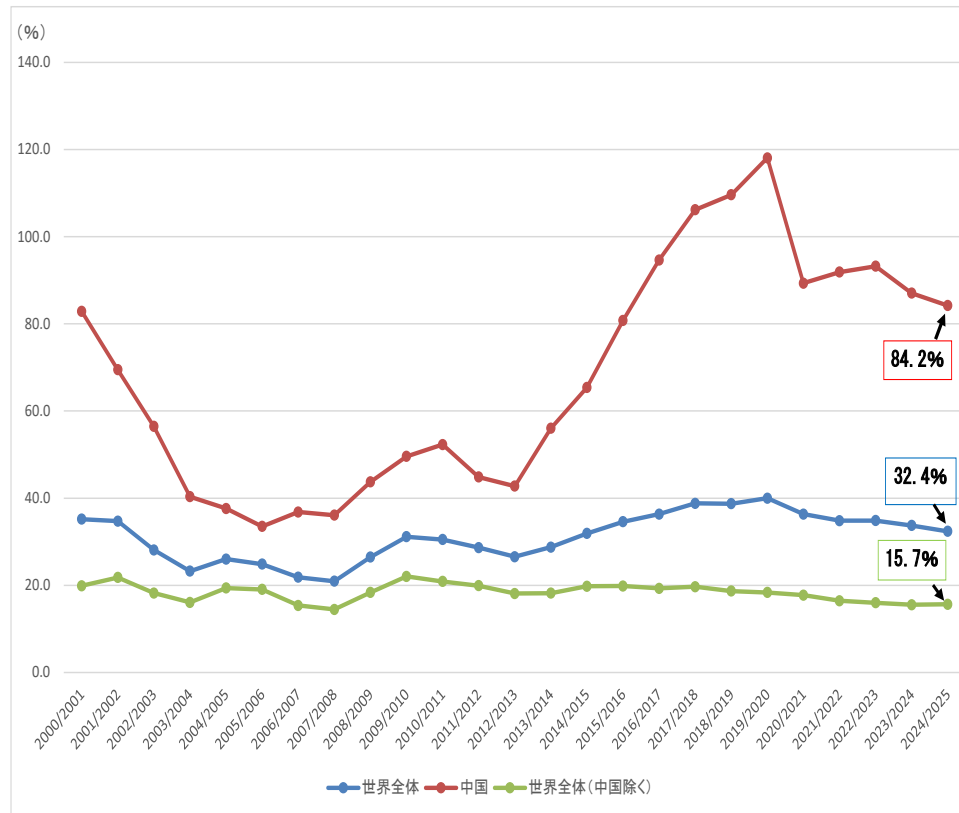
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

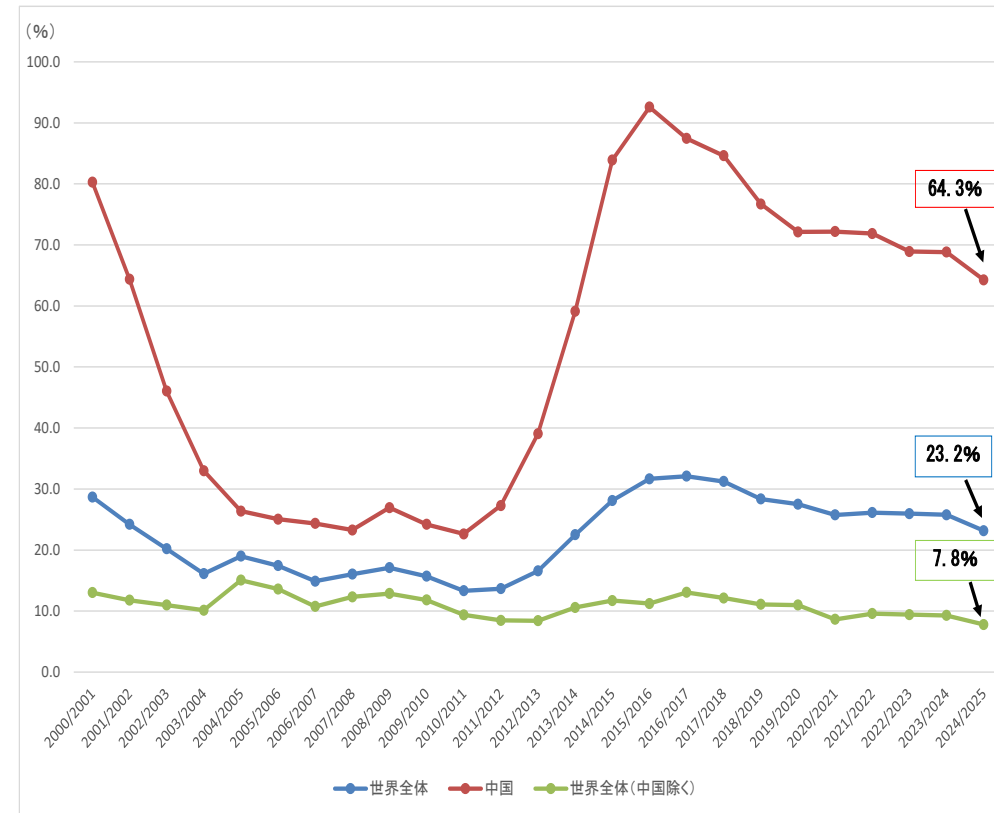
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(April 10, 2025)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

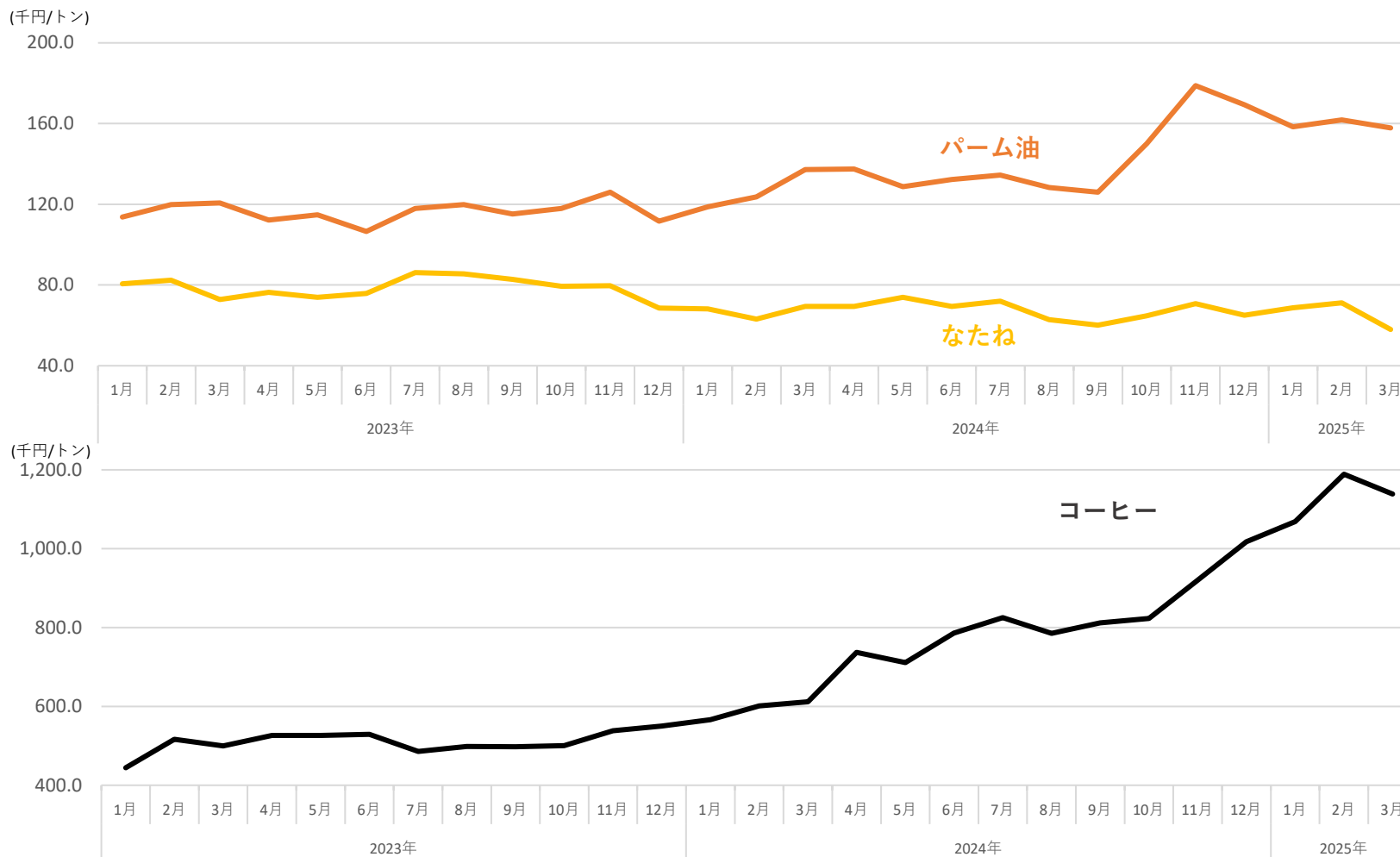
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 4－1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- パーム油については、インドネシアのバイオ燃料政策等の影響で2024年10月以降上昇している。
- なたねについては、安定している。
- コーヒーについては、ブラジルにおける天候不順やベトナムにおける干ばつによる収穫量減少等により、2024年以降上昇している。



2025年4月21日現在
□内は2023年1月以降
の最高値。

パーム油
157.8千円/トン

178.8千円/トン
(2024.11)

なたね
58.0千円/トン

86.2千円/トン
(2023.7)

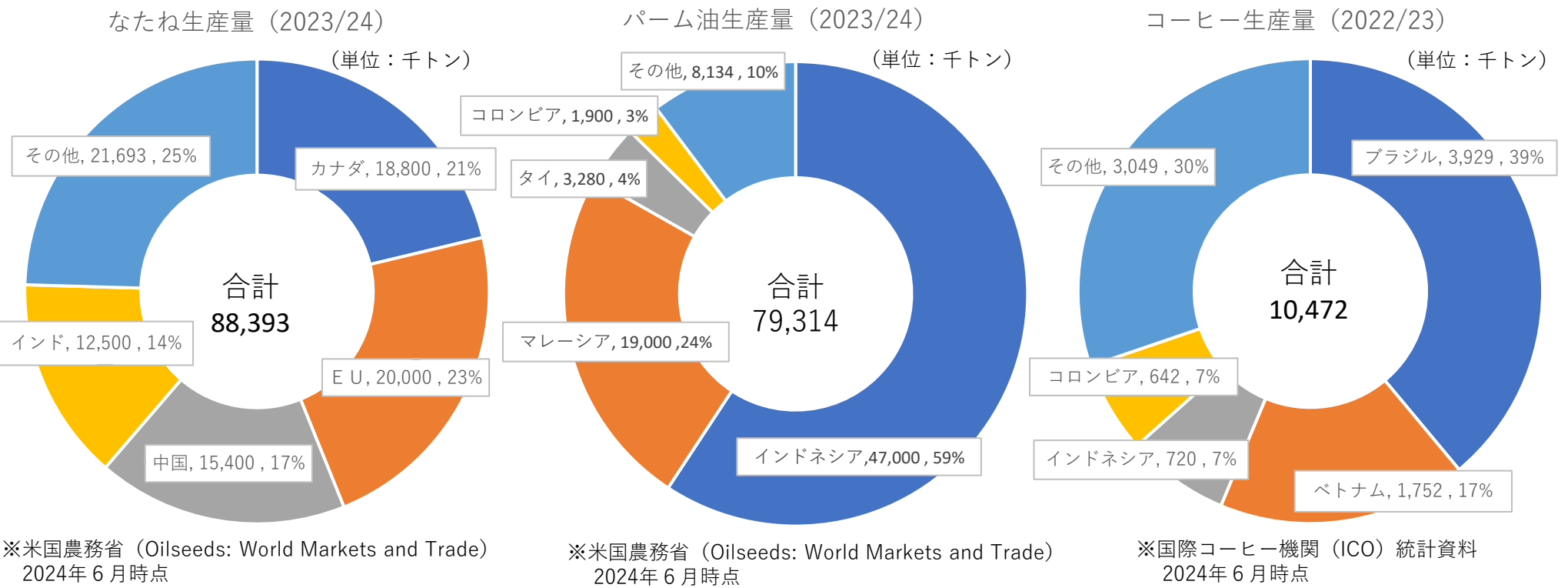
コーヒー
1138.7千円/トン

1188.8千円/トン
(2025.2)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグなたね市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

○主要生産国の生産状況



○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2023年））

なたね	輸入量	割合	パーム油	輸入量	割合	コーヒー	輸入量	割合
カナダ	1,039	51.4%	マレーシア	574	85.6%	ブラジル	124	35.0%
オーストラリア	983	48.6%	インドネシア	96	14.4%	ベトナム	99	27.9%
その他	0	0.0%	その他	0	0.1%	コロンビア	34	9.6%
合計	2.022	100.0%	合計	671	100.0%	その他	98	27.6%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6	68.2	63.1	69.4	69.3	73.9	69.4	71.9	62.8	60.2	64.8	70.8	65.1	68.7	71.2	58.0									
前月比	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1	99.5	92.5	109.9	99.9	106.6	93.8	103.7	87.3	126.1	107.7	109.3	91.9	105.7	103.7	81.4									
前年同月比	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2	84.6	76.6	95.4	90.8	100.1	91.4	83.5	73.5	812.1	81.5	89.0	94.9	100.7	112.9	83.5									

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6	118.7	123.7	137.2	137.4	128.7	132.2	134.4	128.3	126.1	150.1	178.8	169.4	158.4	161.8	157.8									
前月比	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5	106.4	104.2	110.9	100.2	93.7	102.7	101.7	95.4	98.2	119.1	119.1	94.7	93.5	102.2	97.6									
前年同月比	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1	104.4	103.2	113.7	122.6	112.2	124.1	114.0	107.1	109.5	127.3	141.8	151.8	133.4	130.8	115.0									

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コーヒー	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2	566.3	601.1	611.7	737.0	710.8	786.3	825.0	785.5	812.1	823.4	920.3	1017.3	1068.8	1188.8	1138.7									
前月比	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2	102.9	106.2	101.8	120.5	96.5	110.6	104.9	95.2	103.4	101.4	111.8	110.5	105.1	111.2	95.8									
前年同月比	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4	127.4	116.4	122.4	140.1	135.1	148.6	169.9	157.7	163.3	164.6	170.9	184.9	188.8	197.8	186.2									

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和7年3月の国内の加工食品の消費者物価指数は115.3～152.0（前年同月比で-2.5%～6.2%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和6年10月～令和7年3月）

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和6年10月～令和7年4月）

	R3	R4	R5	R6			R7					R3	R4	R5	R6			R7						
品目	平均	平均	平均	10月	11月	12月	1月	2月	3月	上昇率 (前年 同月比)	品目	平均	平均	平均	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)	
食パン	99.2	110.3	118.7	121.6	121.5	121.9	124.6	126.8	127.5	4.4%	食パン	98.6	107.8	114.5	118.2	117.4	118.2	122.5	124.0	124.5	124.7	0.2%	8.4%	
即席めん	100.1	107.6	119.7	118.4	122.0	120.1	118.0	121.2	120.8	-2.5%	即席めん	99.2	105.6	117.5	115.5	118.5	117.3	115.5	116.7	116.7	117.3	0.5%	0.0%	
豆腐	101.3	105.3	114.6	119.3	119.7	119.1	119.4	119.3	120.1	2.1%	豆腐	100.6	103.7	113.0	118.5	119.3	118.0	118.5	118.0	117.6	120.7	2.6%	1.5%	
食用油 (キャノーラ油)	106.9	144.4	160.2	146.9	149.8	149.9	149.0	147.6	149.2	0.6%	食用油 (キャノーラ油)	104.1	140.7	159.4	144.5	142.9	140.0	140.3	139.7	141.3	142.2	0.6%	-2.0%	
みそ	99.3	101.3	108.1	115.3	114.4	114.0	114.5	114.8	115.3	2.1%	みそ	99.2	100.1	105.9	110.0	110.6	108.8	109.8	110.0	110.4	110.2	-0.2%	3.3%	
マヨネーズ	105.6	125.6	149.5	152.7	153.1	153.1	153.9	152.8	152.0	-0.9%	マヨネーズ	102.2	117.7	139.8	140.6	138.6	140.6	140.6	139.9	138.9	138.9	0.0%	-1.0%	
チーズ	98.7	107.5	131.1	134.6	133.4	128.2	132.9	133.9	139.3	3.6%	チーズ	98.1	105.7	126.5	128.8	128.3	122.3	127.8	126.3	133.7	136.7	2.2%	10.4%	
バター	99.9	99.2	108.6	120.1	120.1	119.5	120.0	119.6	123.1	3.6%	バター	99.8	99.1	108.0	119.4	119.7	119.2	120.1	119.4	124.8	127.1	1.8%	6.2%	
生鮮食品を 除く食料	100.2	104.1	112.6	119.2	119.9	120.1	121.0	121.6	122.5	6.2%	注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。 注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。													

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

資料: 総務省消費者物価指数

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2025年5月号（4月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）24年2月の牛肉生産量は前年同月比6.8%減、肥育牛価格も高値で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003707.html

（豪州）25年の牛肉生産量は記録更新の予測、米国の関税措置の影響は不透明

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003708.html

（ウルグアイ）24年の牛と畜頭数、牛肉輸出量ともに3年連続の減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003709.html

◆豚肉

（メキシコ）25年の豚肉生産量、堅調な需要から前年比2.2%増と予測

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003710.html

（EU）24年の豚肉生産量は3年ぶりに前年比増、豚枝肉卸売価格は下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003711.html

◆牛乳・乳製品

（米国）25年1月の乳製品輸出、バターやチーズが前年同月比で大幅増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003713.html

（EU）2024年の乳用経産牛飼養頭数は3.4%減、生乳出荷量は0.6%増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003714.html

（NZ）堅調な需要から、チーズなどの輸出が好調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003715.html

（中国）25年も生乳価格は低水準、乳製品輸入量は増加傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003716.html

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）消費量の微増から期末在庫はかなりの程度減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003717.html

（世界：大豆）生産量は据え置きも、消費量の上方修正から大豆期末在庫は下方修正

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003718.html

（米国）米国の生産量はやや減少、生産者価格は前年度に続き下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003719.html

（ブラジル）2024/25年度トウモロコシ、大豆とも生産予測を上方修正

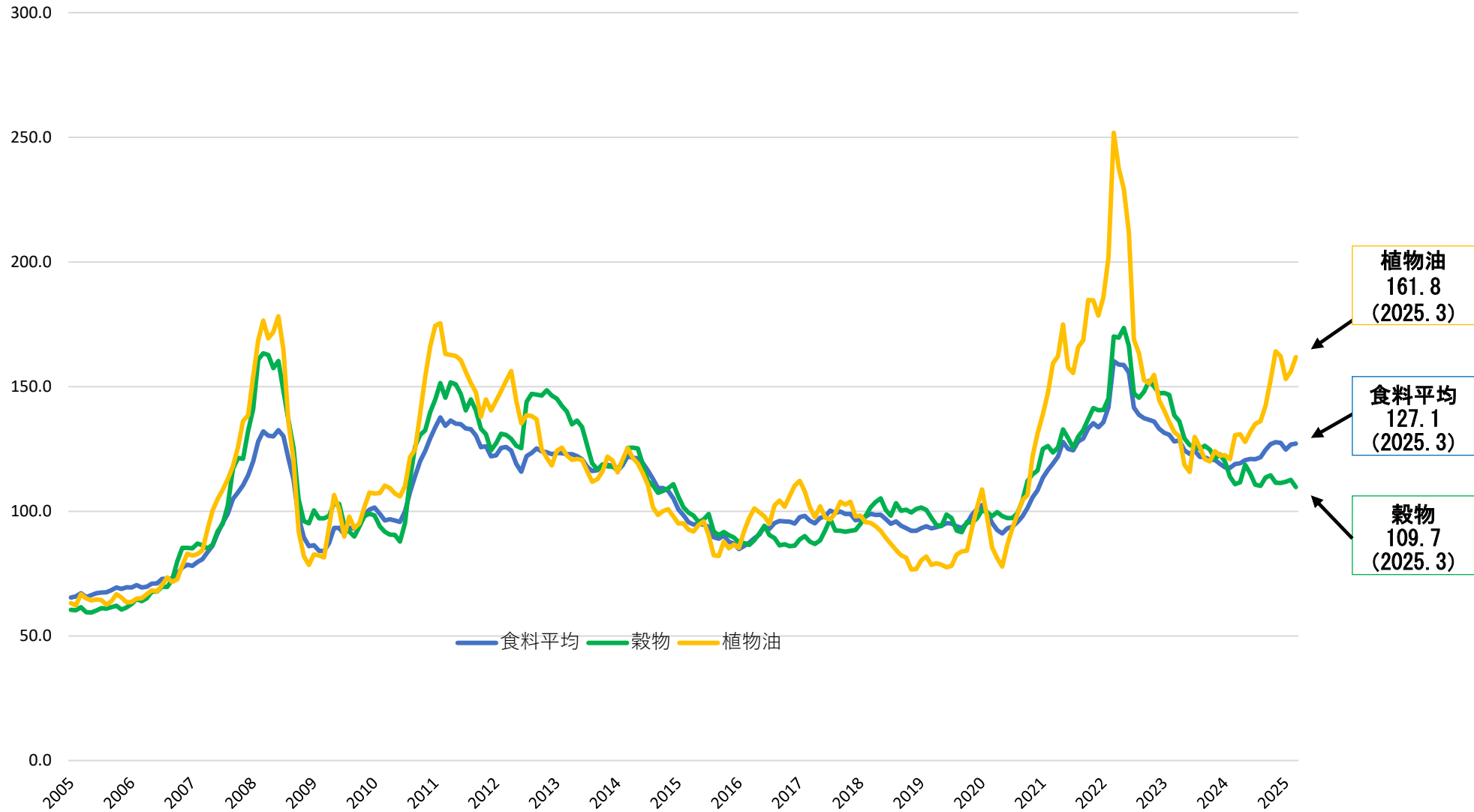
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003720.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003721.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2025.3)より作成

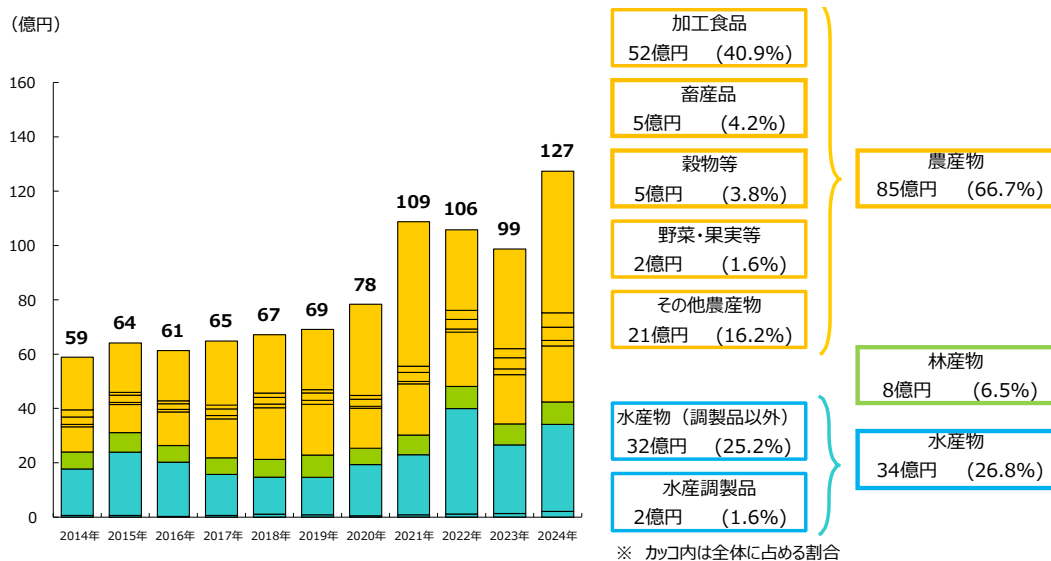
注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

インドネシアの食料事情②：日本からの農林水産物・食品輸出

1. はじめに

日本からインドネシアへの農林水産物・食品の輸出は、2021 年以降、約 100 億円前後で推移しています。2024 年の日本から各国への国別輸出先（金額ベース）で見た場合、インドネシアは世界 17 位、東南アジアでは 6 位の位置となっています。世界への輸出額が 1 兆 5,071 億円であるため、まだ全体の中で 1%にも満たない規模です。

（図 1）インドネシア向け農林水産物・食品の輸出額の推移（2014～2024 年）



出典：農林水産省「2024 年農林水産物・食品の輸出実績（国・地域別）」より抜粋

一方、同じ「食」の観点から当地の外食産業を見てみると、特にインドネシア最大の都市ジャカルタでは現在、至るところに大規模な高級ショッピングモールが立ち並び、その中には国際色豊かな高級料理店が数多く出店しています。その中でも日本食は特に人気が高く、東南アジアではタイに次いで約 4,000 店舗もの日本食レストランが国内全土に存在し、インドネシア人から広く支持されています。

スーパーマーケットでは、必ずしも日本の食品を十分手に入れることが出来るとは限らず、主に調味料やお菓子などの加工食品が中心ですが、外食産業においては、日本の有名企業が多数進出しており、寿司、ラーメン、うどん、カレーライス、焼き肉、ステーキ、牛丼など、日本の本格的な味を楽しむことが出来ます。これらの多くの日本食レストランで、使用されている食材の大部分は、現地産や他国からの輸入品ですが、一部では日本産の食材も使われています。これは、インドネシアにおける日本食の普及を後押しするとともに、日本からの農林水産物・食品の輸出促進にも貢献していると考えられます。

今回は、インドネシアへの農林水産物・食品の輸出可能性について紹介します。

【今月のコラム】

2. 日本からのインドネシアへの農林水産物・食品の輸出可能性について

(1) インドネシア向け農林水産物・食品の輸出状況

日本からインドネシアへの農林水産物・食品の輸出品目は、農産物よりも水産物や加工食品が上位を占めていることが分かります。(表1)

(表1) インドネシア向け農林水産物・食品の輸出 (品目別内訳)

	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
1	さば 736百万円	さば 1,129百万円	さば 1,030百万円	さば 565百万円	配合調製飼料 384百万円	緑茶 357百万円	かつお・まぐろ類 713百万円	かつお・まぐろ類 721百万円	かつお・まぐろ類 898百万円	錦鯉 673百万円	ホタテ貝 (生鮮等) 931百万円
2	かつお・まぐろ類 452百万円	製材 303百万円	播種用の種等 291百万円	播種用の種等 437百万円	播種用の種等 382百万円	製材 341百万円	錦鯉 420百万円	錦鯉 582百万円	さば 706百万円	いわし 595百万円	錦鯉 531百万円
3	播種用の種等 358百万円	錦鯉等 299百万円	さけ・ます 247百万円	ソース混合調味料 290百万円	かつお・まぐろ類 263百万円	播種用の種等 339百万円	播種用の種等 363百万円	配合調製飼料 431百万円	錦鯉 701百万円	ソース混合調味料 395百万円	ソース混合調味料 461百万円
4	錦鯉等 258百万円	配合調製飼料 252百万円	配合調製飼料 237百万円	錦鯉等 241百万円	さば 260百万円	配合調製飼料 314百万円	配合調製飼料 303百万円	さば 402百万円	いわし 460百万円	緑茶 363百万円	牛肉 448百万円
5	製材加工材 221百万円	ソース混合調味料 222百万円	製材 218百万円	配合調製飼料 237百万円	ソース混合調味料 251百万円	錦鯉 313百万円	ソース混合調味料 285百万円	播種用の種等 361百万円	播種用の種等 402百万円	配合調製飼料 362百万円	緑茶 444百万円
6	配合調製飼料 220百万円	播種用の種等 202百万円	ソース混合調味料 211百万円	製材 216百万円	製材 236百万円	ソース混合調味料 251百万円	さば 249百万円	パーティクルボード 256百万円	配合調製飼料 379百万円	牛肉 281百万円	かつお・まぐろ類 380百万円
7	菓子 (米菓を除く) 197百万円	かつお・まぐろ類 190百万円	メントール 210百万円	メントール 188百万円	錦鯉等 220百万円	かつお・まぐろ類 244百万円	さけ・ます 180百万円	ソース混合調味料 225百万円	ソース混合調味料 351百万円	製材 249百万円	配合調製飼料 356百万円
8	ソース混合調味料 175百万円	メントール 141百万円	錦鯉等 203百万円	緑茶 173百万円	たばこ 217百万円	さば 214百万円	製材 160百万円	緑茶 203百万円	緑茶 284百万円	さば 204百万円	たら 282百万円
9	ペーガー・製品製造用配合物 155百万円	植物の液汁エキス 118百万円	植物の液汁エキス 123百万円	植物の液汁エキス 138百万円	緑茶 195百万円	植物の液汁エキス 162百万円	パーティクルボード 156百万円	清涼飲料水 200百万円	牛肉 268百万円	アルコール飲料 189百万円	アルコール飲料 251百万円
10	ゼラチン 133百万円	ペーガー・製品製造用配合物 107百万円	菓子 (米菓を除く) 123百万円	さけ・ます 116百万円	植物の液汁エキス 192百万円	たばこ 159百万円	緑茶 147百万円	牛肉 185百万円	製材 258百万円	清涼飲料水 166百万円	パーティクルボード 202百万円

出典：農林水産省「2024 年農林水産物・食品の輸出実績 (国・地域別)」より抜粋

(2) 農産物の輸出可能性

輸出品の少ない農産物ですが、日本からインドネシアに輸出が出来る品目は、ぶどう、りんご、たまねぎ、とうがらし、きのこ、アーモンド、チンゲンサイ、はくさい、ラディッシュ、だいこん、ネクタリン、桃、梨、レタス、コメ、乾燥とうがらし、緑茶/紅茶が認められており、日本政府としては輸出可能品目が増えるように取り組んでいるところです。

この1年間、スーパーマーケットの売り場を観察してみると、日本産の緑茶、りんご、桃、梨、コメをみかけることが出来ました。しかし、これらは基本的に一部の日本食を多く扱ったところや日系のスーパーが中心であり、地元のスーパーマーケットの棚づくりには至っていないのが実情です。

果物についてはまだ日本ブランドが確立されていません。当地では華僑を中心に旧正月にきれいな箱に入れられたみかんなどの贈り物をする文化はありますので、タイミングをあわせて日本全体での果物のキャンペーン等による継続的なブランド化の試みが必要だと感じています。また、インドネシアはマンゴーに代表される美味しい果物がたくさんある果物王国でもあり、例えば桃などの果物をプレゼントされても初めて見るので食べ方が分からないという人もおり、販売拡大には粘り強さが必要です。当地へは日本の地方自治体などから桃やコメの輸出に関する相談はあるものの、数としては多くはないのが現状です。自治体からの果物の販売キャンペーンがあれば教えてほしいというスーパーマーケットもあり

【今月のコラム】

ますので、最初のマッチングなどは当方でお手伝い出来ると思っています。

味や形、色などに強みがありブランド化の可能性が十分にある果物と比べると、差別化が難しい野菜については、価格競争による戦略が一つの選択肢になるかもしれません。例えば、ほとんどのスーパーマーケットでたまねぎ（主に輸入品）は日本円換算で年間を通して約 800 円/kg 程度で販売されていました。たまねぎは日本から大ロットで船便を活用するなど、輸送コストの低減に注力すれば、価格競争でも優位に立てる可能性がある注目品目と考えられます。

和牛については当地でも広く認知されてきており、年々その輸出量は増加しています。ジャカルタだけでなく、スラバヤ（ジャワ島北東部の湾岸都市）やメダン（スワトラ島北部の都市）などの第 2、第 3 の都市への販路拡大などまだまだ輸出量を伸ばせる品目であると考えられます。また、経済成長や人口増加が見込まれるインドネシアでは、アルコール飲料の市場拡大が期待されます。イスラム教徒以外のインドネシア人（約 3,000 万人）や外国人による需要に加え、日本食レストランの多さも追い風となり、昨年は新たに日本のビールメーカーが当地での販売を開始しました。これにより、日本のビールのバラエティも徐々に広がりを見せています。

（3）ハラル認証の取得によるマーケットの獲得

インドネシアは世界最大のイスラム教徒が住む国であり、イスラム教徒にとっては安心して口にすることが出来るハラル（イスラム教の教えにおいて許されるもの）認証を受けた食品が求められています。日本人から見たその特徴は、第 1 に辛い、そして甘い、油っぽい、鶏肉料理が多い（イスラム教徒は、基本的に豚肉、アルコールは飲食しません。）ということでしょうか。

これまでは、料理店や加工食品もハラル認証は任意でしたが、2026 年 10 月 17 日（当初は 2024 年 10 月 17 日より完全義務化の予定でありましたが、準備が不十分であるため、地元企業や日本政府も含めた外国政府の延期の要望により最大 2 年延長が決定）より完全義務化が始まります。完全義務化が始まると加工食品（加工されていない青果物や水産物等は対象外）は、ハラル認証を受けたものかノンハラルマークを付けた食品しか当地に輸出・流通・販売が出来ないこととなります（加工食品は引き続き BPOM¹申請・登録が必要）。これまでは任意であったため小ロットでも販売していた日本の加工食品もハラル認証を取得するためには一定のコストと手間がかかるため輸出を断念する企業も出てくる可能性があります。ハラル認証への対応は、中国や韓国が先行している一方で、ヨーロッパ諸国は対応が遅れているのが現状です。この状況をチャンスと捉え、マーケット調査を行いながら、日本の加工食品もハラル認証を取得して市場に参入していくという戦略も考えられます。

自国での食品の生産、製造を主とする食料安全保障に重きを置いているインドネシアで

¹ インドネシア医薬品食品監督庁。加工食品や化粧品、医薬品、健康補助食品などの安全性を監督する政府機関で、食品添加物や食品包装材料を含む加工食品の安全性を確保し、食品汚染物質に関する規制を制定する責任を負っている。

【今月のコラム】

すが、今後も人口増加や経済成長が続くと見込まれており、これに伴い、消費者の購買意欲が向上し、より多くの高品質な食品や農産物の需要が見込まれます。高品質な日本の農産物や加工食品等は、輸出条件を満たすまでの粘り強さや販売戦略は必要ですが、日本企業にとっても新たなビジネスチャンスは広がっています。

3. おわりに

最近、日本からの食品等の輸出先として世界第2位（2,210億円）である香港の日本食市場の状況を見る機会がありました。10年前に日本から香港への食品等の輸出促進業務に携わったことがあります。最近見た香港の日本食市場は「量」と「質」の両面でさらに進化している様子が印象的でした。

「量」の面では、かつて地元の中流スーパーや一般のお菓子店では、日本のお菓子をはじめとする加工食品はわずかにしか見られませんでした。現在では、日本の加工食品で店内が溢れかえるほどになっています。「質」の面では、以前は高級スーパーで見かけるお寿司のネタにサーモンが多く使われていましたが、今では、日本にも劣らない品揃えと美しく整えられたお寿司が数多く販売されています。さらに、街中の庶民の果物店をのぞいてみると、香港では日本産果物のブランドが確立されており、イチゴが都道府県名と品種名付きで複数種類、所狭しと並べられていました。そのような場所でも日本産果物が販売されていることに、改めて驚かされました。

外食産業においても、日本産米を使ったおにぎり店が街の至る所で見られ、コンビニでは日本と変わらない「青森産ホタテ」のラベルが付いたおにぎりが販売されるなど、おにぎりが香港で着実に定着しつつある様子がうかがえました。現在、外食産業に関しては、インドネシアも香港にひけをとらない水準にあると思われますが、日本産米市場の拡大や日本産果物のブランド確立といった面では、香港の日本食市場から学べる点も多いと感じました。

香港は食品等の輸出が比較的容易に行える市場である一方、インドネシアは東南アジアのなかでも商品登録や手続き等に多くの規制があり、粘り強さが求められる市場です。それでも、10年後にはインドネシア市場でも日本食品が「量」、「質」とともに進化していることを期待しています。

今回は、インドネシアにおける食料安全保障政策について紹介したいと思います。

文責：小宮 元晃（在インドネシア日本国大使館 一等書記官）

【今月のコラム】

【データ・出典】

農林水産省 「2024 年の農林水産物・食品の輸出実績」について

https://www.maff.go.jp/j/shokusan/export/e_info/attach/pdf/zisseki-259.pdf

JETRO 日本からの輸出に関する制度

<https://www.jetro.go.jp/world/asia/idn/foods/exportguide/vegetables.html>

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴などについてご紹介したいと思います。

(品目別需給編)

I 穀物

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<USDA の見通し> 2024/25 年度

生産量 前年度比  前月比 

- ・ウルグアイ、ベラルーシ等で上方修正されたものの、サウジアラビア、EU等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

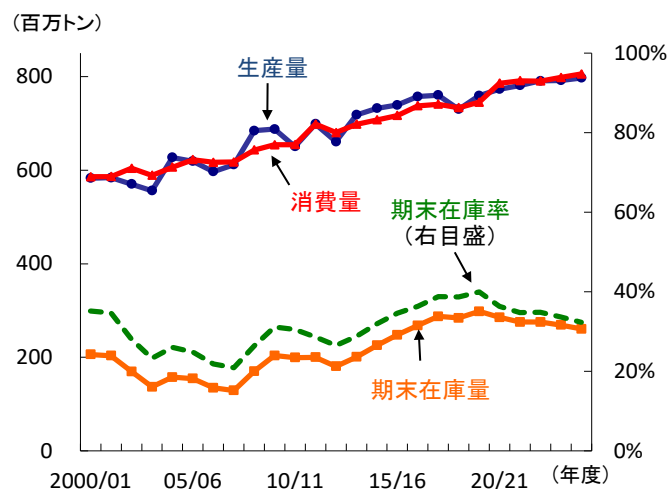
消費量 前年度比  前月比 

- ・ブラジル等で上方修正されたものの、インド、中国等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比  前月比 

- ・カナダ、ウクライナ等で上方修正されたものの、ロシア、EU、豪州等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料:USDA「PS&D」(2025. 4. 10) をもとに農林水産省にて作成

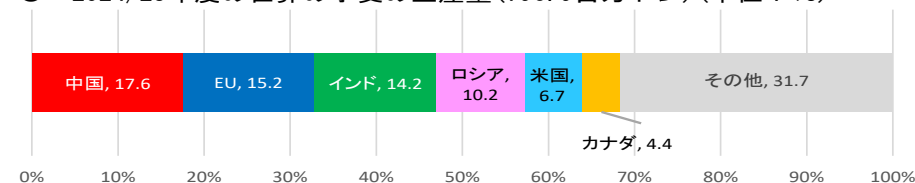
◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

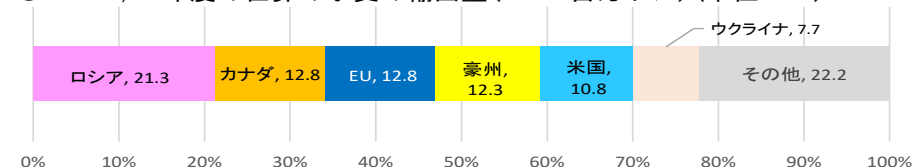
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	790.5	791.6	796.9	▲ 0.4	0.7
消 費 量	790.4	797.9	805.2	▲ 1.5	0.9
うち飼料用	153.0	159.3	154.6	▲ 0.3	▲ 3.0
輸 出 量	221.9	221.2	206.8	▲ 1.3	▲ 6.5
輸 入 量	213.0	222.3	198.8	▲ 3.9	▲ 10.5
期末在庫量	275.4	269.1	260.7	0.6	▲ 3.1
期末在庫率	34.8%	33.7%	32.4%	0.1	▲ 1.3

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(10 April 2025)

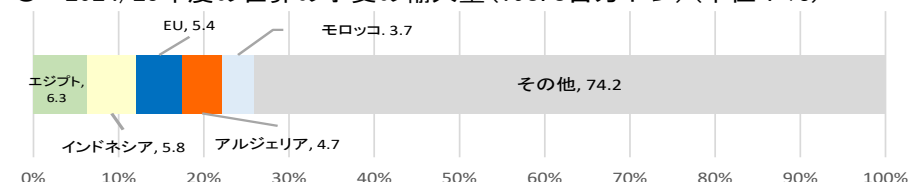
○ 2024/25年度の世界の小麦の生産量(796.9百万トン)(単位: %)



○ 2024/25年度の世界の小麦の輸出量(206.8百万トン)(単位: %)



○ 2024/25年度の世界の小麦の輸入量(198.8百万トン)(単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2025/26 年度の作付意向面積は前年度から 1.6%減となる見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 53.7 百万トンと、収穫面積及び単収が前年度より増加することから前年度と比べ 9.3%増、過去 5 年平均（48.2 百万トン）と比べても 11.4%増となる見込み。

同「Prospective Plantings」（2025.3.31）によれば、2025/26 年度の小麦の作付意向面積は 18.35 百万ヘクタールと、ワシントン州等で増加するものの、カンザス州、ノースダコタ州、オクラホマ州等で減少することから、前年度（18.65 百万ヘクタール）と比べ 1.6%減となる見込み。種類別には、冬小麦が 13.48 百万ヘクタールと前年度と比べ 0.2%減。春小麦が 4.05 百万ヘクタールと前年度と比べ 5.7%減。デュラム小麦も 0.82 百万ヘクタールと前年度と比べ 2.4%減。

同「Wheat Outlook」（2025.4.14）及び「Crop Progress」（2025.4.14）によれば、2025/26 年度の冬小麦の作柄は、「良～やや良」の割合が、4 月 6 日現在、カンザス州、ワシントン州、コロラド州、アイダホ州で前年同期と比べ増加している一方、サウスダコタ州、ネブラスカ州、オクラホマ州、テキサス州等では減少しており、全体では、4 月 13 日現在、47%（前年同期 55%）となっている。4 月 8 日現在、冬小麦生産の約 32%が干ばつ地域にあると推定され、3 月 4 日から 8 ポイント増と影響が懸念される。なお、4 月 13 日現在、冬小麦の 8 %（前年同期 10%、過去 5 年平均 8 %）が出穂しており、春小麦の作付進捗率は 7 %（前年同期 6 %、過去 5 年平均 7 %）となっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、新規販売の鈍化を受け前月予測から 0.4 百万トン下方修正され 22.3 百万トンとなるものの、増産による輸出余力の増大に加え、EU、ロシア及びウクライナの輸出余力の減少等を受け、前年度と比べ 16.0%増。一方で過去 5 年平均（23.0 百万トン）と比べ 3.0%減となる見込み。2024/25 年度のうち 2024 年 6 月～2025 年 2 月の輸出量は、1,573.8 万トンと前年同期（1,311.7 万トン）と比べ 20.0%増。国別にはメキシコ 287.1 万トン（18.2%）、フィリピン 183.6 万トン（11.7%）、日本 181.4 万トン（11.5%）の順となっている。一方で、中国への輸出は 15.3 万トン（1.0%）と大きく減少している。

2024/25 年度の期末在庫量は、輸出量の引下げ及び輸入量の引上げ等を受け前月予測から 0.7 百万トン上方修正され 23.0 百万トンと、前年度と比べ 21.5%増となる見込み。

小麦－米国（冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年6月～25年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	44.9	49.1	53.7	-	9.3
消 費 量	30.3	30.2	31.3	▲ 0.1	3.9
うち飼料用	2.0	2.3	3.3	-	41.6
輸 出 量	20.7	19.2	22.3	▲ 0.4	16.0
輸 入 量	3.3	3.8	4.1	0.3	8.5
期末在庫量	15.5	19.0	23.0	0.7	21.5
期末在庫率	30.4%	38.4%	42.9%	1.7	4.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	14.36	15.01	15.57	-	3.7
単収(t/ha)	3.13	3.27	3.45	-	5.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(10 April 2025)

表 米国産小麦の作付面積の推移

単位:百万ヘクタール

	2023/24年度	2024/25年度	2025/26年度	対前年度 増減率(%)
冬小麦	14.85	13.51	13.48	-0.2
春小麦	4.53	4.30	4.05	-5.7
デュラム小麦	0.68	0.84	0.82	-2.4
小麦計	20.06	18.65	18.35	-1.6

資料：USDA「Prospective Plantings」（2025.3.31）をもとに農林水産省で作成

表 米国産小麦の輸出量と輸出先国

(輸出量:万トン、シェア:%)

2023/24年度 (2023年6月～2024年5月)			2023/24年度 (2023年6月～2024年2月)			2024/25年度 (2024年6月～2025年2月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
メキシコ	325.8	17.4	メキシコ	226.5	17.3	メキシコ	287.1	18.2
フィリピン	274.5	14.7	フィリピン	180.0	13.7	フィリピン	183.6	11.7
中国	216.9	11.6	日本	151.2	11.5	日本	181.4	11.5
日本	197.1	10.5	中国	111.0	8.5	韓国	175.0	11.1
韓国	130.1	6.9	韓国	89.6	6.8	台湾	77.9	5.0
台湾	110.5	5.9	台湾	80.7	6.2	タイ	67.1	4.3
その他	618.1	33.0	その他	472.6	36.0	その他	601.7	38.2
計	1,873.0	100.0	計	1,311.7	100.0	計	1,573.8	100.0

資料：USDA「Global Agricultural Trade System」をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 1.3%減となる見込み（AAFC）

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2025.4.17）によれば、2024/25 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく 35.0 百万トンと、干ばつの影響により減産となった前年度（32.9 百万トン）と比べ 6.1%増、過去 5 年平均（31.7 百万トン）と比べても 10.4%増となる見込み。種類別には、普通小麦が 29.1 百万トンと、前年度（28.9 百万トン）と比べ 0.8%増となり、史上最高の生産量となった 2013/14 年度に次ぐ史上 2 番目の生産量となる見込み。デュラム小麦も 5.9 百万トンと、前年度（4.1 百万トン）と比べ 43.6%増となる見込み。

2025/26 年度の小麦の作付意向面積は、1,111.9 万ヘクタールと、高品質小麦に対する世界的な強い需要を受け前年度と比べ 2.6%増となる一方、生産量は長期的な単収の傾向に基づき算出した場合、34.5 百万トンと、前年度と比べ 1.3%減となる見込み。種類別には、普通小麦は 854.2 万ヘクタールと前年度（825.9 万ヘクタール）と比べ 3.4%増となるものの、生産量は 29.1 百万トンと前年度と比べ 0.1%減となる見込み。デュラム小麦は 257.7 万ヘクタールと前年度（257.5 万ヘクタール）と比べわずかに増加するものの、生産量は 5.4 百万トンと前年度と比べ 7.5%減となる見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2024/25 年度の輸出量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され 26.3 百万トンと、前年度（25.3 百万トン）と比べ 3.7%増となる見込み。種類別には、普通小麦は前月予測からの変更はなく 21.3 百万トンと前年度と比べ 2.4%減となる見込み。これは、今年度の生産量は増加するものの、低品質な小麦が増加し飼料用消費量が増加したこと等による。デュラム小麦は好調な輸出ペースを受け前月予測から 0.1 百万トン上方修正され 5.0 百万トンと、生産量の回復による輸出余力の増大等を受け、前年度（3.5 百万トン）と比べ 40.9%増となる見込み。

カナダ穀物委員会（CGC）によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 8 月～2025 年 2 月の輸出量は、1,497.7 百万トンと、前年同期（1,444.0 百万トン）と比べ 3.7%増。種類別には、普通小麦が 1,180.9 百万トンと、前年同期（1,255.3 百万トン）と比べ 5.9%減となっており、国別にはインドネシア 126.0 百万トン（10.7%）、日本 108.5 百万トン（9.2%）、ペルー 86.0 百万トン（7.3%）の順。デュラム小麦は 316.8 百万トンと、前年同期（188.7 百万トン）と比べ 67.9%増となっており、国別にはイタリア 66.9 百万トン（21.1%）、モロッコ 63.4 百万トン（20.0%）、アルジェリア 60.5 百万トン（19.1%）の順。AAFC によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、輸出量の引上げを受け前月予測から 0.1 百万トン下方修正され 4.3 百万トンと、前年度（4.6 百万トン）と比べ 6.1%減となる見込み。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

年 度	2022/23	2023/24 （見込み）	2024/25（24年8月～25年7月）		
			予測値、（ ）はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率（%）
生 産 量	34.8	33.0	35.0（35.0）	-	6.1
消 費 量	8.3	9.1	9.5（9.1）	-	4.3
うち飼料用	3.2	4.0	4.3（4.7）	-	7.0
輸 出 量	25.6	25.4	26.5（26.3）	0.5	4.2
輸 入 量	0.6	0.6	0.6（0.1）	-	1.8
期末在庫量	5.6	4.6	4.1（4.3）	▲ 0.5	▲ 10.7
期末在庫率	16.6%	13.3%	11.4%（12.2%）	▲ 1.6	▲ 1.9
（参考）					
収穫面積（百万ha）	10.10	10.70	10.65（10.65）	-	▲ 0.5
単収（t/ha）	3.45	3.08	3.28（3.28）	-	6.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（10 April 2025）、
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」（17 April 2025）

図 カナダ産小麦の生産量の推移

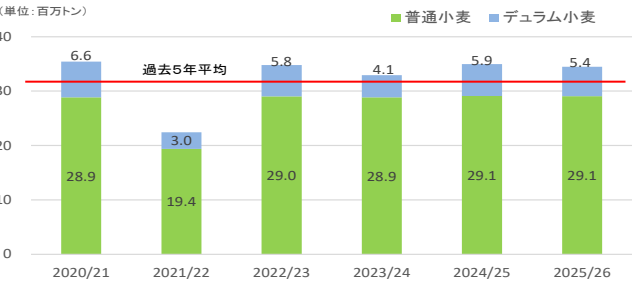


表 カナダ産小麦の輸出量と輸出先国

○普通小麦				（輸出量：百万トン、シェア：%）			
2023/24年度 （2023年8月～2024年7月）				2023/24年度 （2023年8月～2024年2月）			
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量
中国	310.3	14.7	中国	201.8	16.1	インドネシア	126.0
インドネシア	251.9	11.9	インドネシア	131.9	10.5	日本	108.5
日本	173.9	8.2	日本	99.4	7.9	ペルー	86.0
パキスタン	172.7	8.2	パキスタン	93.2	7.4	コロンビア	81.3
ペルー	137.3	6.5	コロンビア	73.3	5.8	米国	71.6
その他	1,069.2	50.5	その他	655.8	52.2	その他	707.4
計	2,115.3	100.0	計	1,255.3	100.0	計	1,180.9

○デュラム小麦				（輸出量：百万トン、シェア：%）			
2023/24年度 （2023年8月～2024年7月）				2023/24年度 （2023年8月～2024年2月）			
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量
アルジェリア	89.3	26.0	アルジェリア	48.5	25.7	イタリア	66.9
モロッコ	81.7	23.8	モロッコ	41.7	22.1	モロッコ	63.4
米国	46.2	13.5	イタリア	29.5	15.7	アルジェリア	60.5
イタリア	44.7	13.0	米国	24.4	12.9	米国	38.6
日本	21.2	6.2	日本	11.7	6.2	スペイン	16.9
その他	60.4	17.6	その他	32.9	17.4	その他	70.5
計	343.5	100.0	計	188.7	100.0	計	316.8

資料：CGC のデータをもとに農林水産省で作成

< 豪州 > 2024/25 年度の輸出量は下方修正され 25.5 百万トンの見込み (USDA)

【生育・生産状況】豪州農業資源経済科学局 (ABARES) 「Australian Crop Report」 (2025.3.4) によれば、2024/25 年度の生産量は前回予測 (2024.12.3) から 2.2 百万トン上方修正され 34.1 百万トンと、前年度 (26.0 百万トン) と比べ 31.4%増、過去 5 年平均 (29.8 百万トン) と比べても 14.4%増となり史上 3 番目の生産量となる見込み。

州別の生産量は、ニューサウスウェールズ州 (NSW 州) が 12.9 百万トン (前年度比 81.8%増)、クイーンズランド州 (QLD 州) が 2.2 百万トン (同 106.5%増) とシーズンを通して十分な降雨に恵まれたことから前年度と比べ大きく増加する見込み。また、ウェスタンオーストラリア州 (WA 州) についても 12.7 百万トン (同 64.3%増) と生育後期の降雨により前年度から増加する見込み。一方、サウスオーストラリア州 (SA 州) は 2.8 百万トン (同 42.3%減)、ビクトリア州 (VIC 州) も 3.5 百万トン (同 32.7%減) とシーズンを通して降水量が少なかったことや 9 月に霜が降りた影響等により前年度から減少する見込み。

USDA 「World Agricultural Production」 (2025.3.11) によれば、2024/25 年度の実生産量は、34.1 百万トンと、収穫が進むにつれて収穫量は予想を上回り史上 3 番目となった。NSW 州は土壌水分が良好で生育に良い影響を与えた。一方で WA 州、SA 州及び VIC 州は乾燥した状態からシーズンが始まったが、このうち WA 州については、生育期間中に降雨量が改善したことから収穫量が増加した。

【貿易情報・その他】ABARES によれば、2024/25 年度の輸出量は生産量の引上げ等を受け前回予測から 1.5 百万トン上方修正され 23.4 百万トンと、前年度 (19.7 百万トン) と比べ 18.7%増、過去 5 年平均 (22.4 百万トン) と比べても 4.7%増となる見込み。一方で、USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は中国への輸出減少を受け前月予測から 0.5 百万トン下方修正され 25.5 百万トンとなるものの、前年度と比べ 28.5%増、過去 5 年平均 (22.4 百万トン) と比べても 13.8%増となる見込み。

ABARES によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 10 月～2025 年 2 月の輸出量は 788.0 万トンと、前年同期 (884.3 万トン) と比べ 10.9%減。国別には、フィリピン 139.2 万トン (17.7%)、インドネシア 136.4 万トン (17.3%)、タイ 67.8 万トン (8.6%) の順で、中国は 25.2 万トン (3.2%) となっている。

2024/25 年度の期末在庫量は生産量の引上げ等を受け前回予測から 0.8 百万トン上方修正され 4.8 百万トンと、前年度 (2.9 百万トン) と比べ 69.1%増となる見込み。一方で、USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は輸出量の引下げを受け前月予測から 0.5 百万トン上方修正され 3.7 百万トンとなる見込み。

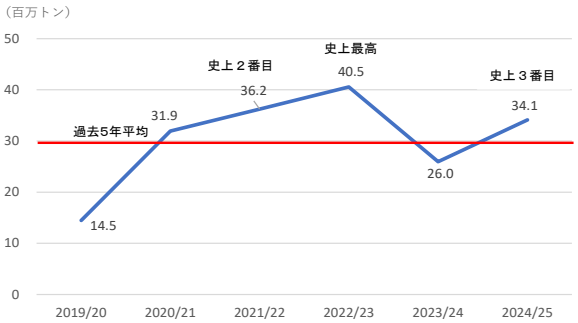
小麦一豪州 (冬小麦を主に栽培)

(単位: 百万トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年9月)		
			予測値、() はABARES	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	40.6	26.0	34.1 (34.1)	-	31.4
消 費 量	8.0	7.8	8.0 (8.8)	-	2.6
うち飼料用	4.5	4.3	4.5 ...	-	4.7
輸 出 量	31.8	19.8	25.5 (23.4)	▲ 0.5	28.5
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 ...	-	▲ 9.1
期末在庫量	4.4	2.9	3.7 (4.8)	0.5	27.8
期末在庫率	11.0%	10.5%	11.1% (15.0%)	1.6	0.6
(参考)					
収穫面積 (百万ha)	13.05	12.37	13.06 (13.06)	-	5.6
単収 (t/ha)	3.11	2.10	2.61 (2.61)	-	24.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (10 April 2025)
ABARES [Australian Crop Report] (4 March 2025)

図 豪州の小麦生産量の推移



資料：ABARES「Australian Crop Report」 (2025. 3. 4) をもとに農林水産省で作成

表 豪州産小麦の輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年10月～2024年9月)						2024/25年度 (2024年10月～2025年2月)					
国 名		輸出量	シェア	国 名		輸出量	シェア	国 名		輸出量	シェア
中国		375.6	19.0	中国		217.7	24.6	フィリピン		139.2	17.7
インドネシア		323.5	16.3	インドネシア		164.9	18.6	インドネシア		136.4	17.3
フィリピン		233.7	11.8	フィリピン		86.4	9.8	タイ		67.8	8.6
イエメン		152.2	7.7	日本		60.4	6.8	ベトナム		60.7	7.7
韓国		123.5	6.2	ベトナム		55.3	6.3	イエメン		52.5	6.7
日本		120.6	6.1	韓国		47.9	5.4	韓国		49.0	6.2
その他		651.8	32.9	その他		251.7	28.5	その他		282.4	35.8
計		1,980.8	100.0	計		884.3	100.0	計		788.0	100.0

資料：ABARES 「Trade dashboard」 をもとに農林水産省で作成

< EU27 > 2025/26 年度の生産量は 134.4 百万トンの見込み（EC）

【生育・生産状況】欧州委員会（EC）「EU Cereals Balance Sheets」（2025.3.27）によれば、2024/25 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 119.0 百万トンとなる見込み。2023 年秋の多雨で冬小麦の作付けが困難となったほか、生育期間を通じた降雨過多等により収穫面積及び単収が減少することを受け、前年度（132.6 百万トン）と比べ 10.3%減、過去 5 年平均（133.4 百万トン）と比べても 10.8%減となる見込み。このうち、普通小麦は 111.8 百万トンと、前年度と比べ 10.7%減、過去 5 年平均と比べても 11.2%減。デュラム小麦も 7.2 百万トンと、前年度と比べ 2.7%減、過去 5 年平均と比べても 4.4%減となる見込み。

一方で、2025/26 年度の実生産量は 134.4 百万トンと、降雨過多等により減産となった前年度と比べ 13.0%増、過去 5 年平均（129.5 百万トン）と比べても 3.8%増となる見込み。このうち、普通小麦は 126.5 百万トンと、前年度と比べ 13.2%増、過去 5 年平均と比べても 3.7%増。デュラム小麦も 7.9 百万トンと、前年度と比べ 9.6%増、過去 5 年平均と比べても 5.3%増となる見込み。

現地情報会社によれば、3 月 24 日時点で 2025/26 年度冬作物の生育状況は大半が良好となっているものの、ドイツ、ルーマニア、ブルガリア等の一部地域では乾燥による生育への影響が懸念される。

【貿易情報・その他】EC によれば、2024/25 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 25.7 百万トンと、減産を受け前年度（36.4 百万トン）と比べ 29.4%減となる見込み。USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、減産による輸出ペースの鈍化を受け、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され 26.5 百万トンと、2007/08 年度（120.8 百万トン）以来最低となっており、6 年ぶりの低水準となる見込み。

EC によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 7 月～2025 年 1 月の輸出量は、1,559.8 万トンと、前年同期（2,228.3 万トン）と比べ 30.0%減。種類別には、普通小麦が 1,508.7 万トンと、前年度と比べ 31.1%減となる一方、デュラム小麦は 51.1 万トンと、ルーマニアやギリシャ等の輸出量が増加したことから同 34.0%増。2024/25 年度の輸入量は、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され 9.5 百万トンと、ウクライナからの輸入が減少すること等から前年度（12.1 百万トン）と比べ 21.5%減となる見込み。2024/25 年度のうち 2024 年 7 月～2025 年 1 月の輸入量は、642.3 万トンと、前年同期（756.2 万トン）と比べ 15.1%減。種類別には、普通小麦が 539.5 万トンと、前年度と比べ 7.9%減。デュラム小麦も 102.8 万トンと、同 39.7%減。2024/25 年度の期末在庫量は、輸入量の引下げ等を受け前月予測から 0.5 百万トン下方修正され 10.1 百万トンと、供給量の減少から前年度（17.9 百万トン）と比べ 43.7%減となる見込み。

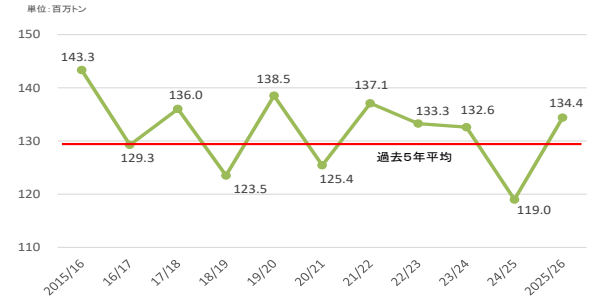
小麦－EU27（冬小麦を主に栽培）

(単位:百万トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年7月～25年6月)		
			予測値、() はEC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	134.5	135.4	121.0 (119.0)	▲ 0.3	▲ 10.6
消 費 量	109.0	110.5	109.8 (110.6)	-	▲ 0.7
うち飼料用	45.0	46.5	45.5 (45.8)	-	▲ 2.2
輸 出 量	35.1	38.0	26.5 (25.7)	▲ 0.5	▲ 30.2
輸 入 量	12.2	12.7	10.7 (9.5)	0.2	▲ 15.4
期末在庫量	16.3	15.8	11.3 (10.1)	0.7	▲ 28.6
期末在庫率	11.3%	10.7%	8.3% (7.4%)	0.5	▲ 2.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	24.44	24.32	22.70 (22.29)	▲ 0.13	▲ 6.7
単収(t/ha)	5.50	5.57	5.33 (5.34)	0.02	▲ 4.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 April 2025)
EC 「EU Cereals Balance Sheets」(27 March 2025)

図 EU27 の小麦生産量の推移



資料：EC 「EU cereals production, area and yield」(2025.3.27)
をもとに農林水産省で作成

表 EU27 の小麦の輸出量及び輸入量

O輸出量					O輸入量				
国名	2023/24年度 (2023年7月～2024年6月)		2024/25年度 (2024年7月～2025年1月)		国名	2023/24年度 (2023年7月～2024年6月)		2024/25年度 (2024年7月～2025年1月)	
	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)		輸入量 (万トン)	シェア (%)	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ナイジェリア	348.9	9.6	192.6	12.3	ウクライナ	648.7	53.6	340.8	53.1
アルジェリア	396.7	10.9	172.0	11.0	カナダ	138.5	11.4	137.9	21.5
モロッコ	489.1	13.5	157.8	10.1	モルドバ	73.6	6.1	40.8	6.3
エジプト	178.3	4.9	128.7	8.3	米国	34.2	2.8	38.5	6.0
英国	140.0	3.9	127.5	8.2	セルビア	35.5	2.9	25.2	3.9
サウジアラビア	154.1	4.2	59.0	3.8	英国	52.0	4.3	24.8	3.9
その他	1,928.0	53.0	722.1	46.3	その他	228.1	18.8	34.3	5.3
合計	3,635.1	100.0	1,559.8	100.0	合計	1,210.5	100.0	642.3	100.0

資料：EC 「EU trade for cereals」(2025.3.27)をもとに農林水産
省で作成

< ロシア > 2024/25 年度の輸出量は前月から下方修正され 44.0 百万トンの見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の生産量（クリミア地域分を含まず）は、前月予測からの変更はなく 81.6 百万トンと、霜害と高温乾燥により前年度と比べ 10.8%減、過去 5 年平均（83.5 百万トン）と比べても 2.3%減となる見込み。種類別には、冬小麦が 55.8 百万トンと、前年度（64.0 百万トン）に比べ 12.8%減。春小麦は 25.8 百万トンと、前年度（27.5 百万トン）と比べ 6.2%減となる見込み。

報道によれば、4 月上旬、冬小麦の主要生産地である欧州部のうち、3 番目に大きい小麦生産地の北カフカス連邦管区のスタヴロポリ地方において、激しい雹が降り作物に被害を与えている。2025/26 年度の冬小麦の生育や生産量に悪影響を与える可能性がある。

【貿易情報・その他】ロシア連邦政府は、2024 年 12 月 20 日、2024/25 年度後半（2025 年 2 月 15 日～6 月 30 日）に小麦及びメスリンに設定される輸出枠を 1,060 万トン（前年度 2,900 万トン）とすることを発表した。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2025.1.10) によれば、ロシアは 2024/25 年度の供給量が大きく減少したが、2024/25 年度前半（2024 年 7 月～12 月）で 29.4 百万トンを輸出し、史上最高の輸出量である前年同期（27.7 百万トン）を上回った。12 月 1 日現在のロシアの農場の小麦在庫は前年比 25%減となり、政府は、ロシア国内への供給を維持し、食料品価格の上昇を抑制するため、2024/25 年度後半の輸出枠を過去 5 年間で最小となる 1,060 万トンに設定した。2025 年 2 月以降、ロシアの輸出は減速する見込み。USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、2 月 15 日から設定された輸出枠を受け前月予測から 1.0 百万トン下方修正され 44.0 百万トンと、史上最高の輸出量となった前年度と比べ 20.7%減となるものの、過去 5 年平均（42.4 百万トン）と比べ 3.7%増と史上 3 番目の輸出量となる見込み。

現地情報会社によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 7 月～2025 年 2 月の輸出量は 3,290.8 万トンと、前年同期（3,534.5 万トン）と比べ 6.9%減となっている。国別には、エジプト 701.7 万トン（21.3%）、バングラデシュ 234.0 万トン（7.1%）、トルコ 208.5 万トン（6.3%）の順。なお、2 月のみの輸出量は 184.5 万トンで前年同月（425.1 万トン）と比べ 56.6%減と大きく減速している。

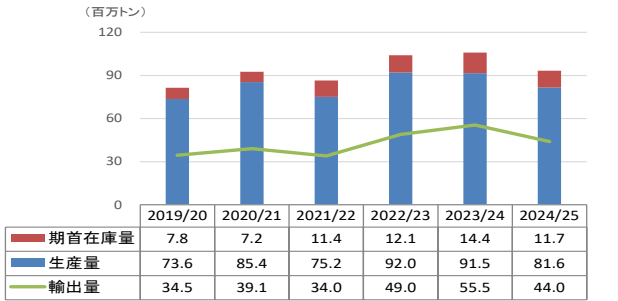
USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、輸出量の引下げを受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され 11.3 百万トンとなるものの、前年度と比べ 3.0%減となる見込み。

小麦－ロシア（主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年7月～25年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	92.0	91.5	81.6 (81.3)	-	▲ 10.8
消費量	41.0	39.0	38.3 (39.5)	-	▲ 1.9
うち飼料用	18.0	16.0	15.5 (16.5)	-	▲ 3.1
輸出量	49.0	55.5	44.0 (42.7)	▲ 1.0	▲ 20.7
輸入量	0.3	0.3	0.3 (0.4)	-	-
期末在庫量	14.4	11.7	11.3 (10.2)	1.0	▲ 3.0
期末在庫率	16.0%	12.4%	13.8% (12.4%)	1.4	1.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	29.00	28.83	27.80 (27.73)	-	▲ 3.6
単収(t/ha)	3.17	3.17	2.94 (2.93)	-	▲ 7.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 April 2025)
IGC 「Grain Market Report」(20 March 2025)

図 ロシアの小麦の期首在庫量・生産量・輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2025. 4. 10)をもとに農林水産省で作成

表 ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年7月～2024年6月)		2024/25年度 (2024年7月～2025年2月)		2024/25年度 (2025年2月)	
国 名	輸出量 シェア	国 名	輸出量 シェア	国 名	輸出量 シェア
エジプト	868.3 16.0	エジプト	701.7 21.3	エジプト	89.4 48.5
トルコ	691.9 12.8	バングラデシュ	234.0 7.1	サウジアラビア	13.4 7.3
バングラデシュ	350.2 6.5	トルコ	208.5 6.3	ナイジェリア	9.3 5.0
アルジェリア	236.8 4.4	アルジェリア	166.3 5.1	リビア	8.9 4.8
サウジアラビア	224.8 4.2	ケニア	139.9 4.3	タンザニア	8.7 4.7
カザフスタン	222.2 4.1	ナイジェリア	132.5 4.0	イスラエル	8.0 4.3
パキスタン	213.0 3.9	サウジアラビア	119.6 3.6	トルコ	6.3 3.4
その他	2,608.8 48.2	その他	1,588.3 48.3	その他	40.5 22.0
計	5,416.0 100.0	計	3,290.8 100.0	計	184.5 100.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2024/25 年度の輸出量は前月から上方修正され 16.0 百万トンの見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25年度の生産量（クリミア地域分を含む）は、前月予測からの変更はなく23.4百万トンと、前年度と比べ1.7%増となるものの、ロシアの侵攻前の過去5年平均（2017/18～2021/22年度、27.9百万トン）と比べ16.2%減となる見込み。

ウクライナ農業政策食料省（2025.4.18）によれば、2025/26年度の春小麦の作付面積は前年度から増加し22.75万ヘクタールとなる見込み。4月18日現在の春小麦の作付面積は16.94万ヘクタールと作付進捗率は74.5%となっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25年度の輸出量は、3月の好調な輸出を受け前月予測から0.5百万トン上方修正され16.0百万トンとなるものの、期首在庫量の減少等により前年度と比べ13.9%減、ロシアの侵攻前の過去5年平均（18.1百万トン）と比べても11.6%減となる見込み。

現地情報会社によれば、2024年9月3日、ウクライナ農業政策食料省は穀物市場関係者と覚書の附属書を締結し、2024/25年度の小麦の輸出上限は1,620万トンに設定された。

また、2025年2月の情報によれば、ハンガリー、スロバキア、ルーマニア及びブルガリアの農業相は、EUが2022年6月に導入したウクライナ産品に対する輸入関税と輸入割当の停止措置の期限（2025年6月5日）後にウクライナ農産品に対する輸入割当の復活を要請する書簡を共同で欧州委員会に送付した。

ウクライナ税関庁によれば、2024/25年度のうち2024年7月～2025年2月の輸出量は1,193.6万トンと、前年同期（1,177.3万トン）と比べ1.4%増となっており、2024/25年度の輸出上限1,620万トンに対し73.7%を輸出している。国別には、スペイン290.7万トン（24.4%）、インドネシア155.5万トン（13.0%）、エジプト120.4万トン（10.1%）の順となっており、前年度同様スペインが首位である一方、アルジェリアに加え、インドネシア、ベトナム、タイといったアジア諸国のシェアが増加している。現地情報会社によれば、シェア増加の要因は、アルジェリアは同国市場で大きなシェアを占めていたフランスの小麦生産量が大きく減少したこと、アジア諸国は飼料穀物の需要が増加していることやルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する臨時回廊により遠方への輸出が安定してきたことが挙げられる。

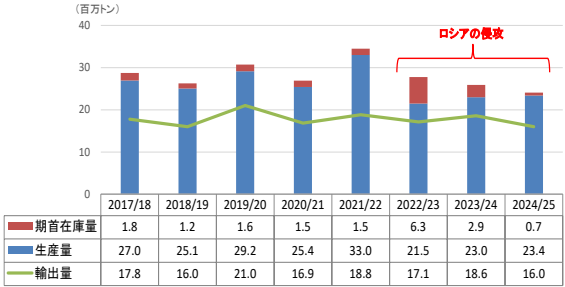
USDAによれば、2024/25年度の期末在庫量は、輸出量の引上げ等を受け前月予測から0.2百万トン下方修正され1.5百万トンとなるものの、前年度と比べ109.9%増となる見込み。

小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年7月～25年6月)		
			予測値、() はIGC		
			前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	21.5	23.0	23.4 (25.4)	-	1.7
消 費 量	7.8	6.7	6.7 (8.3)	▲ 0.3	-
うち飼料用	3.0	2.0	2.0 (1.4)	▲ 0.3	-
輸 出 量	17.1	18.6	16.0 (17.4)	0.5	▲ 13.9
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	33.3
期末在庫量	2.9	0.7	1.5 (0.7)	▲ 0.2	109.9
期末在庫率	11.8%	2.8%	6.6% (2.6%)	▲ 0.9	3.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	5.60	5.01	5.20 (6.17)	-	3.8
単収(t/ha)	3.84	4.59	4.50 (4.11)	-	▲ 2.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 April 2025)
IGC 「Grain Market Report」(20 March 2025)

図 ウクライナの小麦の期首在庫量・生産量・輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2025.4.10)をもとに農林水産省で作成

表 ウクライナ産小麦の輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年7月～2024年6月)			2024/25年度 (2024年7月～2025年2月)			2024/25年度 (2025年2月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
スペイン	589.9	32.0	スペイン	290.7	24.4	スペイン	32.6	27.7
エジプト	172.1	9.4	インドネシア	155.5	13.0	エジプト	24.8	21.0
インドネシア	151.5	8.2	エジプト	120.4	10.1	アルジェリア	19.0	16.1
トルコ	107.8	5.9	アルジェリア	113.3	9.5	イタリヤ	18.2	15.4
ルーマニア	100.1	5.4	ベトナム	88.4	7.4	チュニジア	9.4	8.0
パキスタン	81.4	4.4	タイ	64.1	5.4	イエメン	7.2	6.1
ベトナム	75.1	4.1	イタリヤ	62.6	5.2	イスラエル	2.5	2.1
バングラデシュ	73.7	4.0	チュニジア	61.5	5.2	ギリシャ	1.2	1.0
イタリヤ	67.7	3.7	バングラデシュ	52.2	4.4	レバノン	1.2	1.0
アルジェリア	63.3	3.4	イエメン	36.9	3.1	ドイツ	0.5	0.4
その他	358.0	19.5	その他	148.0	12.4	その他	1.3	1.1
合計	1,840.6	100.0	合計	1,193.6	100.0	合計	117.9	100.0

資料：APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2024/25 年度の輸入量は前月から下方修正され 3.5 百万トンの見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 140.1 百万トンと、前年度より収穫面積は減少するものの、単収が増加することから前年度と比べ 2.6%増、過去 5 年平均（135.8 百万トン）と比べても 3.1%増となり史上最高となる見込み。

中国農業農村部「農産品供需形成分析月報 2025 年 2 月号」によれば、2025/26 年度冬小麦の生育状況は概ね良好で、2 月上旬時点での作柄は作付面積の 98.5%で前年同期の水準を同等又は上回っている。

中国中央气象台によれば、4 月 6 日から 12 日の主要生産地の冬小麦の生育ステージは、大部分において節間伸長期から穂ばらみ期を迎えている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、小麦粉需要の引下げを受け前月予測から 1.0 百万トン下方修正され 150.0 百万トンと、経済成長による食生活の変化に伴い小麦粉需要は増加する一方、2023/24 年度に飼料用グレードの国産小麦が増加していたものが減少し飼料用消費量が減少することから、前年度と比べ 2.3%減となるものの、過去 5 年平均（146.1 百万トン）と比べれば 2.7%増となる見込み。2024/25 年度の輸入量は、供給量の増加を受け前月予測から 3.0 百万トン下方修正され 3.5 百万トンと、史上最高の生産量となり国内需給が緩和したこと等から、前年度と比べ 74.3%減となり 2019/20 年度（3.1 百万トン）以来の低水準の輸入量となる見込み。

中国国務院関税税則委員会は、3 月 4 日、米国政府が中国産品の輸入に関し追加関税を 10%から 20%に引き上げると発表したことを受け、3 月 10 日から米国産農水産物の輸入に関し追加関税を賦課すると発表した。小麦については 15%の追加関税が賦課された。更に 4 月 4 日、米国政府が相互関税を賦課すると発表したことを受け、全ての米国産品の輸入に関し 4 月 10 日から 34%の追加関税を賦課すると発表。4 月 9 日には追加関税の 84%への引き上げを発表し、4 月 11 日には追加関税を 125%に引き上げ 4 月 12 日から適用すると発表した。これにより、計 140%の追加関税を課すこととなった。

中国海関統計によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 7 月～2025 年 2 月までの輸入量は 201.1 万トンと、増産を受け前年同期（658.8 万トン）と比べ 69.5%減となっている。国別には、カナダ 71.2 万トン（35.4%）、米国 46.2 万トン（23.0%）、カザフスタン 28.8 万トン（14.3%）の順となっている。USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、輸入量の引下げ等を受け前月予測から 2.0 百万トン下方修正され 127.1 百万トンと、前年度と比べ 5.5%減となる見込み。

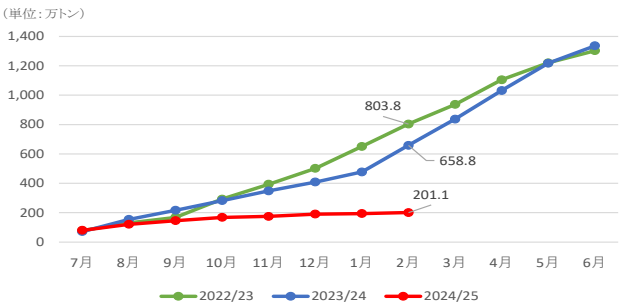
小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

(単位: 百万トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年7月～25年6月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	137.7	136.6	140.1 (140.1)	-	-	2.6
消 費 量	148.0	153.5	150.0 (146.8)	▲ 1.0	▲	2.3
うち飼料用	33.0	37.0	33.0 (28.0)	-	-	▲ 10.8
輸 出 量	1.0	1.0	1.0 (1.2)	-	-	▲ 3.8
輸 入 量	13.3	13.6	3.5 (6.2)	▲ 3.0	▲	74.3
期末在庫量	138.8	134.5	127.1 (138.5)	▲ 2.0	▲	5.5
期末在庫率	93.2%	87.0%	84.2% (93.6%)	▲ 0.8	▲	2.9
(参考)						
収穫面積(百万ha)	23.52	23.63	23.59 (23.59)	-	-	▲ 0.2
単収(t/ha)	5.86	5.78	5.94 (5.94)	-	-	2.8

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 April 2025)
IGC 「Grain Market Report」(20 March 2025)

図 中国の小麦輸入量の推移（累計）



資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

表 中国の小麦輸入量と輸入先国

(輸入量: 万トン、シェア: %)

2023/24年度 (2023年7月～2024年6月)			2023/24年度 (2023年7月～2024年2月)			2024/25年度 (2024年7月～2025年2月)		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
豪州	503.5	37.7	豪州	284.3	43.2	カナダ	71.2	35.4
カナダ	307.6	23.0	カナダ	185.2	28.1	米国	46.2	23.0
フランス	230.1	17.2	米国	71.3	10.8	カザフスタン	28.8	14.3
米国	181.8	13.6	フランス	44.5	6.8	ロシア	26.8	13.3
カザフスタン	66.8	5.0	カザフスタン	42.7	6.5	豪州	23.8	11.8
ロシア	43.0	3.2	ロシア	28.1	4.3	日本	3.2	1.6
その他	3.9	0.3	その他	2.7	0.4	その他	1.0	0.5
合計	1,336.5	100.0	合計	658.8	100.0	合計	201.1	100.0

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<USDA の見通し> 2024/25 年度

生産量

前年度比

前月比

・モルドバ、カンボジア等で下方修正されたものの、EU、タンザニア等で上方修正され、前月から上方修正された。

消費量

前年度比

前月比

・米国、モルドバ等で下方修正されたものの、EU、タンザニア、トルコ、メキシコ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量

前年度比

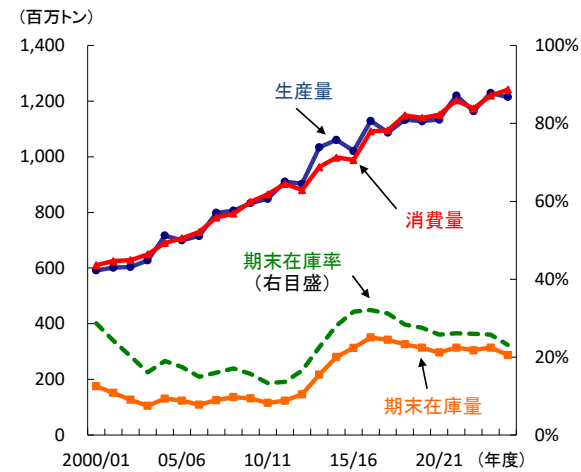
前月比

・米国等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量

前年度比

前月比



資料：USDA「PS&D」(2025.4.10)をもとに農林水産省にて作成。

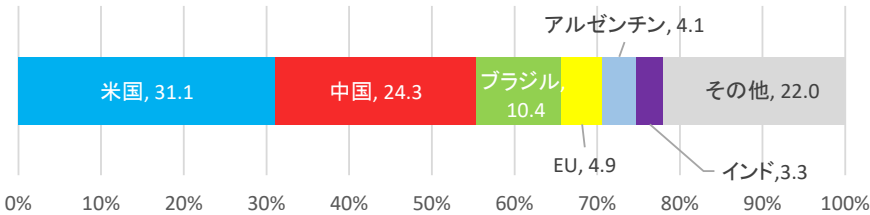
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

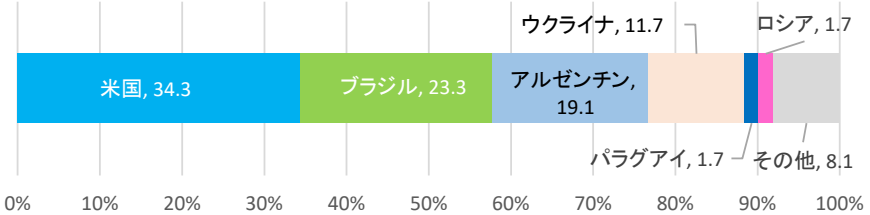
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,164.2	1,229.3	1,215.1	0.9	▲ 1.2
消費量	1,173.7	1,219.8	1,241.8	2.6	▲ 1.8
うち飼料用	735.4	773.7	781.2	1.8	▲ 1.0
輸 出 量	180.4	193.4	188.7	2.3	▲ 2.4
輸 入 量	173.5	198.0	182.1	1.8	▲ 8.0
期末在庫量	304.8	314.3	287.7	▲ 1.3	▲ 8.5
期末在庫率	26.0%	25.8%	23.2%	▲ 0.2	▲ 2.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(10 April 2025)

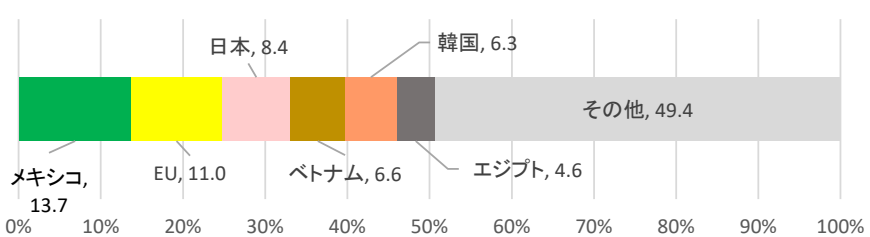
○ 2024/25 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,215.1 百万トン) (単位：%)



○ 2024/25 年度 世界のとうもろこしの輸出量(188.7 百万トン) (単位：%)



○ 2024/25 年度 世界のとうもろこしの輸入量(182.1 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

< 米国 > 2025/26 年度の作付意向面積は、前年度から 5.2%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の減少（対前年度比 4.2%減）を受け、史上最高の前年度より 3.1%減の 377.6 百万トンとなったものの、史上４番目に高い見通し。収穫面積の減少は、作付け時の大豆価格が、前年度に史上最高の豊作で価格が下落したとうもろこしに比べ大豆の作付けに有利であったため、多くの農家が大豆の作付けに切り替えたことによる。

USDA「Prospective Plantings」（2025.3.31）によれば、2025/26 年度の作付意向面積は、38.6 百万ヘクタールと、前年度（36.7 百万ヘクタール）より 5.2%増の見込み。現在の価格相場はとうもろこしの作付けに有利であるため、多くの農家が大豆からとうもろこしの作付けに切り替えるとみられる。

同「Crop Progress」（2025.4.14）によれば、４月 13 日現在、とうもろこしの作付進捗率は 4 %と、前年同期（6 %）、過去 5 年平均（5 %）を下回っている。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、飼料用消費の減少を受けて前月予測から 0.6 百万トン下方修正され、前年度に比べ 0.3%減の 321.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、米国産が価格競争力を有する見通しを受けて、前月予測から 2.5 百万トン上方修正され、前年度より 11.2%増の 64.8 百万トンの見込み。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2025.4.10）によれば、米国産の輸出価格は、４月 7 日現在、前月から 1 ドル/トン上昇し、214 ドル/トンと、ブラジル産（223 ドル/トン）、アルゼンチン産（219 ドル/トン）を下回り、価格競争力を有している。なお、米国政府が打ち出した関税政策に対する中国政府の報復措置により、米国産とうもろこしに対し、３月 4 日に発表した 15%の追加関税と 4 月 11 日に発表した 125%の追加関税を合わせ、計 140%の追加関税が課されることになった。

USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、2024/25 年度の輸出量が上方修正されたことを受けて前月予測から 1.9 百万トン下方修正され、前年度より 16.9%減の 37.2 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度より 2.1 ポイント減少し 9.6%と、過去 5 年平均（10.7%）を下回っている。

とうもろこし－米国

（概ね 4～5 月に作付けされ、9～11 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年9月～25年8月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	346.7	389.7	377.6	-	▲ 3.1
消費量	305.9	321.9	321.1	▲ 0.6	▲ 0.3
うち飼料用	139.4	147.5	146.1	▲ 0.6	▲ 0.9
エタノール用等	131.5	139.1	139.7	-	0.4
輸出量	42.2	58.2	64.8	2.5	11.2
輸入量	1.0	0.7	0.6	-	▲ 11.1
期末在庫量	34.6	44.8	37.2	▲ 1.9	▲ 16.9
期末在庫率	9.9%	11.8%	9.6%	▲ 0.5	▲ 2.1

（参考）
収穫面積(百万ha) 31.85 35.01 33.55 - ▲ 4.2
単収(t/ha) 10.89 11.13 11.26 - 1.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（10 April 2025）

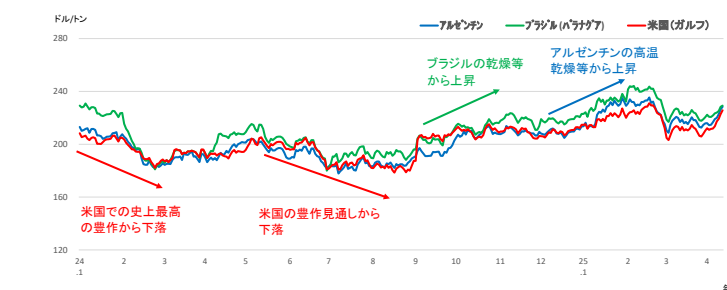
表 米国のとうもろこし輸出量と輸出先国

（輸出量：万トン、シェア：％）

2023/24年度 (2023年9月～2024年8月)			2023/24年度 (2023年9月～2024年3月)			2024/25年度 (2024年9月～2025年3月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
メキシコ	2,090.4	39.9	メキシコ	1,161.1	43.7	メキシコ	1184.2	34.0
日本	1,109.2	21.2	日本	472.2	17.8	日本	652.1	18.7
コロンビア	612.1	11.7	コロンビア	360.7	13.6	コロンビア	434.9	12.5
中国	286.0	5.5	中国	192.6	7.2	韓国	278.9	8.0
韓国	234.9	4.5	韓国	94.9	3.6	スペイン	191.5	5.5
その他	910.9	17.4	その他	376.9	14.2	その他	746.5	21.4
合計	5,243.5	100.0	合計	2,658.3	100.0	合計	3,488.1	100.0

資料：USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省作成

図 米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGC のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 2024/25 年度の生産量は前年度から 5.9%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、収穫面積の増加を受けて前年度より 5.9%増の 126.0 百万トンと、史上 2 番目に高い生産量となる見通し。なお、2023/24 年度の実産量は、前月予測から変更はなく、史上最高の 2022/23 年度から 13.1%減の 119.0 百万トンの見込み。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の月例報告（2025.4.10）によれば、2024/25 年度のとうもろこしの生産量は、前年度比 7.8%増の 124.7 百万トンの見込み。3 月末現在、夏とうもろこし（ブラジルのクロップカレンダー（図）参照）の収穫進捗率は 53.3%と、3 月の降水量の減少により、過去 5 年平均（41.1%）を上回っている。夏とうもろこしの生産量は、全ての生産地域において生育期間を通して気象条件に恵まれたことによる単収増等を受けて、前年度比 6.5%増の 24.5 百万トンの見込みであり、特に、主要産地である南部では、単収が前年度比 27.8%増加したことを受けて、前年度比 15.4%増の 11.2 百万トンとなる見込み。また、冬とうもろこしは、ゴイアス州の一部及びミナスジェライス州のほぼ全域で、2 月から 3 月上旬の降雨量の減少により生育初期に負の影響があったものの、最近の生育に適した天候により作柄が改善した。大半の実産州において作付作業が順調に進んでおり、冬とうもろこしの生産量は、作付面積及び単収の増加を受け、前年度比 8.1%増の 100.3 百万トンの見込み。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、生産施設への投資によるエタノールの増産見通しを受けて前年度から 3.5%増の 88.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、増産を受けて前年度より 14.9%増の 44.0 百万トンの見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2025 年 3 月の輸出量は 87.1 万トンで、前年同期（42.7 万トン）比 104.1%増。内訳は、イラン 30.5 万トン（35.0%）、サウジアラビア 27.5 万トン（31.6%）、ヨルダン 8.1 万トン（9.3%）の順。

とうもろこしーブラジル

（夏とうもろこしは、概ね 8 ～翌年 1 月に作付けされ、2 ～ 4 月に収穫される。冬とうもろこしは、大豆収穫後の概ね 1 ～ 3 月に作付けされ、6 ～ 10 月に収穫される。）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (25年3月～26年2月)			
			予測値、() はCONAB		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
			予測値	() はCONAB		
生 産 量	137.0	119.0	126.0	(124.7)	-	5.9
消 費 量	78.0	85.0	88.0	(87.1)	-	3.5
うち飼料用	61.5	63.5	64.5	...	-	1.6
輸 出 量	54.3	38.3	44.0	(34.0)	-	14.9
輸 入 量	1.3	1.7	1.5	(1.7)	-	▲ 12.8
期末在庫量	10.0	7.5	3.0	(7.4)	0.02	▲ 60.2
期末在庫率	7.6%	6.1%	2.3%	(6.1%)	0.02	▲ 3.8
(参考)						
収穫面積(百万ha)	22.40	21.65	22.30	(21.31)	-	3.0
単収(t/ha)	6.12	5.50	5.65	(5.85)	-	2.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 April 2025)、
CONAB「Graos」(10 April 2025)

表 ブラジルのとうもろこし輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2024年3月～2025年2月)			2023/24年度 (2024年3月)			2024/25年度 (2025年3月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
エジプト	601.2	15.7	イラン	19.0	44.6	イラン	30.5	35.0
イラン	536.9	14.1	中国	7.3	17.2	サウジアラビア	27.5	31.6
ベトナム	450.9	11.8	インドネシア	3.2	7.5	ヨルダン	8.1	9.3
韓国	243.3	6.4	コスタリカ	2.7	6.4	エジプト	6.9	7.9
日本	214.3	5.6	エルサルバドル	2.1	4.9	アルジェリア	4.4	5.0
その他	1,772.8	46.4	その他	8.3	19.5	その他	9.6	11.1
合計	3,819.4	100.0	合計	42.7	100.0	合計	87.1	100.0

資料：ブラジル貿易統計のデータを基に農林水産省にて作成

図 ブラジルのクロップカレンダー（中部から南部）

2024/25年度	2024年				2025年								
	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし (リオ・グランデ・ド・スール 州等)	作付 3.8(百万ha)				収穫 24.5(百万t) → 収穫夏冬作計 124.7百万t								
冬とうもろこし (マット・グロッツ州、 パラナ州等)	作付面積夏冬作計 21.3百万ha				作付 17.5(百万ha) 収穫100.3(百万t)								
大豆 (マット・グロッツ州、 パラナ州等)	作付 47.5(百万ha)				大豆収穫後の一部圃場で冬とうもろこし作付け 収穫 167.9(百万t)								

資料：CONAB「Graos」(2025.4.10) をもとに農林水産省にて作成

< アルゼンチン > 2024/25 年度の生産量は、前年度から 2.0%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 2.0%減、過去 5 年平均（49.9 百万トン）より 0.2%増の 50.0 百万トンの見込み。前年度からの減産は、病害虫のヨコバイによる被害が生産者の作付け意欲に負の影響を及ぼしているほか、とうもろこし価格の下落により収益が見込める大豆への作付けのシフト等から収穫面積が減少したことによるとみられる。

なお、USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、干ばつにより大幅に減産した 2022/23 年度より 37.8%増の 51.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン農牧漁業省（MAGyP）の月報（2025.3.20）によれば、3 月 20 日現在の収穫進捗率は作付面積の 9 %で、前年度同期（4 %）を上回っている。早植えとうもろこしは 1 月の高温と干ばつにより単収が低かったものの、遅植えとうもろこしは開花期の降雨により、作柄が改善した。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、前月予測からの変更はないものの、2023/24 年度の飼料用の消費量が上方修正されたことを受け、前年度から 0.7%減の 14.3 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、減産を受けて、前年度より 0.7%減の 36.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2025 年 3 月の輸出量は 263.8 万トンで、前年同期（358.9 万トン）比で 26.5%減。内訳は、ベトナム 52.9 万トン（20.0%）、ペルー 43.5 万トン（16.5%）、アルジェリア 35.4 万トン（13.4%）の順。

アルゼンチン政府は、2024 年 5 月に、市場に対する規制改革の一環として、小麦及びとうもろこしの輸出上限数量の撤廃を決定した。また、アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7 %から 12 %へ引き上げ、これを継続していたが、2025 年 1 月 25 日、1 月 27 日～6 月 30 日まで一時的にとうもろこしの輸出税を 9.5%に引き下げると発表した。

とうもろこしーアルゼンチン

（早植えとうもろこしは、概ね 9 月後半～12 月前半に作付けされ、遅植えとうもろこしは、概ね 12 月前半～翌年 2 月前半に作付けされる。概ね 3～8 月に収穫される。）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (25年3月～26年2月)			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	37.0	51.0	50.0	(53.0)	-	▲ 2.0
消 費 量	14.2	14.4	14.3	(20.0)	-	▲ 0.7
うち飼料用	10.0	10.2	10.0	(15.1)	-	▲ 2.0
輸 出 量	25.2	36.3	36.0	(33.0)	-	▲ 0.7
輸 入 量	0.0	0.0	0.0	(0.0)	-	-
期末在庫量	2.3	2.7	2.4	(1.5)	0.1	▲ 11.2
期末在庫率	5.9%	5.3%	4.7%	(2.8%)	0.2	▲ 0.6
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.20	7.78	6.40	(7.70)	-	▲ 17.7
単収(t/ha)	5.14	6.56	7.81	(6.88)	-	19.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 April 2025)
IGC 「Grain Market Report」(20 March 2025)

表 アルゼンチンのとうもろこし輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2024年 3 月～2025年 2 月)			2023/24年度 (2024年 3 月)			2024/25年度 (2025年 3 月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
ベトナム	667.8	19.1	ベトナム	71.5	19.9	ベトナム	52.9	20.0
ペルー	433.1	12.4	ペルー	42.6	11.9	ペルー	43.5	16.5
マレーシア	333.6	9.6	マレーシア	41.8	11.7	アルジェリア	35.4	13.4
韓国	280.1	8.0	アルジェリア	36.1	10.1	マレーシア	28.4	10.8
アルジェリア	280.1	8.0	エジプト	33.1	9.2	エジプト	21.3	8.1
その他	1,493.5	42.8	その他	133.7	37.3	その他	82.2	31.2
合計	3,488.2	100.0	合計	358.9	100.0	合計	263.8	100.0

資料：アルゼンチン国家統計局（INDEC）をもとに農林水産省にて作成

写真 北部サンタフェ州の早植えとうもろこしの圃場風景
(2025 年 3 月 19 日撮影)



当圃場のとうもろこしは 2024 年 9 月中旬に作付けられ、収穫作業は 3 月中旬に行われた。作付作業と同時にリン酸肥料及び尿素が施肥され、1 月の干ばつと高温にもかかわらず、高単収が記録されている。

撮影者：José Daniel Peloni

＜ ウクライナ ＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度から 17.5%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、前月予測から変更はなく、前年度より 17.5%減、侵攻前の史上最高の豊作となった 2021/22 年度から 36.4%減の 26.8 百万トンとなる見込み。収益性の高い油糧種子への作付けシフトを受けて収穫面積が減少（対前年度比 2.4%減）するとともに、7 月以降の高温乾燥の継続を受けて豊作の前年度から単収も減少（対前年度比 15.5%減）することにより、減産となる見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、4 月 17 日現在、とうもろこしの作付進捗率は 2 %と、前年同期（3 %）と比べやや遅れている。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 4.0%増の 5.2 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、減産により前年度から 25.4%減の 22.0 百万トンの見込み。

2024/25 年度のうち 2024 年 10 月～2025 年 3 月の輸出量は 1,413.2 万トンと、前年同期（1,608.9 万トン）より 12.2%減。輸出先国は、トルコ 285.7 万トン（20.2%）、スペイン 223.4 万トン（15.8%）、イタリア 215.2 万トン（15.2%）の順。

ウクライナ政府は、輸出業者の法律遵守を徹底する観点等から、2024 年 12 月 1 日から輸出許可制度を廃止し、輸出安全保障制度を導入した。当該制度では、最低輸出価格の設定、付加価値税を納税した事業者のみへの輸出許可、輸出業者の管理のため銀行及び税務当局との間での電子データ情報の交換が定められている。なお、2024 年 10～11 月の輸出量は 447.0 万トンと前年同期比で 28.0%増の一方、2024 年 12 月～2025 年 3 月の輸出量は 966.2 万トンと前年同期比で 23.3%減となっている。

USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、減産による供給減から前年度より 30.8%減、侵攻前の 5 か年平均より 70.7%減の 0.7 百万トンの見込み。2024/25 年度の期末在庫率は、前月予測からの変更はなく、前年度から 0.4 ポイント減の 2.7%と、2020/21 年度以来の低水準となる見込み。

とうもろこしーウクライナ

（概ね 4～5 月に作付けされ、8 月～11 月に収穫される。）

(単位：百万トン)						
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	27.0	32.5	26.8 (26.5)	-	▲ 17.5	
消 費 量	4.7	5.0	5.2 (4.7)	-	4.0	
うち飼料用	3.8	4.0	4.2 (3.3)	-	5.0	
輸 出 量	27.1	29.5	22.0 (22.0)	-	▲ 25.4	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	100.0	
期末在庫量	3.0	1.1	0.7 (0.9)	-	▲ 30.8	
期末在庫率	9.4%	3.1%	2.7% (3.2%)	-	▲ 0.4	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	4.05	4.20	4.10 (4.00)	-	▲ 2.4	
単収(t/ha)	6.67	7.74	6.54 (6.62)	-	▲ 15.5	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 April 2025)
IGC 「Grain Market Report」(20 March 2025)

表 ウクライナのとうもろこし輸出量と輸出先国

(輸出量：万トン、シェア：%)

2023/24年度 (2023年10月～2024年9月)			2023/24年度 (2023年10月～2024年3月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年3月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
スペイン	617.4	21.0	スペイン	408.5	25.4	トルコ	285.7	20.2
中国	461.9	15.7	中国	255.6	15.9	スペイン	223.4	15.8
エジプト	361.9	12.3	エジプト	195.6	12.2	イタリア	215.2	15.2
オランダ	277.7	9.4	イタリア	131.0	8.1	オランダ	152.7	10.8
イタリア	253.0	8.6	オランダ	126.5	7.9	エジプト	144.3	10.2
その他	975.1	33.1	その他	491.7	30.6	その他	391.9	27.7
合計	2,947.0	100.0	合計	1,608.9	100.0	合計	1,413.2	100.0

資料：APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ 中国 ＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度から 2.1%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加を受けて、前年度より 2.1%増の 294.9 百万トンとなり、史上最高となる見込み。

中国国家気象センター「中国気象農業頻道」によれば、4 月中旬現在、春とうもろこしは、中国西南地区東部、江漢、寧夏、新疆北部において作付け及び生育初期の段階にあり、一部の地域では三葉期に入っている。また、江西省では三葉期、広西省の大部分では七葉期となっている。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用需要が増大することから、前年度より 2.0%増の 313.0 百万トンと史上最高の見込み。ただし、国内の食肉需要は堅調なものの、伸びが鈍化しており、中国国家统计局（2025.1.17）によれば、2024 年の食肉生産量は 9,663 万トンと、前年比で 0.2%増。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内価格の下落等を受けた政策により、外国産ではなく豊作の国内産の備蓄向け購入を増加させていることから前年度より 65.8%減の 8.0 百万トンとなる見込み。

中国海関統計によれば、2024 年 10 月～2025 年 2 月の輸入量は、前年同期比 93.6%減の 106.6 万トンの見込み。内訳は、ブラジル 50.1 万トン（47.0%）、ウクライナ 19.4 万トン（18.2%）、ミャンマー17.3 万トン（16.2%）の順。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2025 年 2 月号」によれば、2 月の国内価格は、飼料用需要の増加等を受けて 2,240 元/トンと、前月（2,016 元/トン）から上昇した。

USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、輸入量の減少を受けて前年度より 4.8%減の 201.2 百万トンの見込み。

とうもろこしー中国

（春とうもろこしは、概ね 2～4 月に作付けされ、7～9 月に収穫される。
夏とうもろこしは、概ね 4～6 月に作付けされ、9～10 月に収穫される。）

(単位：百万トン)						
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年9月)			
			予測値、() はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	277.2	288.8	294.9	(294.9)	-	2.1
消 費 量	299.0	307.0	313.0	(313.7)	-	2.0
うち飼料用	218.0	225.0	231.0	(211.0)	-	2.7
輸 出 量	0.0	0.0	0.0	(0.1)	-	-
輸 入 量	18.7	23.4	8.0	(8.0)	-	▲ 65.8
期末在庫量	206.0	211.3	201.2	(184.2)	-	▲ 4.8
期末在庫率	68.9%	68.8%	64.3%	(58.7%)	-	▲ 4.6
(参考)						
収穫面積(百万ha)	43.07	44.22	44.74	(44.74)	-	1.2
単収(t/ha)	6.44	6.53	6.59	(6.59)	-	0.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 April 2025)
IGC「Grain Market Report」(20 March 2025)

表 中国のとうもろこし輸入量と輸入先国

(輸入量：万トン、シェア：%)

2023/24 年度 (2023年10月～2024年 9 月)			2023/24年度 (2023年10月～2024年 2 月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年 2 月)		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	1,502.3	64.4	ブラジル	1,313.5	78.3	ブラジル	50.1	47.0
ウクライナ	456.5	19.6	米国	170.1	10.1	ウクライナ	19.4	18.2
米国	298.8	12.8	ウクライナ	133.6	8.0	ミャンマー	17.3	16.2
ミャンマー	19.8	0.8	ミャンマー	16.1	1.0	ロシア	9.8	9.2
ブルガリア	18.2	0.8	ブルガリア	15.2	0.9	ラオス	6.2	5.8
ロシア	15.6	0.7	南アフリカ	11.2	0.7	米国	2.1	2.0
その他	21.7	0.9	その他	17.8	1.1	その他	1.7	1.6
計	2,332.9	100.0	計	1,677.5	100.0	計	106.6	100.0

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要 (詳細は右表を参照)

<USDA の見通し> 2024/25 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・インド、インドネシア、カンボジア、ブラジル等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

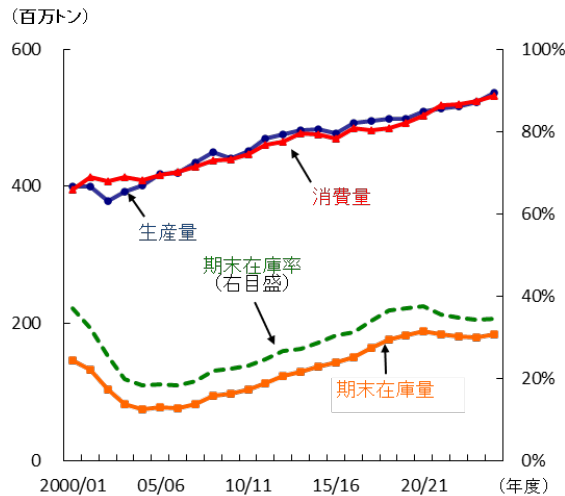
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・ブラジル、エチオピア等で下方修正されたものの、中国、ベトナム、日本、ナイジェリア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出品 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・タイ、中国、米国等で下方修正されたものの、インド、パキスタン、カンボジア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料 : USDA 「PS&D」 (2025. 4. 10) をもとに農林水産省にて作成

◎世界のコメ需給

(単位 : 百万精米トン)

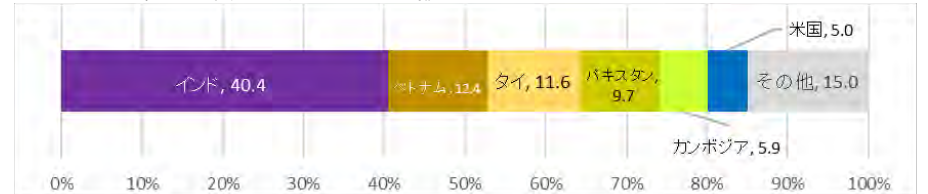
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)
生 産 量	516.7	522.1	535.8	3.1	2.6
消 費 量	520.2	523.5	532.1	1.4	1.6
輸 出 量	55.5	56.8	60.6	2.2	6.7
輸 入 量	57.7	53.4	57.1	1.9	6.8
期末在庫量	180.9	179.5	183.2	1.7	2.1
期末在庫率	34.8%	34.3%	34.4%	0.24	0.1

資料 : USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (10 April 2025)

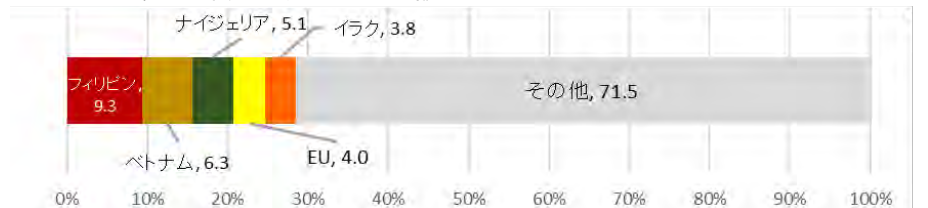
○ 2024/25年度の世界のコメの生産量 (535.8百万トン) (単位 : %)



○ 2024/25年度の世界のコメの輸出品 (60.6百万トン) (単位 : %)



○ 2024/25年度の世界のコメの輸入量 (57.1百万トン) (単位 : %)



（２） 国別のコメの需給動向

< タイ > 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 0.5%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実生産量は、前月予測から変更はなく、灌漑設備の改善による水供給量の増加に伴う作付面積の拡大及び単収の向上により、20.1 百万トンと、前年度に比べ 0.5%増加する見込み。

タイ農業協同組合省農業経済局「農業経済」（2025.3）によれば、2024/25 年度の雨季米（2024 年 5 月～10 月作付け）の収穫は終了しており、生産量は良好な天候から、前年度に比べ 0.3% 増の 27.0 百万トン（粳ベース）の見込み。作付面積は、前年度の 994 万ヘクタールから 992 万ヘクタールに減少する見込み。同「タイ農業統計 2024」（2025.3）によれば、2024/25 年度の雨季米の単収は、2.80 トン/ヘクタールと、前年度（2.79 トン/ヘクタール）より微増となっている。コメの市場価格が高いことから作付面積を増加させる生産者がいる一方、天候への懸念から乾燥に強いキャッサバや市場価格が高騰しているサトウキビへの作付けのシフトも行われている。

2024/25 年度の乾季米（2024 年 11 月～2025 年 4 月作付け）の作付面積は、エルニーニョによる少雨の影響を受けた前年度（163 万ヘクタール）に比べ、雨季中の降雨量が多く、十分な灌漑用水の供給があることから 19%増の 192 万ヘクタールと予測されている。乾季米の栽培が盛んな中部地方を中心に作付けが進んでいる。

【貿易情報・その他】USDA 「Rice Outlook」（2025.4.14）によれば、2024/25 年度の輸出量は、2 月までの販売ペースが予測を下回ったことから、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、アジア地域における潤沢な供給とインドネシア政府の大幅な輸入減の見通しを受け、前年度から 29.2%減少し、7.0 百万トンの見込み。

タイ関税局によれば、2025 年 1～2 月の輸出量は、前年同期比 33%減の 120 万トンで、主な輸出先国は、イラク 19.4 万トン（16.2%）、米国 15.5 万トン（12.9%）、南アフリカ 9.9 万トン（8.2%）。政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大していたインドネシア向けの輸出量は、0.15 万トンと大幅に減少し、前年同期比で 97%減となった。

期末在庫量は、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、増産予測から前年度比 37.6%増の 3.1 百万トンの見込み。

コメータイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (25年 1月～25年12月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
			予測値、()	IGC		
生 産 量	20.9	20.0	20.1	(20.1)	-	0.5
消 費 量	12.3	12.3	12.4	(12.4)	0.1	0.4
輸 出 量	8.7	9.9	7.0	(7.5)	▲ 0.5	▲ 29.2
輸 入 量	0.1	0.1	0.1	(0.0)	-	-
期末在庫量	4.4	2.3	3.1	(2.7)	0.5	37.6
期末在庫率	20.7%	10.2%	16.1%	(13.4%)	2.6	5.9
(参考)						
収穫面積(百万ha)	11.07	10.65	10.70	(10.70)	-	0.5
単収(粳t/ha)	2.86	2.85	2.85	(1.88)	-	-

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (10 April 2025)
IGC 「Grain Market Report」 (20 March 2025) （単収は精米t/ha）

表 タイのコメの輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2024年1月～12月)			2023/24年度 (2024年1月～2月)			2024/25年度 (2025年1月～2月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
インドネシア	133.3	13.4	インドネシア	53.1	29.7	イラク	19.4	16.2
イラク	99.7	10.0	フィリピン	18.6	10.4	米国	15.5	12.9
米国	84.8	8.5	米国	13.3	7.5	南アフリカ	9.9	8.2
南アフリカ	83.3	8.4	イラク	10.6	5.9	セネガル	7.6	6.3
フィリピン	61.8	6.2	コートジボワール	7.2	4.0	アンゴラ	6.3	5.3
セネガル	46.2	4.6	セネガル	6.3	3.5	中国	5.1	4.2
その他	485.4	48.8	その他	69.9	39.0	その他	56.2	46.8
計	994.5	100.0	計	179.0	100.0	計	120.0	100.0

資料：タイ関税局をもとに農林水産省で作成

< 米国 > 2025/26 年度の作付意向面積は、前年度から 0.5%減となる見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の生産量は、前月予測から変更はなく、7.1 百万トンと、前年度に比べ 1.9%増加し、2020/21 年度以降最大となる見込み。種類別生産量は、前月予測から変更はなく、長粒種は、収穫面積、単収ともに増加し、前年度より 12%増の 5.5 百万トン、一方、中・短粒種は、南部の生産州及びカリフォルニア州における作付面積の減少を受け 1.6 百万トンと前年度より 22%減少する見込み。

同「Prospective Plantings」(2025.3.31)によれば、2025/26 年度の作付意向面積は、117.2 万ヘクタールと、前年度 (117.8 万ヘクタール) から 0.5%減となる見込み。減少分は全て長粒種が占めており、南部生産州では、ルイジアナ州で最大の減少となっている。

同「Crop Progress」(2025.4.14) によれば、4 月 13 日現在、主要生産 6 州の作付進捗率は 32%と、前年同期 (41%) よりも遅いものの、過去 5 年平均 (28%) に比べ進展している。なお、カリフォルニア州の作付けは、通常 4 月下旬まで開始されない。

【貿易情報・その他】USDA 「Rice Outlook」(2025.4.14) によれば、2024/25 年度の輸入量は、米国領プエルトリコへの中国からの輸出減少を受け、前月予測から 0.03 百万トン下方修正されたものの、前年度に比べ 4.9%増の 1.5 百万トンと史上最高の見込み。

2024/25 年度の輸出量は、中南米向けの販売が低調であったことを受け、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、3.0 百万トンと、前年度に比べ 2.9%減少する見込み。米国産長粒種 (粳米) の輸出は、そのほとんどが南米向けであるが、春から夏にかけて、南米産米が収穫ピークを迎えるため、競争の激化が予測されている。

同「Exports Sales Query System」(2025.4) によれば、2024/25 年度 (2024 年 8 月～2025 年 3 月) の輸出量は 208.1 万トンで、主な輸出先国は、メキシコ 51.5 万トン (24.8%)、日本 23.2 万トン (11.1%)、ハイチ 20.6 万トン (9.9%) の順。種類別には、長粒種は、輸出量 154.6 万トンで、主な輸出先国は、メキシコ 47.6 万トン (国別シェア 30.8%)、ハイチ 20.6 万トン (同 13.3%)、ホンジュラス 17.4 万トン (同 11.2%)。中・短粒種は、輸出量 53.5 万トンで、主な輸出先国は、日本 23.2 万トン (国別シェア 43.3%)、韓国 11.1 万トン (同 20.7%)、ヨルダン 5.9 万トン (同 11.0%)。2024/25 年度の期末在庫量は、先月予測から 0.1 百万トン下方修正されたものの、輸出量の減少及び輸入量の増加等を受け、前年度に比べ 11.0%増加し、1.4 百万トンの見込み。

コメー米国

長粒種の生産量が 7 割を占め、中・短粒種の生産量は 3 割、その内、長粒種の 6 割をアーカンソー州が、中・短粒種の 7 割をカリフォルニア州が占める。

(単位：百万精米トン)					
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年 8 月～25年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)
生 産 量	5.1	6.9	7.1	-	1.9
消 費 量	4.6	4.9	5.4	0.1	9.1
輸 出 量	2.1	3.1	3.0	▲ 0.1	▲ 2.9
輸 入 量	1.3	1.4	1.5	▲ 0.03	4.9
期末在庫量	1.0	1.3	1.4	▲ 0.1	11.0
期末在庫率	14.4%	15.8%	16.8%	▲ 1.1	1.0
(参考)					
収穫面積 (百万 ha)	0.88	1.16	1.16	-	-
単収 (粳 t/ha)	8.28	8.56	8.69	-	1.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (10 April 2025)

表 米国のコメの輸出量と輸出先国

(輸出量：万トン、シェア：%)								
2023/24年度 (2023年8月～2024年7月)			2023/24年度 (2023年8月～2024年3月)			2024/25年度 (2024年8月～2025年3月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
メキシコ	93.3	28.0	メキシコ	60.4	27.4	メキシコ	51.5	24.8
ハイチ	36.0	10.8	ハイチ	24.3	11.1	日本	23.2	11.1
日本	29.7	8.9	ベネズエラ	19.6	8.9	ハイチ	20.6	9.9
ベネズエラ	21.7	6.5	イラク	17.5	7.9	ホンジュラス	17.4	8.3
ホンジュラス	20.2	6.1	日本	17.1	7.8	イラク	13.2	6.3
イラク	17.5	5.2	ホンジュラス	14.0	6.3	韓国	11.1	5.3
その他	114.8	34.5	その他	67.4	30.6	その他	71.2	34.2
計	333.2	100.0	計	220.2	100.0	計	208.1	100.0

資料：USDA 「Exports Sales Query System」をもとに農林水産省で作成

< 中国 > 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 0.5%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、農作物の生産性を向上させるとの政府計画に沿って、作付面積が安定し、単収が向上すると予測から、前年度比 0.5%増の 145.3 百万トン（精米ベース）となる見込み。中国政府は、穀物生産を国家戦略上の優先課題とし、単収の向上に重点を置いた国内支援プログラムを通じ、国内生産の拡大を継続的に推進している。2024 年の「中央 1 号文件」において、単収向上への取組みを強調し、今後数年間で、7.1 トン/ヘクタールから約 9 トン/ヘクタールに増加するとしている。

同「Grain and Feed Annual」（2025.4.3）によれば、3 月中旬時点で、中国南部の二期作地域では、最初の作付けが開始されており、四川省及び重慶市でも、一期作の作付けが開始された。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、146.0 百万トンとなる見込み。飼料用需要が比較的安価なとうもろこしへシフトすることや、高齢化の進展、若年層の食生活の西洋化等に伴い食用需要が減少することから、前年度比で 1.4%減少する見込み。なお、消費量は 2021/22 年度に史上最高の 156.4 百万トンに達したのち、3 年連続で減少している。

2024/25 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、世界のコメ価格の下落を受け、ミャンマー、タイ、パキスタン、ベトナム及び輸出規制を解除したインドといった伝統的なインディカ米の供給国からの輸入が増加すると予測から、前年度比 37.3%増の 2.1 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 7 月～2025 年 2 月までの輸入量は、118.3 万トンと、前年同期（102.4 万トン）と比べ 15.5%増となっている。内訳は、ミャンマー43.6 万トン（36.9%）、タイ 30.4 万トン（25.7%）、パキスタン 13.3 万トン（11.2%）の順。

USDA によれば、「一帯一路」政策の賛同国を拡大する目的から、同政策の関係国に対しコメの輸出促進を図っているものの、軟調な需要に基づく輸出が継続すると予測されることから、2024/25 年度の輸出量は、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、前年度比 44.8%減の 0.9 百万トンの見込み。2024/25 年度の期末在庫量は、前月予測から変更はなく、103.5 百万トンと前年度に比べ 0.5%増の見込み。世界全体の在庫の内、56%を占める。

コメー中国

中国の主要コメ生産地域は、南部稲作地域（華南、華中、西南高原地域）で、インディカ米とジャポニカ米を栽培。北部稲作地域では、主にジャポニカ米を栽培。

(単位：百万精米トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年 7 月～25年 6 月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	146.0	144.6	145.3 (145.3)	-	0.5	
消 費 量	155.0	148.1	146.0 (145.5)	0.1	▲ 1.4	
輸 出 量	1.7	1.6	0.9 (1.6)	▲ 0.1	▲ 44.8	
輸 入 量	4.4	1.5	2.1 (2.5)	-	37.3	
期末在庫量	106.6	103.0	103.5 (101.9)	-	0.5	
期末在庫率	68.0%	68.8%	70.5% (69.3%)	-	1.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	29.45	28.95	29.01 (29.01)	-	0.2	
単収(粍t/ha)	7.08	7.14	7.15 (5.01)	-	0.1	
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(10 April 2025) IGC「Grain Market Report」(20 March 2025) (単収は精米t/ha)						

表 中国のコメの輸入量と輸入先国（輸入量：万トン、シェア：%）

2023/24年度 （2023年7月～2024年6月）			2023/24年度 （2023年7月～2024年2月）			2024/25年度 （2024年7月～2025年2月）		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
ベトナム	46.1	30.2	タイ	33.3	32.5	ミャンマー	43.6	36.9
タイ	44.3	29.0	ベトナム	26.7	26.1	タイ	30.4	25.7
ミャンマー	36.4	23.8	ミャンマー	24.6	24.0	パキスタン	13.3	11.2
カンボジア	12.8	8.4	カンボジア	7.2	7.0	インド	12.3	10.4
パキスタン	7.3	4.8	パキスタン	5.2	5.1	ベトナム	11.6	9.8
インド	3.0	2.0	インド	2.9	2.9	ラオス	3.5	2.9
その他	2.8	1.8	その他	2.5	2.4	その他	3.5	3.0
計	152.7	100.0	計	102.4	100.0	計	118.3	100.0

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

< インド > 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 6.7%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、前月予測から 2.0 百万トン上方修正され、147.0 百万トンと、前年度比で 6.7%増加、過去 5 年平均（134.9 百万トン）と比べ 8.9%増加し、史上最高の見込み。中国を抜き、世界最大のコメ生産国となった。収穫面積も、前月予測から 1.0 百万ヘクタール上方修正され、51.0 百万ヘクタールと前年度に比べ 6.6%増加し史上最高の見込み。単収は前月予測から下方修正されたものの、前年度と同様 4.32 トン/ヘクタールとなる見込み。

インド農業・農民福祉省によると、2024/25 年度のカリフ米の実産量は、120.7 百万トンと、前年度（111.5 百万トン）と比べ 8.3%増加し、史上最高の見込み。ラビ米の実産量は、15 百万トンと予測され、前年度（12.36 百万トン）と比べ 27.5%増。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、前月予測から変更はなく、旺盛な国内需要から前年度比 4.0%増の 121.0 百万トンとなる見込み。なお、国民の食料安全保障を確保するため、食料安全保障法に基づき公的食料配給制度（PDS）が実施されており、より多くのコメが供給される見込み。政府は公的食料配給制度により市場からコメ等を調達し、低所得世帯（8.14 億人以上）に無償又は低価格で配給している。

2024/25 年度の輸出量は、政府の輸出規制撤廃等を受け、アフリカ及び中東向け輸出が増加するとの予測から、前月予測から 2.5 百万トン上方修正され、前年度比 69.8%増の 24.5 百万トンの見込み。世界第 1 位の輸出シェアを維持し、世界全体のコメ輸出総量の 40.4%を占める。インド輸出入統計によれば、2025 年 1 月の輸出量は 244.2 万トンで、主な輸出先国は、ベナン 22.1 万トン（9.1%）、ギニア 20.1 万トン（8.2%）、バングラデシュ 19.1 万トン（7.8%）の順。ベナン等のアフリカ諸国向けは非バスマティ米の輸出が主である。

インド政府は、2022 年 9 月 9 日以降、碎米の輸出禁止や輸出関税・最低輸出価格の設定等の措置を発動・強化してきたが、史上最高の増産予測及び農家・輸出者からの要請を受け、2024 年 9 月に、バスマティ米の最低輸出価格の撤廃、粳米、玄米、パーボイルド米の輸出関税の引き下げ、10 月に非バスマティ米の輸出禁止措置の撤廃を発表し、更に 2025 年 3 月 7 日に、碎米の輸出再開を発表した。USDA「Rice Outlook」（2025.4.14）によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、生産量の引上げを輸出量の引上げが上回ったため、0.5 百万トン下方修正されたものの、過去最高の 43.5 百万トンと、前年度に比べ 3.6%増加する見込み。インド食品公社（Food Cooperation India）によれば、2025 年 3 月時点の期末在庫量は、36.79 百万トン（精米）と前年に比べ 40%増の見込み。

コメーインド

カリフ米：雨季/モンスーン期（5～10 月）に栽培。
ラビ米：冬季の 11 月～翌 3 月に栽培。
夏季米：3～6 月に栽培。

（単位：百万精米トン）

年 度	2022/23	2023/24 （見込み）	2024/25（24 年 10 月～25 年 9 月）		
			予測値、（）は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率（%）
生 産 量	135.8	137.8	147.0（144.5）	2.0	6.7
消 費 量	114.5	116.4	121.0（120.0）	-	4.0
輸 出 量	20.3	14.4	24.5（23.2）	2.5	69.8
輸 入 量	0.0	0.0	0.0（0.0）	-	-
期末在庫量	35.0	42.0	43.5（43.0）	▲ 0.5	3.6
期末在庫率	26.0%	32.1%	29.9%（30.1%）	▲ 0.9	▲ 2.2
（参考）					
収穫面積（百万 ha）	47.83	47.83	51.00（50.00）	1.0	6.6
単収（t/ha）	4.26	4.32	4.32（2.89）	▲ 0.03	-

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（10 April 2025）
IGC「Grain Market Report」（20 March 2025）（単収は精米 t/ha）

表 インドのコメの輸出量と輸出先国（輸出量：万トン、シェア：%）

2023 年 （2023 年 1 月～12 月）			2024 年 （2024 年 1 月～12 月）			2025 年 （2025 年 1 月）		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
ベナン	151.9	8.5	ベナン	186.9	10.4	ベナン	22.1	9.1
サウジアラビア	123.5	6.9	サウジアラビア	140.6	7.8	ギニア	20.1	8.2
セネガル	93.7	5.2	ギニア	102.2	5.7	バングラデシュ	19.1	7.8
トーゴ	86.4	4.8	コートジボワール	98.6	5.5	サウジアラビア	17.8	7.3
ギニア	84.1	4.7	イラク	94.6	5.2	ネパール	15.4	6.3
ケニア	75.4	4.2	トーゴ	88.8	4.9	コートジボワール	13.1	5.4
その他	1,171.0	65.6	その他	1,092.6	60.6	その他	136.6	55.9
計	1,786.0	100.0	計	1,804.3	100.0	計	244.2	100.0

資料：インド農業・加工食品輸出振興局（APEDA）をもとに農林水産省で作成

< ベトナム > 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 0.8%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく 26.5 百万トンと、前年度を 0.8%上回る見込み。2016/17 年度以降、南部沿岸地域における海水の浸潤やメコン川の水流量減少、肥料価格の高騰、高収益作物等（果物・野菜・養殖）へのシフト等から、収穫面積は近年減少傾向にあったが、2024/25 年度の収穫面積は 6.95 百万ヘクタールと前年度に比べ 0.7%増加する見込み。

ベトナム総統計局（2025.4.6）によれば、2025 年 3 月 20 日現在、2024/25 年度の乾季米（冬春作）は、全国で 294 万ヘクタールが収穫され、前年度に比べ 1.72 万ヘクタール増加した。その内、メコンデルタ地域（南部）は、作付面積は 150.83 万ヘクタールで、前年に比べ 2.07 万ヘクタール増。収穫面積は 106.03 万ヘクタールに達し、作付面積の 70.3%を占める。秋冬米の収穫は終了し、収穫面積は 19.18 万ヘクタールで、前年度に比べ 0.87 万ヘクタール増加する見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸入量は、カンボジアの実産量引上げによる同国からの輸入増を受け、前月予測から 0.2 百万トン上方修正されたものの、前年度に比べ 2.7%減の 3.6 百万トンとなる見込み。ベトナムのコメ輸入の大部分をカンボジアが占めており、残りはインドから輸入している。

2024/25 年度の輸出量は、前月予測から変更はなく、インドネシア政府調達への減少及び世界第 1 位のコメ輸出国であるインドが輸出規制撤廃を実施したこと等による同国との競争激化が予想され、前年度から 17.0%減少し、7.5 百万トンとなる見込み。

ベトナム税関総局によれば、2025 年 1 月～3 月の輸出量は 230.9 万トンと、前年同期（213.2 万トン）に比べ 8.3%増加した。主な輸出先国は、フィリピン 98.6 万トン（42.7%）、コートジボワール 29.3 万トン（12.7%）、中国 23.2 万トン（10.1%）の順。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2025.4.10）によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の 4 月 7 日までの週の価格は、東アジア及び東南アジア市場向けの販売が大きく伸びたことから、前月 3 月 7 日までの週から 7 ドル/トン上昇し、394 ドル/トンとなった。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (25 年 1 月～25 年 12 月)			
			2024/25 (25 年 1 月～25 年 12 月)		対前年度 増減率 (%)	
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更		
生 産 量	27.1	26.3	26.5 (28.6)	-	0.8	
消 費 量	22.4	22.5	22.5 (22.5)	0.1	0.2	
輸 出 量	8.2	9.0	7.5 (7.7)	-	▲ 17.0	
輸 入 量	3.6	3.7	3.6 (2.2)	0.2	▲ 2.7	
期末在庫量	3.7	2.2	2.3 (2.7)	0.3	4.5	
期末在庫率	12.1%	7.1%	7.8% (9.1%)	1.0	0.7	
(参考)						
収穫面積 (百万 ha)	7.12	6.90	6.95 (7.12)	-	0.7	
単収 (t/ha)	6.10	6.10	6.10 (4.02)	-	-	

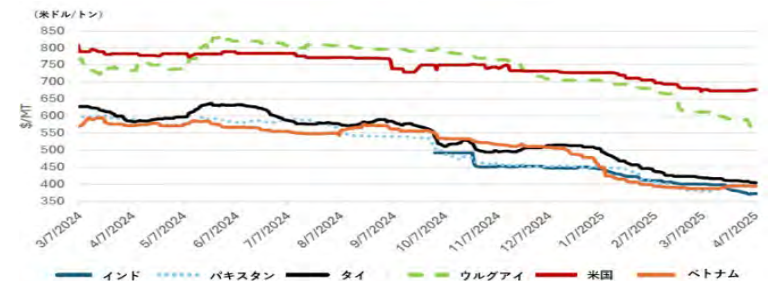
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 April 2025)
IGC「Grain Market Report」(20 March 2025) (単収は精米 t/ha)

表 ベトナムのコメの輸出量と輸出先国

2023/24 年度 (2024 年 1 月～12 月)			2023/24 年度 (2024 年 1 月～3 月)			2024/25 年度 (2025 年 1 月～3 月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
フィリピン	422.1	46.6	フィリピン	101.1	47.4	フィリピン	98.6	42.7
インドネシア	125.7	13.9	インドネシア	44.5	20.9	コートジボワール	29.3	12.7
マレーシア	71.9	7.9	マレーシア	9.9	4.6	中国	23.2	10.1
ガーナ	61.3	6.8	コートジボワール	9.2	4.3	ガーナ	17.5	7.6
コートジボワール	48.3	5.3	中国	8.2	3.8	マレーシア	9.6	4.2
中国	28.5	3.1	ガーナ	6.9	3.3	バングラデシュ	8.5	3.7
その他	148.9	16.4	その他	33.2	15.6	その他	44.2	19.1
計	906.8	100.0	計	213.2	100.0	計	230.9	100.0

資料：ベトナム税関総局をもとに農林水産省で作成

図 長粒種の FOB 価格の推移 (2024 年 3 月 7 日～2025 年 4 月 7 日)



資料：USDA「Grain: World Markets and Trade」(2025.4.10) より

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要 (詳細は右表を参照)

<USDA の見通し> 2024/25 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・南アフリカ、アラブ首長国連邦、EU で上方修正されたものの、ボリビアで下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

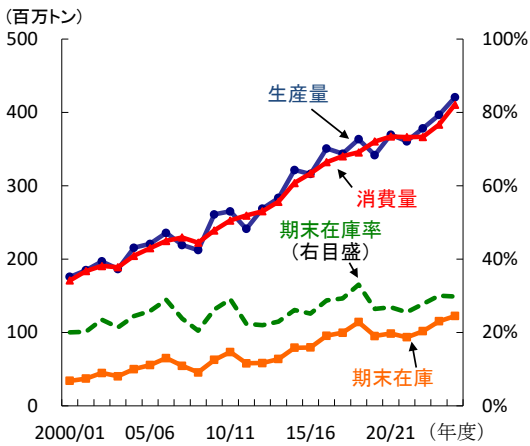
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・EU 等で下方修正されたものの、ブラジル、アルゼンチン、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・ウクライナ等で下方修正されたものの、カナダ、ナイジェリア、エジプト等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料 : USDA 「PS&D」 (2025.4.10) をもとに農林水産省で作成

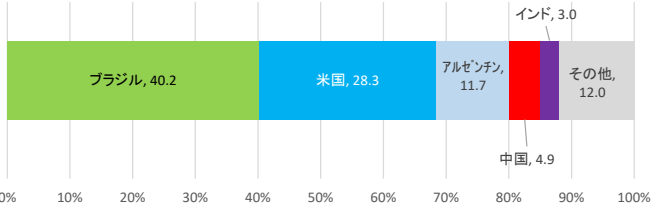
◎世界の大豆需給

(単位 : 百万トン)

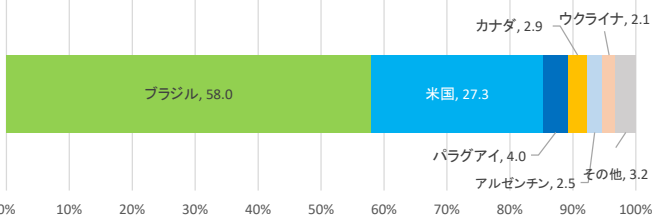
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率 (%)
生 産 量	378.2	396.4	420.6	▲ 0.2	6.1
消 費 量	366.7	383.3	410.7	1.5	7.1
うち搾油用	315.6	330.8	354.8	2.0	7.3
輸 出 量	171.8	177.7	182.1	0.2	2.5
輸 入 量	168.6	178.1	179.4	0.2	0.7
期末在庫量	101.8	115.3	122.5	1.1	6.2
期末在庫率	27.8%	30.1%	29.8%	0.1	▲ 0.3

資料 : USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (10 April 2025)

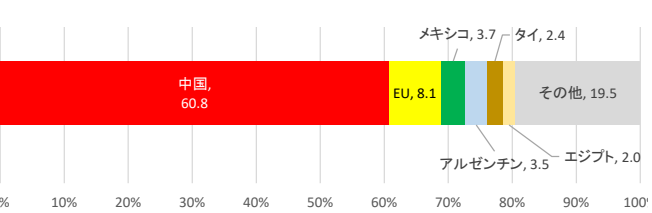
○ 2024/25 年度の世界の大豆の生産量 (420.6 百万トン) (単位 : %)



○ 2024/25 年度の世界の大豆の輸出量 (182.1 百万トン) (単位 : %)



○ 2024/25 年度の世界の大豆の輸入量 (179.4 百万トン) (単位 : %)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 2025/26 年度の作付意向面積は、前年度より 4.1%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加を受け、前年度より 4.9%増の 118.8 百万トンと史上 4 番目の見込み。作付け時の大豆価格が、前年度に史上最高の豊作となり価格が下落したとうもろこしに比べ大豆の作付けに有利であったため、多くの農家が大豆の作付けに切り替えたとみられる。

同「Prospective Plantings」(2025.3.31)によれば、2025/26 年度の作付意向面積は、33.8 百万ヘクタールと前年度より 4.1%減の見込み。現在の価格相場はとうもろこしの作付けに有利であるため、多くの農家が大豆からとうもろこしの作付けに切り替えるとみられる。

同「Crop Progress」(2025.4.14)によれば、4 月 13 日現在、作付進捗率は 2%で前年同期(3%)を下回り、過去 5 年間の平均(2%)と同水準で進んでいる。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、搾油用消費の引上げを受けて、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、大豆油等の需要増による搾油の収益改善の見通しから、前年度より 5.2%増の 69.0 百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、世界全体の搾油用需要が増加する見通しから、前年度より 7.7%増の 49.7 百万トンの見込み。2024 年 9 月～2025 年 3 月の輸出量は 4,124.0 万トンと、世界的な大豆需要の増加を受けて前年同期の 3,730.3 万トンより 10.6%増。内訳は中国 2,164.9 万トン(52.5%)、メキシコ 314.1 万トン(7.6%)、エジプト 235.1 万トン(5.7%)の順。また米国政府が打ち出した関税政策に対する中国政府の報復措置により、米国産大豆に対し、3 月 4 日に発表した 10%の追加関税と 4 月 11 日に発表した 125%の追加関税を合わせ、計 135%の追加関税が課されることになった。

USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、前月から 0.1 百万トン下方修正され、増産を受けて前年度より 9.5%増の 10.2 百万トンとなる見込み。期末在庫率は、前月予測からの変更はなく、8.6%と、前年度(8.3%)、過去 5 年平均(8.0%)を上回っている。

(単位：百万トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年 9 月～25年 8 月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	116.2	113.3	118.8	-	4.9
消 費 量	63.3	65.6	69.0	0.3	5.2
うち搾油用	60.2	62.2	65.9	0.3	5.9
輸 出 量	53.9	46.1	49.7	-	7.7
輸 入 量	0.7	0.6	0.7	0.1	19.3
期末在庫量	7.2	9.3	10.2	▲ 0.1	9.5
期末在庫率	6.1%	8.3%	8.6%	-	0.3

(参考)

収穫面積(百万ha)	34.87	33.29	34.82	-	4.6
単収(t/ha)	3.33	3.40	3.41	-	0.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 April 2025)

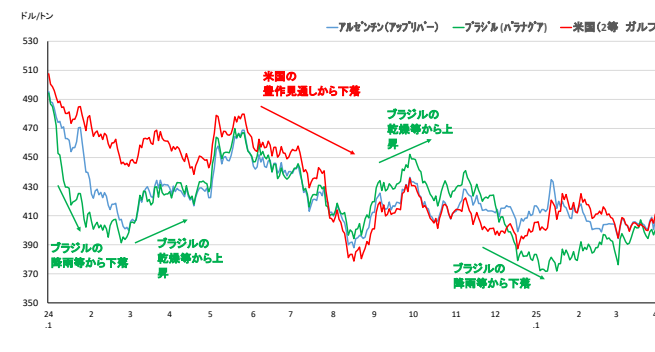
表 米国産大豆の輸出量と輸出先国

(輸出量：万トン、シェア：%)

2023/24年度 (2023年 9 月～2024年 8 月)			2023/24年度 (2023年 9 月～2024年 3 月)			2024/25年度 (2024年 9 月～2025年 3 月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
中国	2,455.2	54.8	中国	2,329.7	62.5	中国	2164.9	52.5
メキシコ	461.0	10.3	メキシコ	316.4	8.5	メキシコ	314.1	7.6
ドイツ	251.3	5.6	ドイツ	159.2	4.3	エジプト	235.1	5.7
インドネシア	227.9	5.1	イタリア	135.9	3.6	イタリア	195.7	4.7
日本	188.4	4.2	日本	135.1	3.6	ドイツ	175.9	4.3
その他	897.2	20.0	その他	654.0	17.5	その他	1038.4	25.2
合計	4,480.9	100.0	合計	3,730.3	100.0	合計	4,124.0	100.0

資料：USDA「Global Agricultural Trade System」のデータをもとに農林水産省にて作成

図：米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格（FOB）の推移



資料：IGC のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 2024/25 年度の生産量は前年度から 9.4%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が史上最高（対前年度比 2.7%増）となり、主要生産地の北東部及び中西部で生育期を通じて天候に恵まれ単収も増加（同 6.6%増）する見込みを受け、前年度より 9.4%増の 169.0 百万トンと史上最高の見通し。

CONAB の月例報告（2025.4.10）によれば、2024/25 年度の実産量は、とうもろこしから収益性が高い大豆に作付けがシフトしたこと等による作付面積の増加（対前年度比 2.8%増）及び単収の増加（同 6.6%増）から前年度より 9.4%増の 167.9 百万トンの見通し。3 月末現在、収穫進捗率は 81.4%と前年度同期（76%）を上回ったが、南部のリオ・グランデ・ド・スール州では生育期の 11 月～2 月中旬のラニーニャ現象による降雨量減少を受けて土壌水分量が不足した影響で、29%に留まっている。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、搾油用消費の引き上げを受けて前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度より 4.9%増の 61.1 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、中国からの引き続き堅調な需要等により、前年度から 1.3%増の 105.5 百万トンと史上最高の見込み。

同「Oilseeds:World Markets and Trade」（2025.4.10）によれば、ブラジル国内の大豆油の需要が増加しており、大豆油の輸出量が減少する見込み。ブラジル政府は、バイオディーゼル混合基準について、植物油の価格高騰によるインフレ懸念を理由に、2025 年 3 月に予定されていた、現行の 14%から 15%への引上げを取りやめている。

ブラジル貿易統計によれば、2024 年 10 月～2025 年 3 月の輸出主な輸出先は、中国 2,400.6 百万トン（76.3%）、タイ 154.7 百万トン（4.9%）、スペイン 102.9 百万トン（3.3%）の順。

4 月は大豆収穫の終盤で、例年の輸出最盛期となる。報道（2025.4.9）によれば、米国政府が打ち出した関税政策に対する中国の報復措置により、今年度過去最高の生産量を見込んでいるブラジルが、今後数か月間、中国市場におけるシェアを独占すると見られている

大豆ーブラジル

（概ね 9～12 月に作付けされ、1～4 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

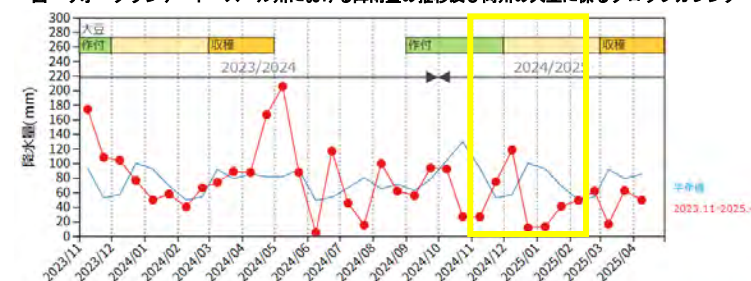
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年9月)			
			予測値、() は CONAB	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	162.0	154.5	169.0 (167.9)	-	9.4	
消 費 量	57.2	58.3	61.1 (60.7)	1.0	4.9	
うち搾油用	53.4	54.4	57.0 ...	1.0	4.8	
輸 出 量	95.5	104.2	105.5 (105.9)	-	1.3	
輸 入 量	0.2	0.9	0.2 (0.5)	-	▲ 82.8	
期末在庫量	36.8	29.8	32.3 (2.6)	0.8	8.6	
期末在庫率	24.1%	18.3%	19.4% (1.6%)	0.4	1.1	

（参考）

収穫面積(百万ha)	44.60	46.15	47.40 (47.52)	-	2.7
単収(t/ha)	3.63	3.35	3.57 (3.53)	-	6.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 April 2025)
CONAB「Gaos」(10 April 2025)

図 リオ・グランデ・ド・スール州における降雨量の推移及び同州の大豆に係るクロップカレンダー



黄色枠は、2024 年 11 月～2025 年 2 月中旬を示す。

出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）を基に作成

表 ブラジル産大豆の輸出量と輸出先国

（輸出量：万トン、シェア：%）

2023/24年度 (2023年10月～2024年9月)			2023/24年度 (2023年10月～2024年3月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年3月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
中国	7,818.3	75.1	中国	2,866.2	78.1	中国	2,400.6	76.3
タイ	437.5	4.2	タイ	123.6	3.4	タイ	154.7	4.9
トルコ	275.5	2.6	トルコ	90.3	2.5	スペイン	102.9	3.3
スペイン	234.8	2.3	スペイン	85.7	2.3	イラン	66.7	2.1
イラン	180.5	1.7	イラン	61.5	1.7	トルコ	53.9	1.7
その他	1,469.7	14.1	その他	444.4	12.1	その他	365.8	11.6
合計	10,416.3	100.0	合計	3,671.8	100.0	合計	3,144.6	100.0

資料：ブラジル貿易統計のデータを基に農林水産省にて作成

＜ カナダ ＞ 2024/25 年度の生産量は前年度から 8.4%増加する見込み（AAFC）

【生育・生産状況】AAFC「Outlook for Principal Field Crops」（2025.4.17）によれば、2024/25 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、主要生産地で収穫面積が増加するとともに、良好な天候を受け単収が増加したこと等により、前年度（7.0 百万トン）から 8.4%増の 7.6 百万トンの見込み。米国コーンベルトに隣接する最大生産州オンタリオ州の生産量は前年度から 8 %増の 4.4 百万トンの見込み。

カナダ統計局「Principal field crop areas, 2025」（2025.3.12）によれば、2025/26 年度の作付意向面積は、前年度から 1.3%減の 227 万ヘクタールの見込み。州別には、マニトバ州では前年度から 14.1%増の 65 万ヘクタールと増加するものの、オンタリオ州では前年度より 7.8%減の 117 万ヘクタール、ケベック州では前年度より 4.9%減の 40 万ヘクタールと減少する見込み。AAFC によれば、2025/26 年度の作付面積は、大豆価格の低下を受け、農家が他作物に作付けをシフトさせることが見込まれることから、2024/25 年度から減少するとみられる。

【需要状況】AAFC によれば、2024/25 年度の消費量は、前月から 0.2 百万トン下方修正されたものの、国内の搾油用等の安定的な需要により前年度（2.2 百万トン）から 2.5%増の 2.3 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2024/25 年度の輸出量は、供給増を受けて、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度（4.9 百万トン）より 14.0%増の 5.6 百万トンの見込み。

カナダ統計局によれば、2024/25 年度（2024 年 8 月～2025 年 2 月）の輸出量は 429.1 万トンで、前年同期（400.5 万トン）に比べ 7.1%増。国別では、中国 95.4 万トン（22.2%）、イラン 76.5 万トン（17.8%）、アルジェリア 46.8 万トン（10.9%）の順となっている。

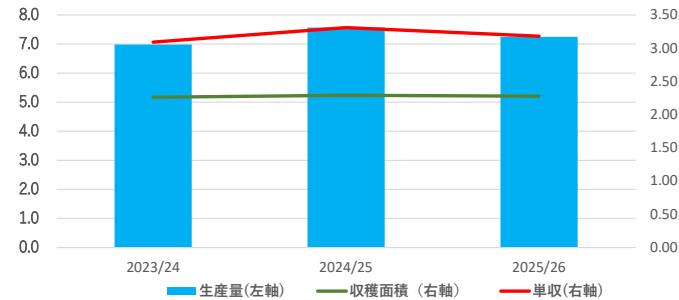
AAFC によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、搾油用消費の下方修正を受け、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、増産を受けて前年度から 22.3%増の 0.7 百万トンの見込み。

大豆－カナダ

（概ね 5 ～ 6 月に作付けされ、9 ～ 11 月に収穫される。）（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年8月～25年7月)		
			予測値、()は AAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.5	7.0	7.6 (7.6)	－	8.4
消 費 量	2.7	2.3	2.4 (2.3)	▲ 0.3	5.3
うち搾油用	1.8	1.7	1.6 (1.7)	－	▲ 3.1
輸 出 量	4.2	4.8	5.3 (5.6)	0.3	9.4
輸 入 量	0.5	0.3	0.3 (0.4)	▲ 0.1	▲ 10.4
期末在庫量	0.4	0.6	0.7 (0.7)	▲ 0.1	29.8
期末在庫率	5.3%	7.9%	9.5% (8.6%)	▲ 0.6	1.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.12	2.26	2.29 (2.29)	－	1.3
単収(t/ha)	3.09	3.09	3.30 (3.31)	－	6.8

資料：USDA「PS&D」、
「World Agricultural Production」(10 April 2025)
AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(17 April 2025)
(生産量：百万トン) (収穫面積：百万ha) (単収：t/ha)



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」（2025.4.17）をもとに農林水産省にて作成。

表 カナダ産大豆の輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年 8 月～2024年 7 月)			2023/24年度 (2023年 8 月～2024年 2 月)			2024/25年度 (2024年 8 月～2025年 2 月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
中国	152.9	31.6	中国	150.6	37.6	中国	95.4	22.2
アルジェリア	58.2	12.0	アルジェリア	54.9	13.7	イラン	76.5	17.8
イラン	52.3	10.8	イラン	52.3	13.1	アルジェリア	46.8	10.9
日本	33.9	7.0	日本	17.9	4.5	バングラデシュ	26.1	6.1
インドネシア	27.7	5.7	インドネシア	16.0	4.0	米国	23.2	5.4
その他	158.6	32.8	その他	108.7	27.1	その他	161.1	37.5
合計	483.6	100.0	合計	400.5	100.0	合計	429.1	100.0

資料：カナダ統計局のデータを基に農林水産省にて作成

< 中国 > 2024/25 年度の生産量は、史上最高の前年度から 0.9%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の減少を受けて前年度より 0.9%減の 20.7 百万トンとなるも、史上 2 番目に高い見込み。

中国国家统计局「2024 年糧食生産量データ」（2024.12.13）によれば、2024 年の生産量は、前年から 0.9%減の 20.7 百万トンとなる見込み。単収は 2.00 トン/ヘクタールと前年から 0.5%増加したものの、作付面積は 10.34 百万ヘクタールと前年より 1.4%減少することによる。なお、例年、4 月下旬から主産地の黒竜江省等で作付けが開始される見込み。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、国内の畜産物の需要増を受けて大豆粕の需要が増加することから、前年度より 5.8%増の 128.9 百万トンと史上最高の見込み。ただし、国内の食肉需要は堅調なものの、伸びが鈍化しており、中国国家统计局（2025.1.17）によれば、2024 年の食肉生産量は 9,663 万トンと、前年比で 0.2%増。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、史上最高の前年度より 2.7%減の 109.0 百万トンとなるも、引き続き高水準を維持する見込み。

中国海関統計によれば、2024 年 10 月～2025 年 2 月の輸入量は、前年同期より 2.4%増の 3,678.9 万トン。内訳は、米国 1,672.0 万トン（45.4%）、ブラジル 1,599.9 万トン（43.5%）、アルゼンチン 198.1 万トン（5.4%）の順。この期間はブラジル産大豆の端境期に当たるため、米国からの輸入が前年同期比で 41.2%増となった。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2025 年 2 月号」によれば、2 月の国内価格は 4,300 元/トンと、2024 年 10 月からほぼ横ばいで推移している。

USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、前月予測から変更はなく、生産量と輸入量の合計が消費量を上回っていることを受けて、前年度より 1.5%増の 44.0 百万トンと史上最高の見込み。

大豆—中国

（概ね 4～6 月に作付けされ、9～10 月に収穫される。）

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	20.3	20.8	20.7 (20.9)	-	▲ 0.9
消 費 量	117.5	121.8	128.9 (132.3)	-	5.8
うち搾油用	96.0	99.0	105.0 (109.7)	-	6.1
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	42.9
輸 入 量	104.5	112.0	109.0 (109.5)	-	▲ 2.7
期末在庫量	32.3	43.3	44.0 (46.1)	-	1.5
期末在庫率	27.5%	35.5%	34.1% (34.8%)	-	▲ 1.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.24	10.47	10.33 (10.36)	-	▲ 1.3
単収(t/ha)	1.98	1.99	2.00 (1.99)	-	0.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 April 2025)
IGC「Grain Market Report」(20 March 2025)

表 中国における大豆の輸入量と輸入先国

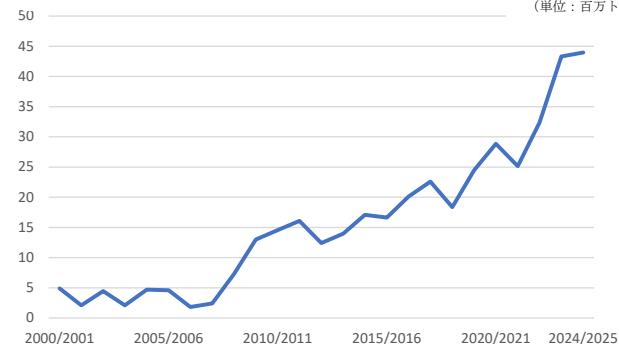
（輸入量：万トン、シェア：%）

2023/24年度 (2023年10月～2024年9月)			2023/24年度 (2023年10月～2024年2月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年2月)		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	7,732.1	73.8	ブラジル	2,204.6	61.4	米国	1,672.0	45.4
米国	2,091.6	20.0	米国	1,132.7	31.5	ブラジル	1,599.9	43.5
アルゼンチン	267.7	2.6	カナダ	120.3	3.3	アルゼンチン	198.1	5.4
カナダ	151.9	1.5	アルゼンチン	65.7	1.8	ウルグアイ	106.6	2.9
ウルグアイ	102.7	1.0	ロシア	42.0	1.2	カナダ	84.8	2.3
その他	128.6	1.2	その他	14.7	0.4	その他	17.4	0.5
合計	10,474.7	100.0	合計	3,593.4	100.0	合計	3,678.9	100.0

資料：中国海関統計のデータを基に農林水産省にて作成

図 中国における大豆の期末在庫量の推移

（単位：百万トン）



資料：USDA「PS&D」(2025.4.10)をもとに農林水産省で作成

＜ アルゼンチン ＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度から 1.6%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.6%増の 49.0 百万トンの見込み。増産の主な要因は、大豆の収益性が高まっていることに加え、農家が病害虫のヨコバイによる被害懸念からとうもろこしから大豆へ作付けをシフトさせ収穫面積が増加したことによるとみられる。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2025.4.15)によれば、4月上旬、一部主要農業生産地域では、降雨が続き、既に成熟していた大豆の収穫に遅れが生じた。アルゼンチン農牧漁業省(MAGyp)の月報(2025.4.16)によれば、収穫進捗率は6%と、前年同期(14%)と比べ遅れている。早植え大豆は2024年12月～2025年1月の高温乾燥の影響によって単収の減少が見込まれていたものの、今回の降雨を受けて、単収が回復する見込み。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、搾油用消費の引上げを受けて前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、増産に伴い搾油量が増加することから、前年度比 14.3%増の 50.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸入量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正されたものの、国内生産量の増加に伴い輸入需要が減少することから、前年度より 20.4%減の 6.2 百万トンの見込み。

2024/25 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、世界全体の供給量の引上げによる競争の激化を受けて前年度より 11.9%減の 4.5 百万トンとなるも、中国向け輸出が引き続き堅調に推移する見通し。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆に最大 33%、大豆油及び大豆粕に 31%を設定していたが、2025 年 1 月 25 日、1 月 27 日～6 月 30 日まで一時的に大豆を 26%、大豆油及び大豆粕を 24.5%に引き下げると発表した。

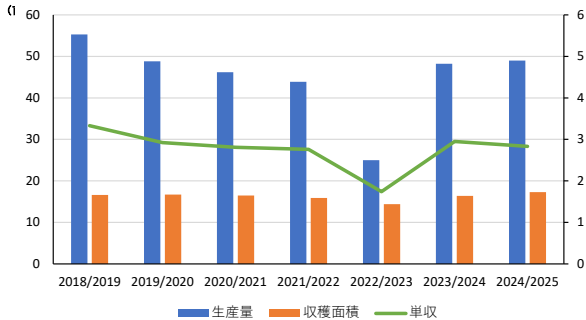
大豆ーアルゼンチン

(早植え大豆は、概ね 10～1 月に作付けされ、3～7 月に収穫され、
遅植え大豆は、概ね 10～1 月に作付けされ、4～7 月に収穫される。)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	25.0	48.2	49.0 (50.5)	-	1.6	
消 費 量	36.6	43.8	50.1 (50.5)	0.5	14.3	
うち搾油用	30.3	36.6	42.6 (44.0)	0.6	16.5	
輸 出 量	4.2	5.1	4.5 (5.0)	-	▲ 11.9	
輸 入 量	9.1	7.8	6.2 (5.4)	0.2	▲ 20.4	
期末在庫量	17.0	24.1	24.7 (9.4)	▲ 0.3	2.5	
期末在庫率	41.7%	49.1%	45.1% (16.9%)	▲ 1.0	▲ 4.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	14.40	16.37	17.30 (17.33)	-	5.7	
単収(t/ha)	1.74	2.95	2.83 (2.77)	-	▲ 4.1	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 April 2025)
IGC「Grain Market Report」(20 March 2025)

図 アルゼンチン産大豆の生産量、収穫面積、単収の推移



資料：USDA「PS&D」(2025.4.10)を基に農林水産省

写真：北部サンタフェ州の大豆圃場風景(2025.3.19撮影)



本圃場では第 1 期作大豆の作付けが 2024 年 11 月前半に行われ、現在は完熟期にあたる。収穫は 4 月以降に予定されている。

(参考1)本レポートに使用されている各国の市場年度について（2024/25年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	24年6月～25年5月	24年9月～25年8月	24年8月～25年7月	24年9月～25年8月
カナダ	24年8月～25年7月			24年8月～25年7月
豪州	24年10月～25年9月		25年3月～25年2月	
EU	24年7月～25年6月	24年10月～25年9月		
中国	24年7月～25年6月	24年10月～25年9月	24年7月～25年6月	24年10月～25年9月
ロシア	24年7月～25年6月	24年10月～25年9月		24年9月～25年8月
ウクライナ	24年7月～25年6月	24年10月～25年9月		
ブラジル		25年3月～26年2月	25年4月～26年3月	24年10月～25年9月
アルゼンチン	24年12月～25年11月	25年3月～26年2月		24年10月～25年9月
タイ			25年1月～12月	
インド	24年4月～25年3月		24年10月～25年9月	
ベトナム			25年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
例えば、2024/25年度は、米国の小麦では2024年6月～2025年5月、ブラジルのとうもろこしでは2025年3月～2026年2月です。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>（「Reference Data」タブを参照）

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel （ブッシェル） （穀物により異なる）	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

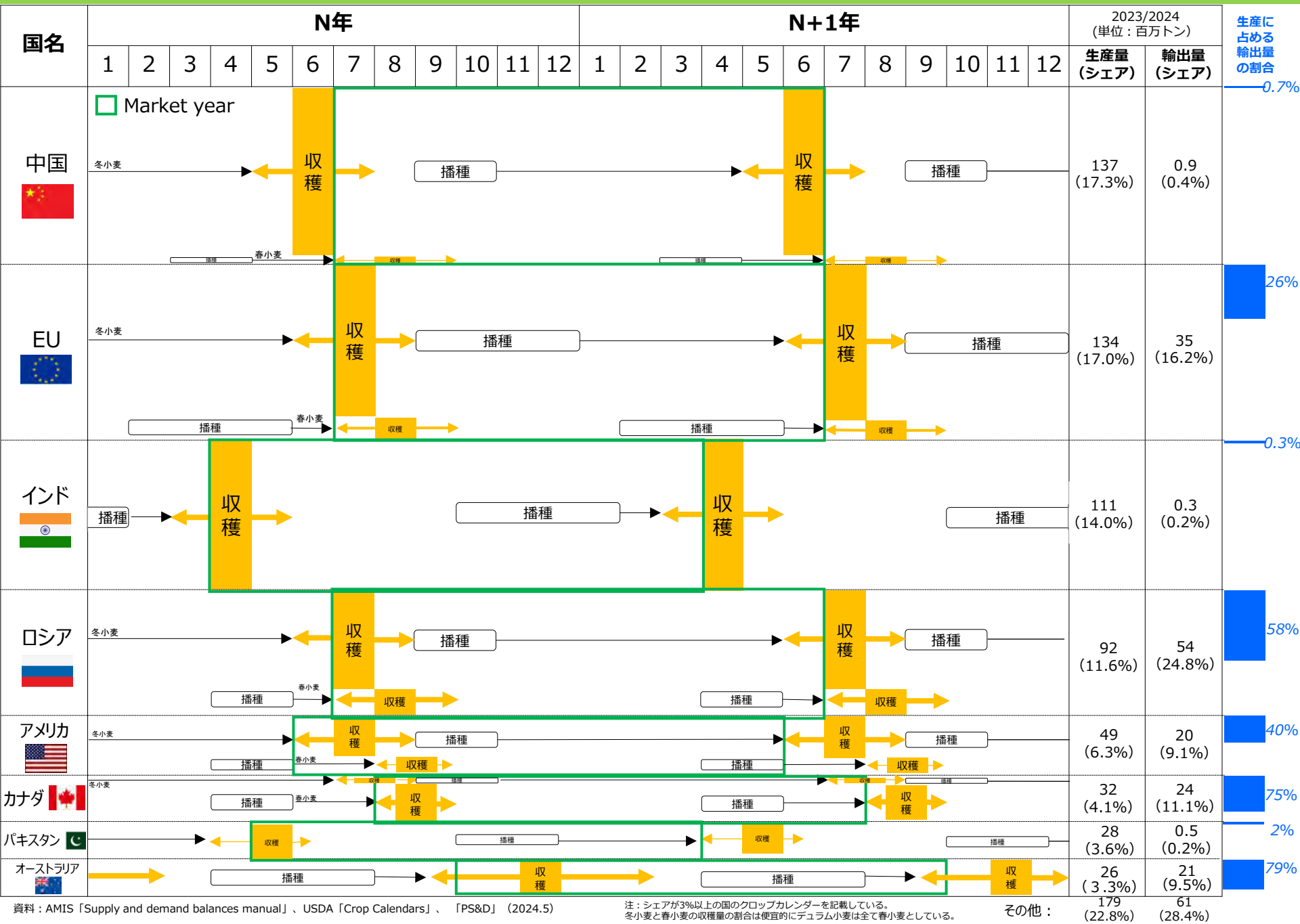
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏：℃＝(° F－32)÷1.8			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「Crop Calendar」、「PS&D」(2024.5)

注・シェアが3%以上の国のクワップカレンダーを記載している。 その他・

122	19
(23.5%)	(36.1%)

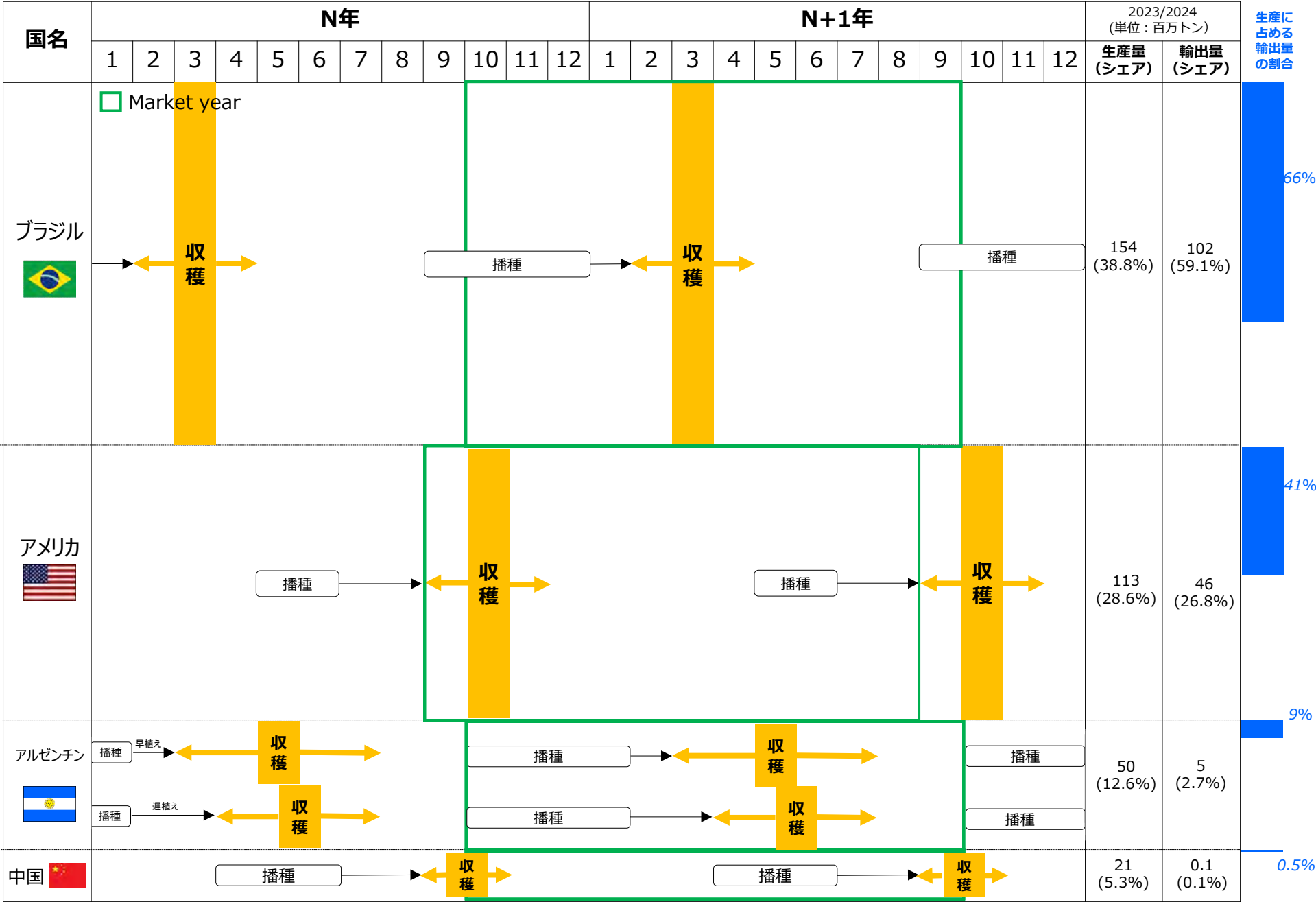
主要生産国のクロップカレンダー(とうもろこし)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2023/2024 (単位：百万トン)		生産に 占める 輸出量 の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量 (シェア)	輸出量 (シェア)	
アメリカ	Market year																								390 (31.7%)	55 (27.7%)	14%
中国																									289 (23.5%)	0 (0.0%)	0%
ブラジル																									122 (9.9%)	50 (25.3%)	41%
EU																									61 (5.0%)	4 (2.1%)	7%
アルゼンチン																									53 (4.3%)	38 (19.3%)	72%
インド																									38 (3.1%)	0.8 (0.4%)	2%

主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」（2024.5）注：シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。 その他：59 (14.8%) 20 (11.3%)

主要生産国のクロップカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2023/2024 (単位：百万トン)		生産に 占める 輸出量 の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量 (シェア)	輸出量 (シェア)	
EU 	□ Market year						収穫	播種					収穫	播種					20 (22.6%)	0.6 (3.3%)	3%						
カナダ 	播種						収穫	播種					収穫	播種					19 (21.3%)	7 (39.3%)	35%						
中国 	収穫						播種					収穫	播種					15 (17.4%)	0 (0%)	0%							
インド 	収穫						播種					収穫	播種					13 (14.1%)	0 (0%)	0%							
オーストラリア 	播種						収穫	播種					収穫	播種					6 (6.4%)	5 (27.6%)	81%						
ウクライナ 	収穫						播種	収穫					播種	収穫					4 (5.0%)	3 (20.5%)	78%						
ロシア 	播種						収穫	播種					収穫	播種					4 (4.8%)	0.8 (4.8%)	19%						

第46号特別分析トピック:世界の食料需給の動向と中長期的な見通し

世界の食料需給の動向と 中長期的な見通し

—世界食料需給モデルによる2034年の世界食料需給の見通し—

令和7年4月
農林水産政策研究所



目次

I. 動向編

1. 世界の穀物及び大豆の需給動向	1
2. とうもろこしの需要動向	2
3. とうもろこしの生産量変化	3
4. とうもろこしの需給動向と貿易フローの変化：2002年とうもろこし貿易フロー図	4
5. とうもろこしの需給動向と貿易フローの変化：2022年とうもろこし貿易フロー図	5
6. 大豆の生産量変化	6
7. 大豆の需給動向と貿易フローの変化：2002年大豆貿易フロー図	7
8. 大豆の需給動向と貿易フローの変化：2022年大豆貿易フロー図	8
9. 小麦需給と貿易動向	9
10. 小麦の需給動向と貿易フローの変化：2002年小麦貿易フロー図	10
11. 小麦の需給動向と貿易フローの変化：2022年小麦貿易フロー図	11
12. 米需給と貿易動向	12
13. 中国：国家安全優先に、食糧供給増強を図る 単収と面積増で食糧生産は7億トンに	13
14. 中国における食肉生産・輸入（豚肉・牛肉の価格動向等）	14
15. ロシアとウクライナ：天候不順により生産量・輸出量ともに減少傾向	15
16. ブラジル：大豆・とうもろこしの生産動向	16
17. アルゼンチン：異常気象による主要穀物等単収増減とミレイ大統領による穀物等輸出税軽減	17
18. インドの穀物輸出・植物油輸入動向	18
19. バイオ燃料の需要動向	19
20. 重なる紛争や政策的不確実性による消費者物価指数の変動と海上輸送運賃の変動	20
21. 国際穀物等価格の動向	21
22. 国際商品価格・FAO食料価格指数の推移	22

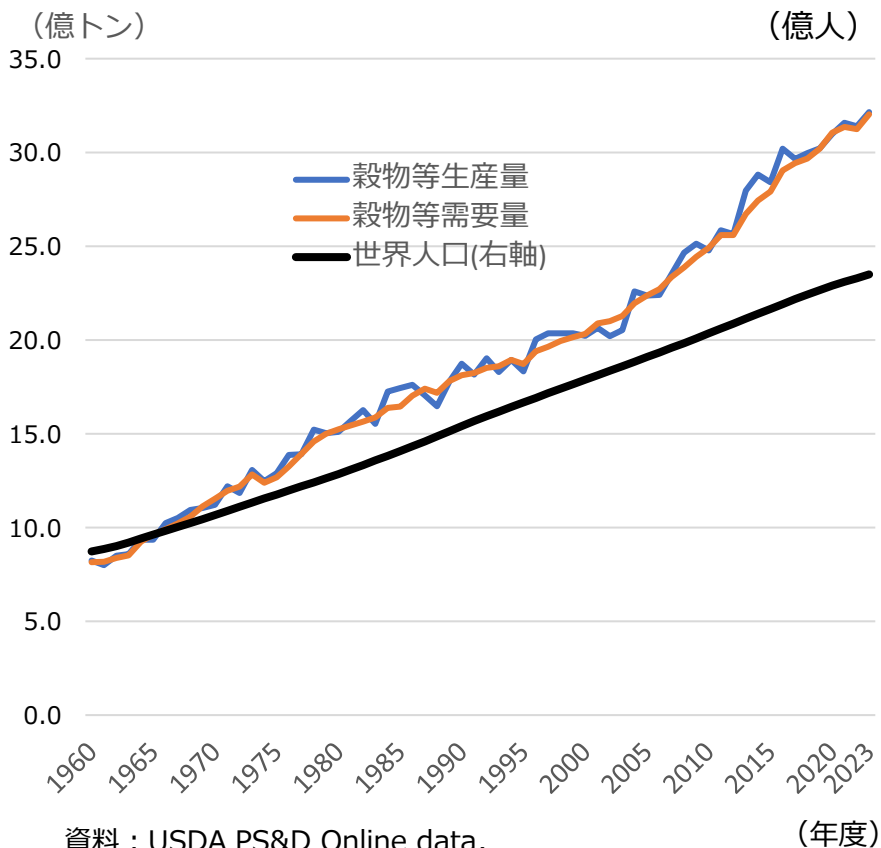
II. 見通し編

1. 世界食料需給モデルによる予測の目的及び前提	23
2. 2034年における世界の食料需給見通し－『食料需要の伸びの低下を懸念』－【概要】	24
3. 世界食料需給モデルの試算の前提に使用した総人口及びGDPの見通し	25
4. 地域別の需給見通し：とうもろこし	26
5. 地域別の需給見通し：大豆	27
6. 地域別の需給見通し：小麦	28
7. 地域別の需給見通し：米	29
8. 地域別の需給見通し：肉類	30
9. 穀物の需給見通し：世界の穀物の消費・生産量の内訳	31
10. 穀物・畜産物等の需給見通し：穀物及び大豆の国際価格見通し	32
11. 穀物・畜産物等の需給見通し：世界における各品目の消費増加と食料価格	33
（参考1）OECD－FAO、USDAにおける中期的な世界食料需給見通しの概要	34
（参考2）世界食料需給モデルの概要	35

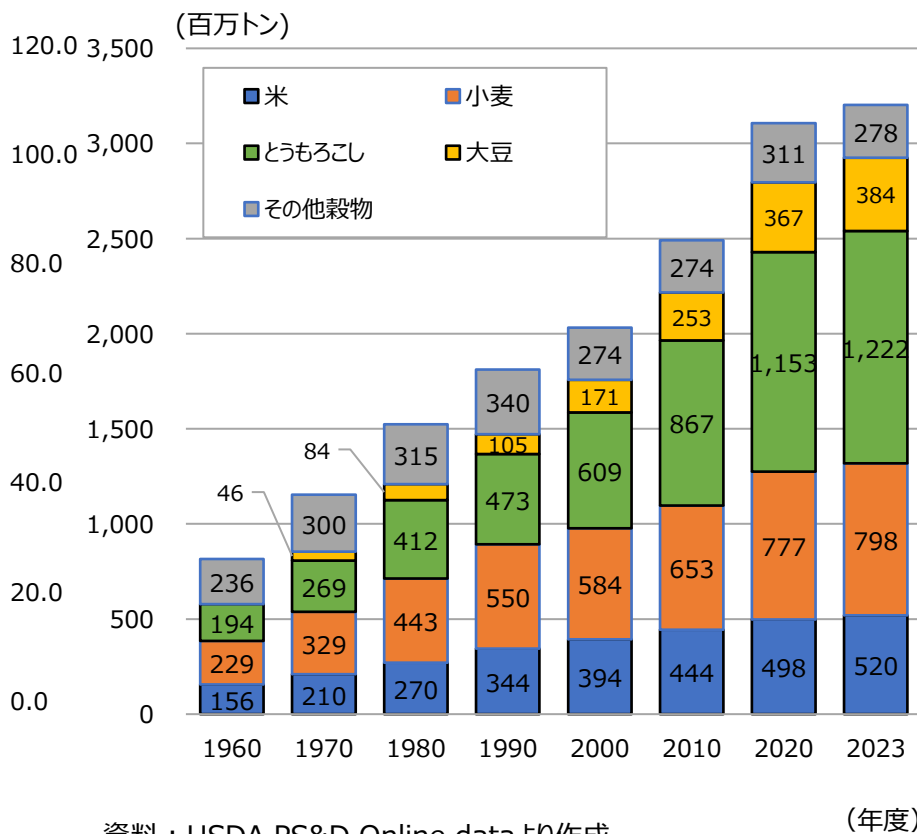
1 世界の穀物及び大豆の需給動向

- 世界の穀物及び大豆の需要量は、総人口の伸び率を上回って増加。
 - 需要量は、とうもろこし及び大豆の伸びが大きく増加。穀物の中でとうもろこし需要量が最大。
 - 需要量の増加に対して、生産量も増加。短期的には豊凶等による変動はあるが、COVID-19パンデミック以前は生産量が需要量をやや上回り、近年は生産量と需要量がほぼ均衡。
- (参考) 1970年に比べ、2023年の人口は2.2倍、需要量はそれぞれ小麦が2.4倍、米2.5倍、とうもろこし4.5倍、大豆8.4倍

① 世界の穀物及び大豆の需給と世界人口の動向



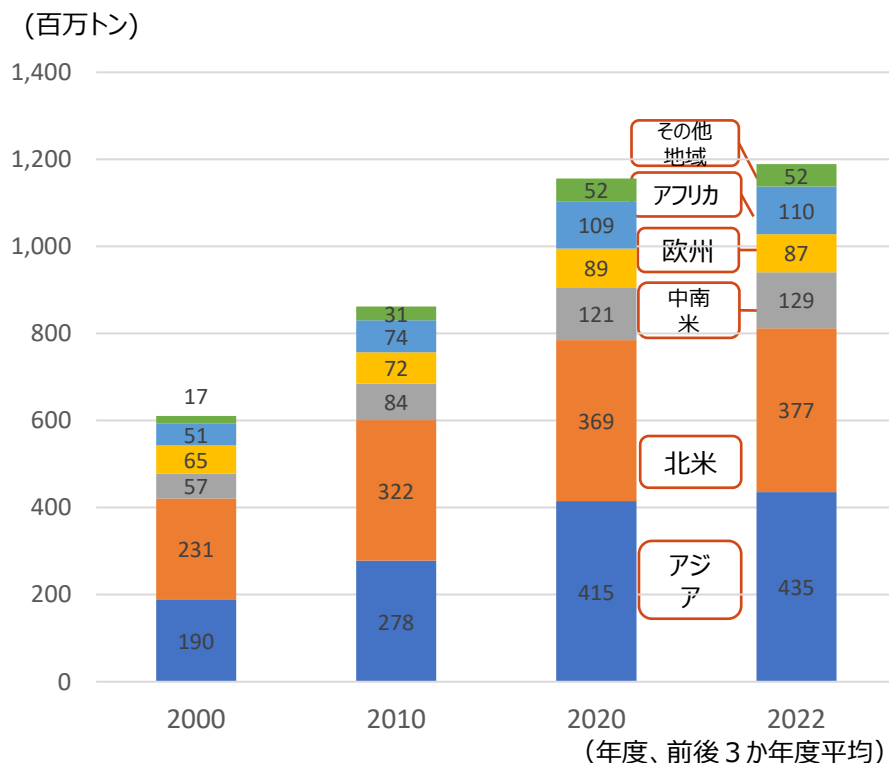
② 穀物及び大豆の需要の品目別内訳



2 とうもろこしの需要動向

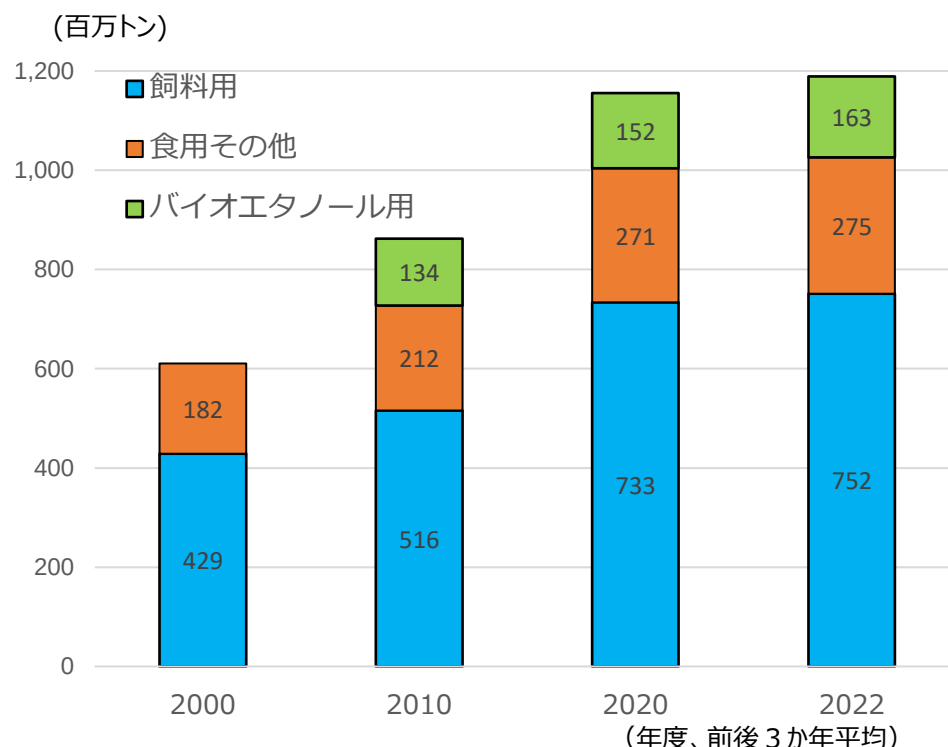
- 2022年度(前後3か年度平均)の世界のとうもろこし需要量は、2000年度(同平均)に比べて95%増加。地域別では、アジアの需要量が130%増加し、2022年度に37%のシェアを占める。
- 現在の用途別内訳では、2000年度に比べて飼料用が75%増加し、食用等は51%増加。2000年代後半からバイオエタノール用が新規需要として消費量を「底上げ」している。
- 2010年度(同平均)から2022年度までの用途別の増加率は、飼料用・食用等がそれぞれ46%・30%に対して、新規需要のバイオエタノール用の伸びは21%に留まる。

① 世界のとうもろこし需要動向の地域別内訳



資料：USDA PS&D Online dataより作成

② とうもろこし需要の用途別内訳の動向

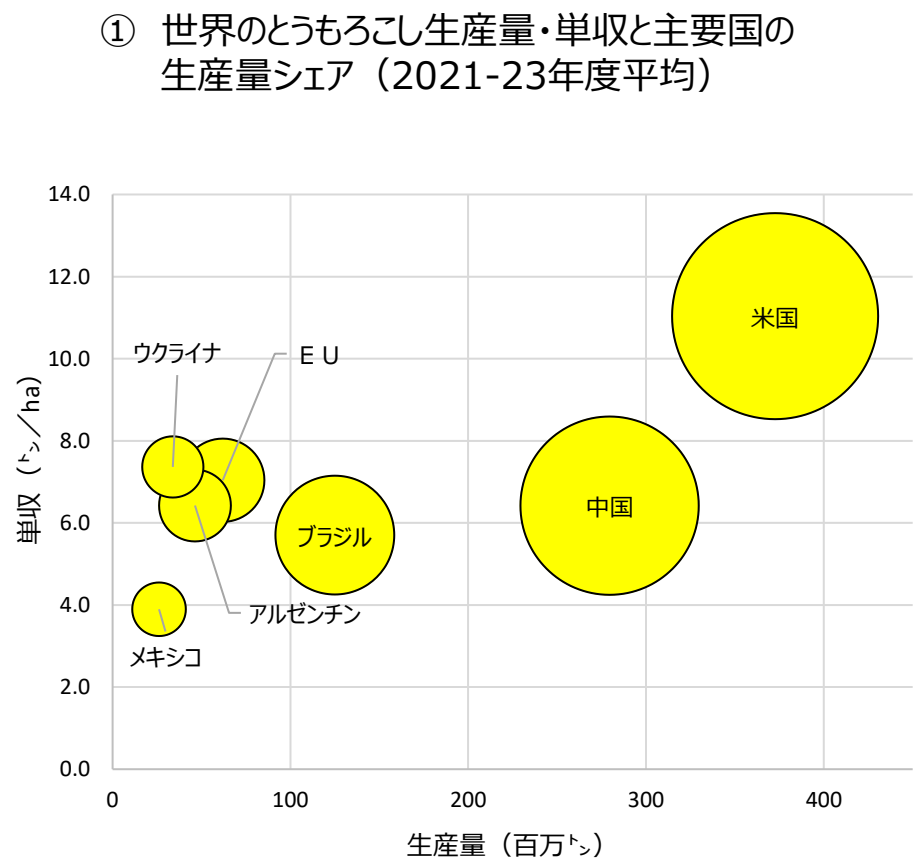


資料：USDA PS&D Online dataより作成, バイオエタノール用とうもろこし需要量は農林水産政策研究所調べ

3 とうもろこしの生産量変化

- 世界のとうもろこしの生産量(2021-23年度平均)は、米国が世界生産量の31%のシェアを占めてトップを維持し、中国、ブラジルを加えた上位3か国で65%のシェア。

○ 米国は、主に単収の伸びが生産拡大に寄与。ブラジル、アルゼンチン、ウクライナは、収穫面積の拡大も生産に大きく寄与。単収は各国で差異があり、ブラジルの単収は5.7トン/haで、米国の11.0トン/haの約半分。ブラジル・アルゼンチンは2000年度に比べ生産量が約3倍に増加、ウクライナは、8倍程度に拡大。



② 主要とうもろこし生産国における生産量の増減要因

(2020年度=100)

		1990年度	2000年度	2010年度	2020年度	2023年度
米国	生産量	56.32	70.39	88.21	100.00	108.90
	収穫面積	81.48	88.16	99.12	100.00	105.28
	単収	69.14	79.83	89.03	100.00	103.44
中国	生産量	37.14	40.66	73.18	100.00	110.81
	収穫面積	51.87	55.87	84.76	100.00	107.16
	単収	71.52	72.78	86.23	100.00	103.32
ブラジル	生産量	27.97	47.74	65.98	100.00	140.23
	収穫面積	67.79	65.19	69.35	100.00	108.04
	単収	41.19	73.23	95.19	100.00	129.75
アルゼンチン	生産量	13.97	27.93	45.82	100.00	90.91
	収穫面積	27.38	40.58	54.03	100.00	100.86
	単収	51.07	68.73	84.74	100.00	90.04
ウクライナ	生産量	15.64	12.70	39.34	100.00	107.27
	収穫面積	22.87	23.71	49.08	100.00	77.85
	単収	68.33	53.56	80.07	100.00	137.72
世界計	生産量	42.49	52.17	74.90	100.00	108.48
	収穫面積	64.24	68.26	82.88	100.00	102.27
	単収	66.19	76.46	90.44	100.00	106.02

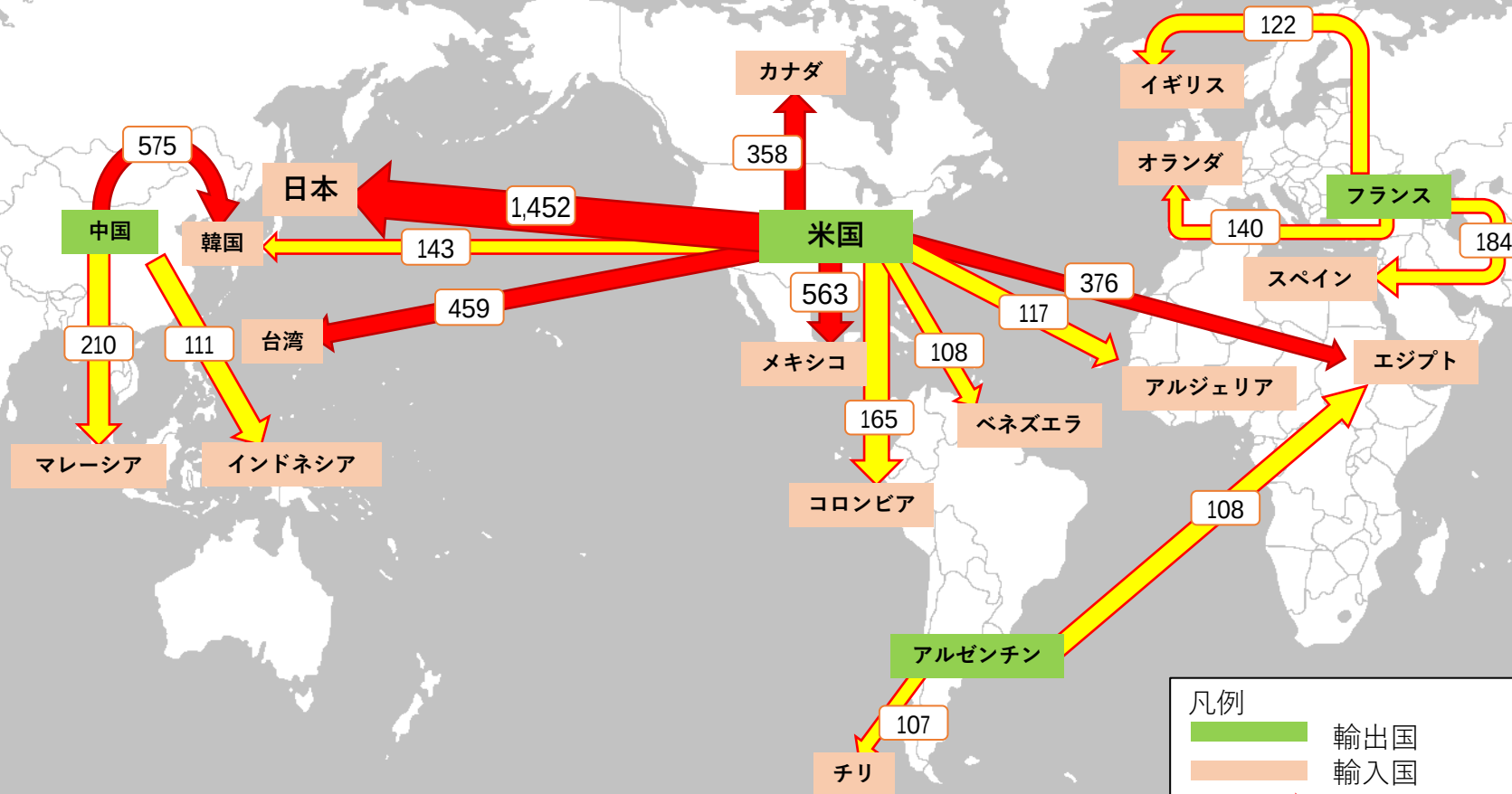
4

2002年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、米国が60%と圧倒的に高く、次いで中国が13%、アルゼンチンが12%と続く。また、輸入量におけるシェアは、日本が22%を占め、次いで韓国、メキシコ、エジプト等が続く。

(USDA PS&D Online data)

注：Global Trade Atlasのデータ（2020.01）で、とうもろこし(HS1005)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

(単位：万トン)



凡例

輸出国

輸入国

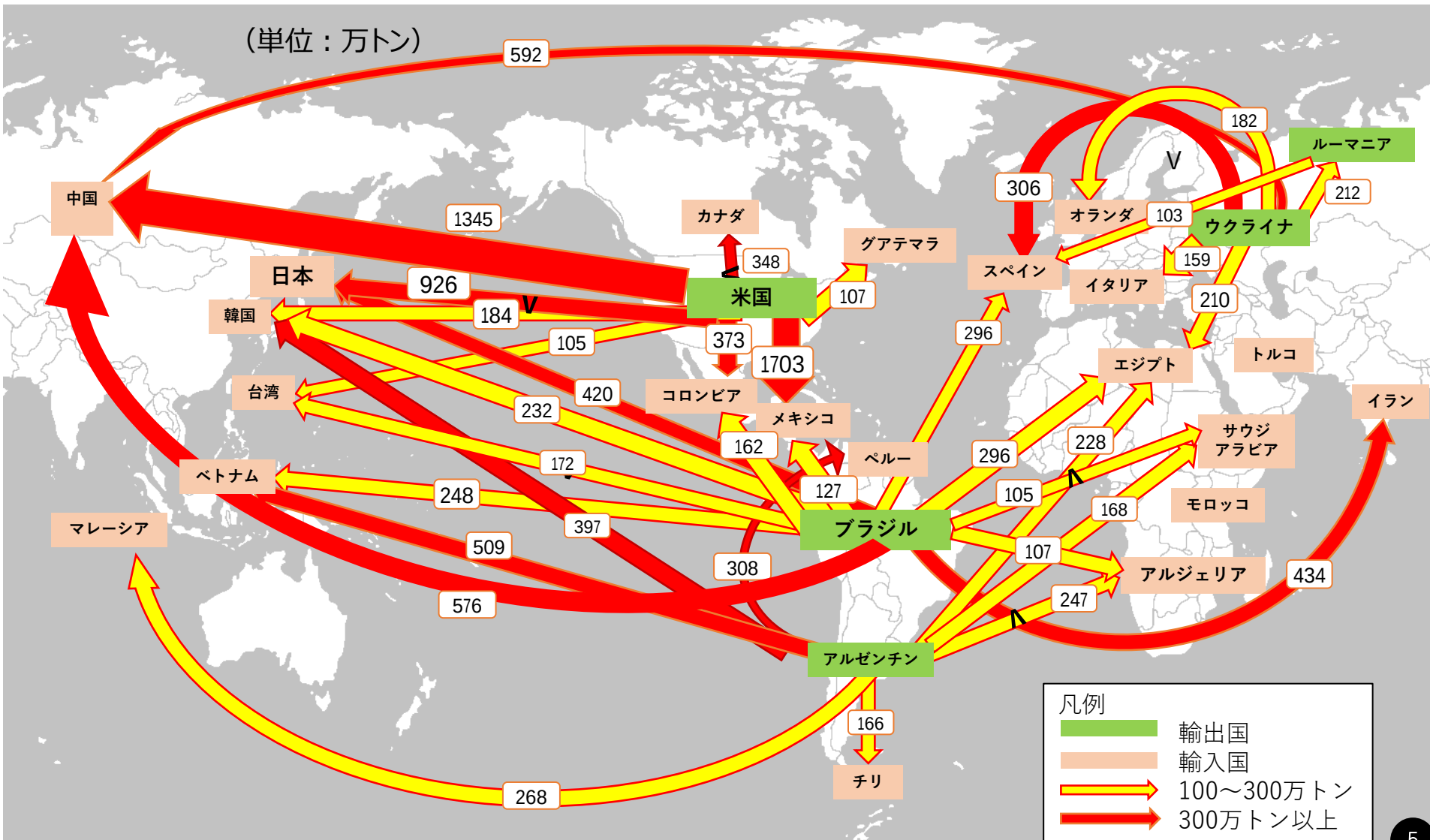
100～300万トン
300万トン以上

→ 300万トン以上

注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

5 とうもろこしの需給動向と貿易フローの変化：2022年とうもろこし貿易フロー図

注：Global Trade Atlasのデータ（2025.02）で、とうもろこし(HS1005)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

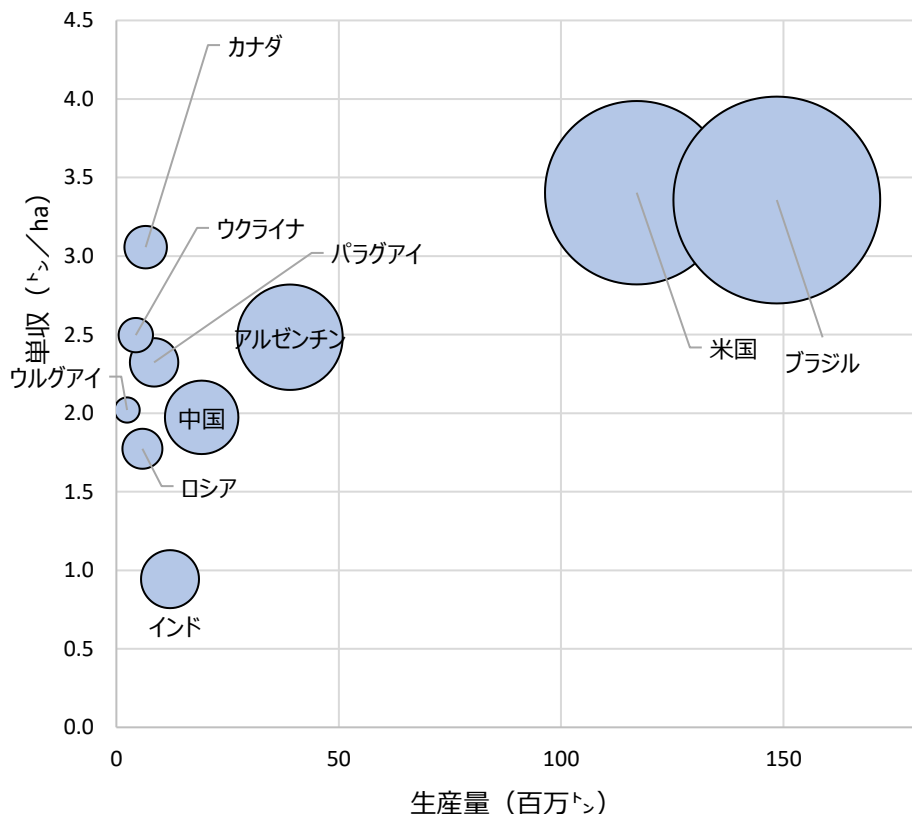


注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

6 大豆の生産量変化

- 大豆生産量は(2021-23年度平均)、ブラジル、米国がそれぞれ世界の生産量の39%、31%のシェアを占め、アルゼンチンを含めた上位3か国のシェアが81%を占めて偏在化。
- ブラジル、アルゼンチンは2000年以降、単収だけでなく、収穫面積の増加が大きく生産量の増加に寄与し、それぞれ2000年度に比べて3倍、1.6倍程度まで拡大。米国は、単収の増加が主に寄与。

① 世界の大豆生産量・単収と主要国の生産量シェア
(2021-23年度平均)



資料：USDA PS&D Online dataより作成

② 主要大豆生産国における生産量の増減要因
(2020年度=100)

		1990年度	2000年度	2010年度	2020年度	2023年度
ブラジル	生産量	11.3	28.3	54.0	100.0	109.7
	収穫面積	24.5	35.0	60.8	100.0	115.8
	単収	46.2	80.9	88.6	100.0	94.6
米国	生産量	45.7	65.4	79.0	100.0	98.7
	収穫面積	68.4	87.7	92.7	100.0	99.6
	単収	66.8	74.6	85.1	100.0	99.1
アルゼンチン	生産量	24.9	60.2	106.1	100.0	104.4
	収穫面積	28.8	63.1	111.1	100.0	99.4
	単収	86.1	95.0	95.4	100.0	105.0
中国	生産量	56.1	78.6	78.6	100.0	106.3
	収穫面積	76.5	94.2	88.0	100.0	105.9
	単収	73.7	83.8	89.4	100.0	100.5
インド	生産量	24.9	50.2	96.9	100.0	113.6
	収穫面積	19.8	44.9	74.3	100.0	102.2
	単収	125.9	112.3	130.9	100.0	111.1
世界合計	生産量	28.2	47.6	71.7	100.0	106.9
	収穫面積	41.8	58.1	79.8	100.0	107.9
	単収	67.6	82.0	89.8	100.0	98.9

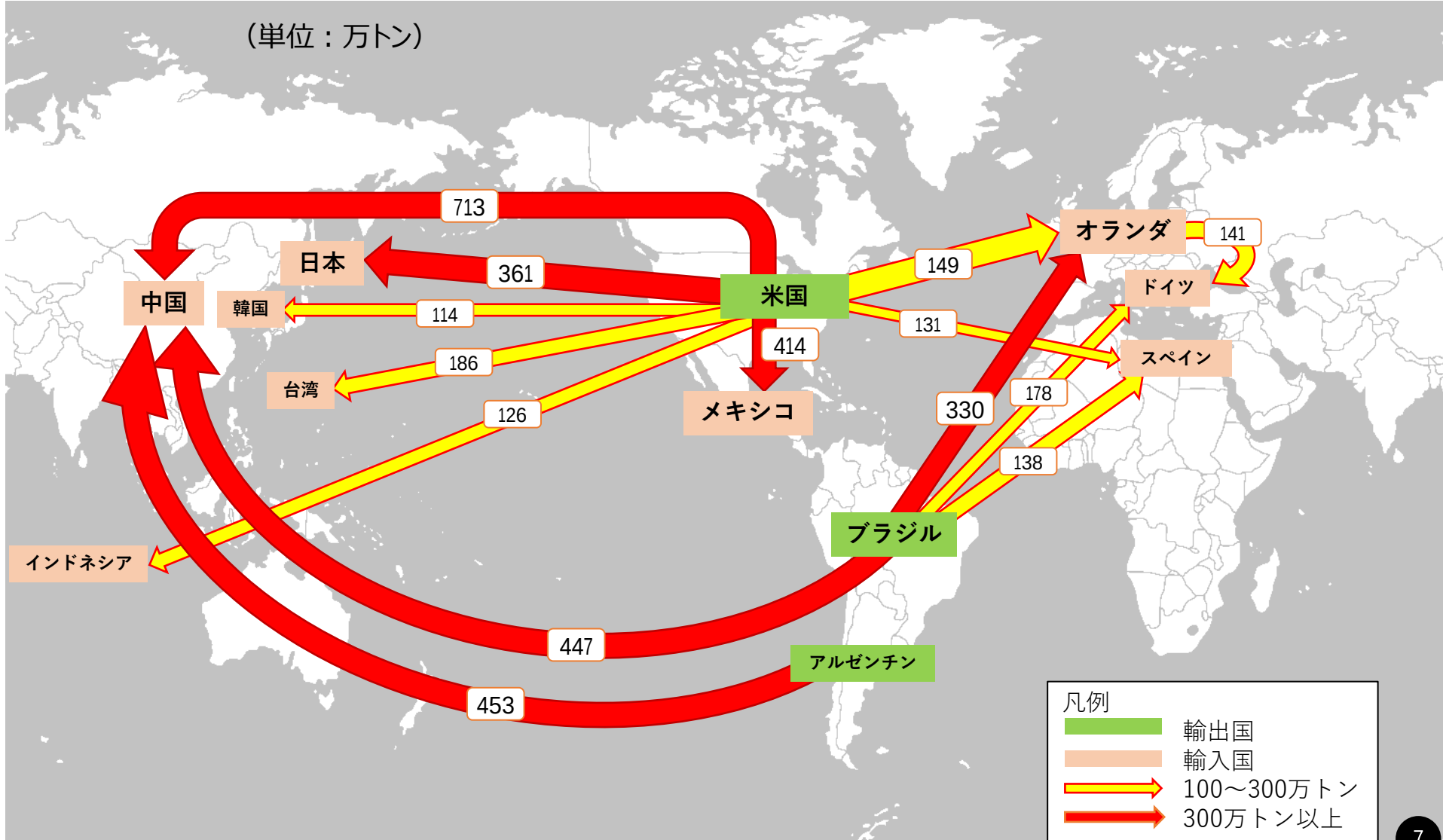
資料：USDA PS&D Online dataより作成

7 大豆の需給動向と貿易フローの変化：2002年大豆貿易フロー図

2002年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、米国が48%と高く、次いでブラジルが32%を占めた。輸入量シェアは、中国が28%、日本とメキシコがそれぞれ約8%を占めた。（USDA PS&D Online data）

注：Global Trade Atlasのデータ（2020.01）で、大豆(HS1201)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

（単位：万トン）



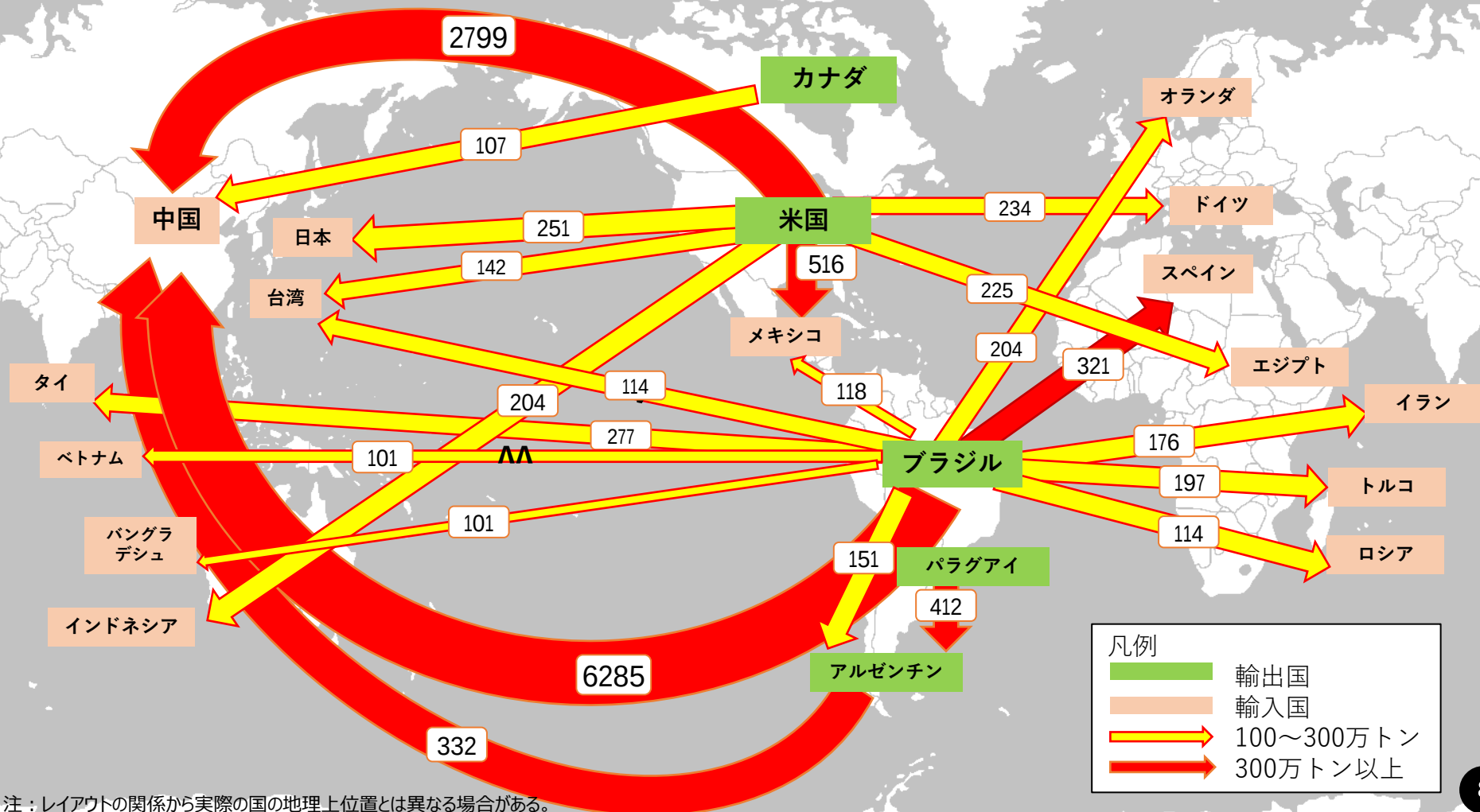
注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

8 大豆の需給動向と貿易フローの変化：2022年大豆貿易フロー図

2022年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、ブラジルが55%と大幅に高まっている。輸入量シェアは中国が61%と大幅に上昇する一方、日本は2%に低下。（USDA PS&D Online data）

注：Global Trade Atlasのデータ（2025.02）で、大豆(HS1201)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

（単位：万トン）

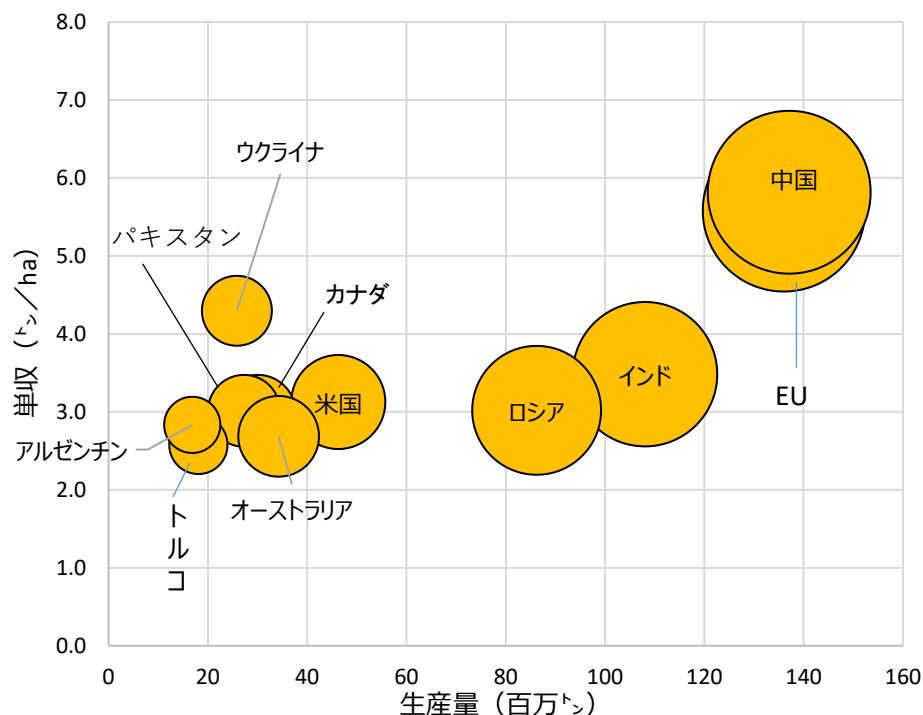


注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

9 小麦需給と貿易動向

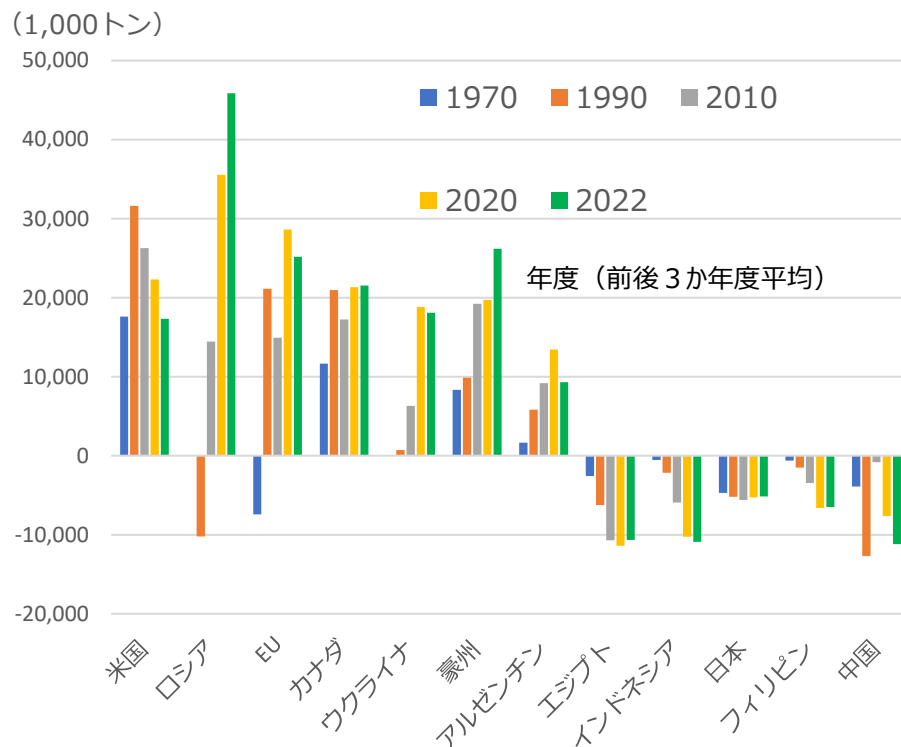
- 世界の小麦生産量(2021-23年度平均)は、中国、EUがそれぞれ17%を占め、次いで、インド、ロシア、米国と続き、上位5か国・地域で66%のシェア。米国のシェアは低下傾向。
- 小麦は、主に単収の伸びにより生産量が増加する一方、先進国の収穫面積は、若干の減少傾向。
- 2000年代以降、伝統的な主要輸出国である米国、カナダ等に加えて、新興のロシア、ウクライナが輸出市場で台頭。ロシアの輸出量は2014年以降、米国の輸出量を超過している。
- 北アフリカ・中東地域ではエジプト等、東南アジアではインドネシア、フィリピン等が輸入拡大。ロシア、ウクライナ等の新興輸出国が、中東・北アフリカ等へ輸出を増やした。

① 世界の小麦生産量・単収と主要国の生産量シェア (2021-23年度平均)



資料：USDA PS&D Online Dataより作成

② 国別小麦純輸出量の推移



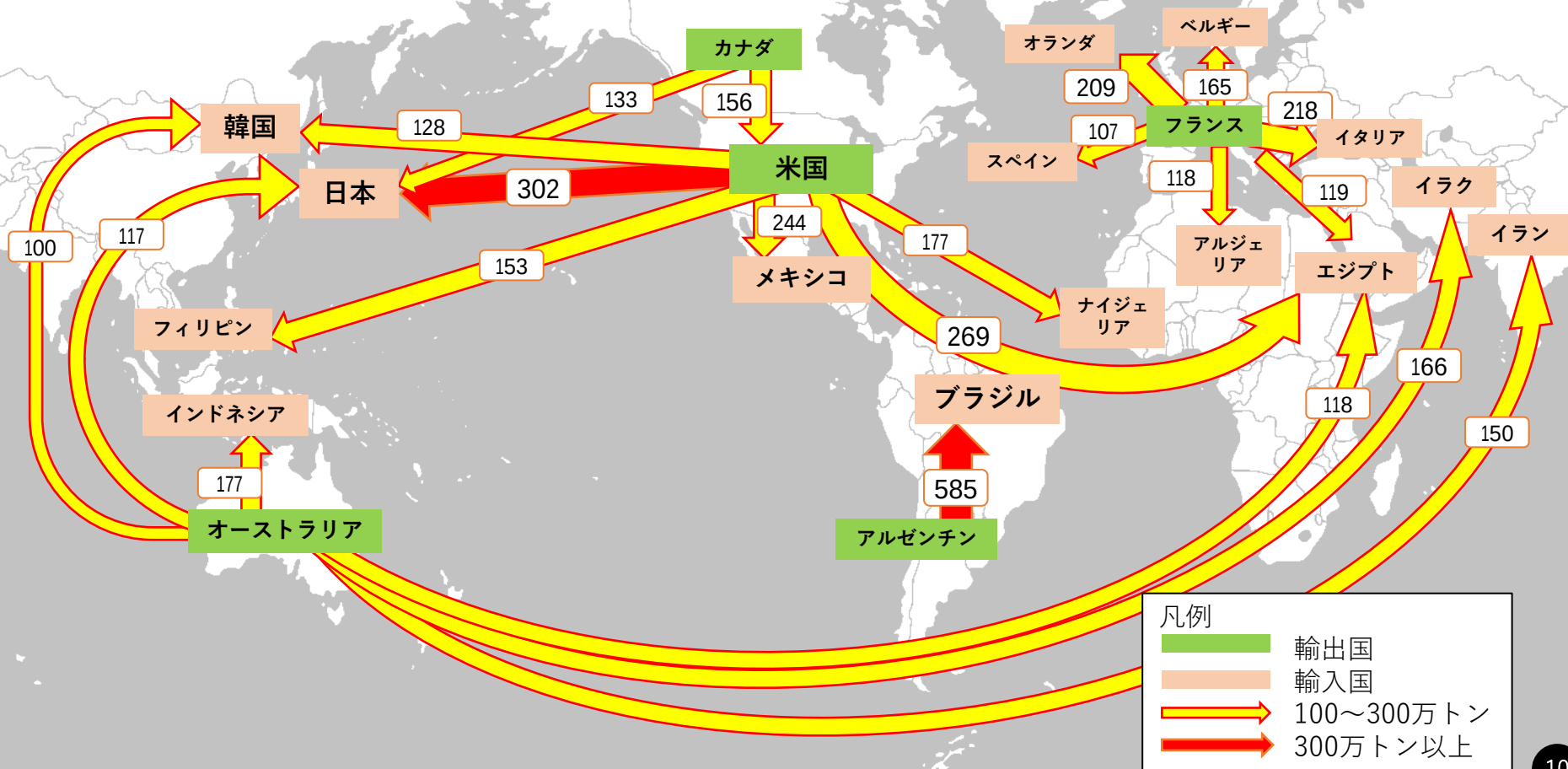
資料：USDA PS&D Online Dataより作成

10 小麦の需給動向と貿易フローの変化：2002年小麦貿易フロー図

2002年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、米国が25%で最大。豪州、カナダ、アルゼンチン等が続く。輸入量シェアは、エジプト、ブラジル、日本等がそれぞれ約6～8%を占めた。（USDA PS&D Online data）

注：Global Trade Atlasのデータ（2020.01）で、小麦(HS1001)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

（単位：万トン）

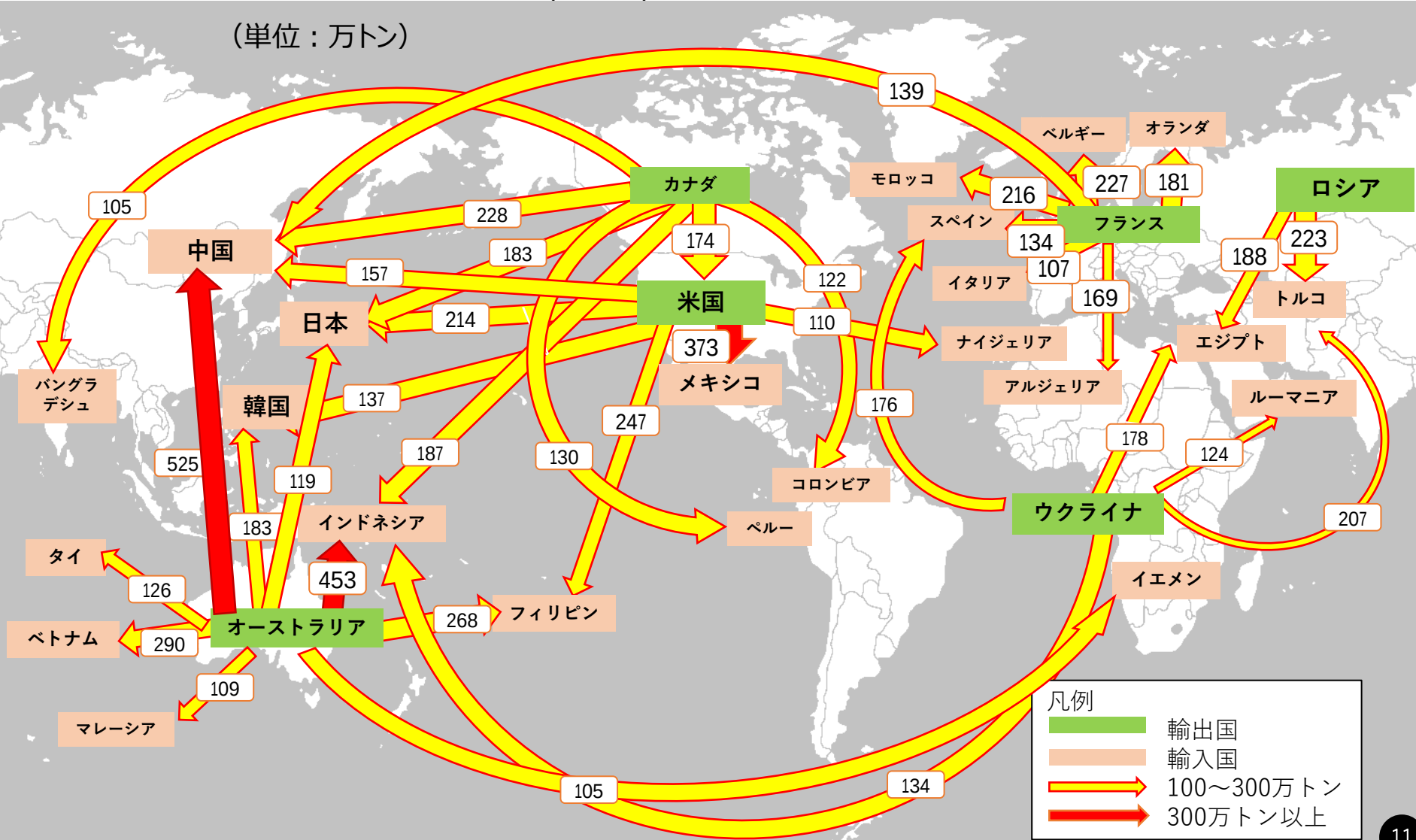


注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

11 小麦の需給動向と貿易フローの変化：2022年小麦貿易フロー図

2022年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、米国が10%に低下する一方、ロシアが21%増加し、東南アジア、中東・アフリカへの輸出が増加。ウクライナの輸出量シェアは8%に増加（ウクライナ侵攻後の輸出量を含む）。

注：Global Trade Atlasのデータ（2025.02）で、小麦(HS1001)の輸出上位6か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

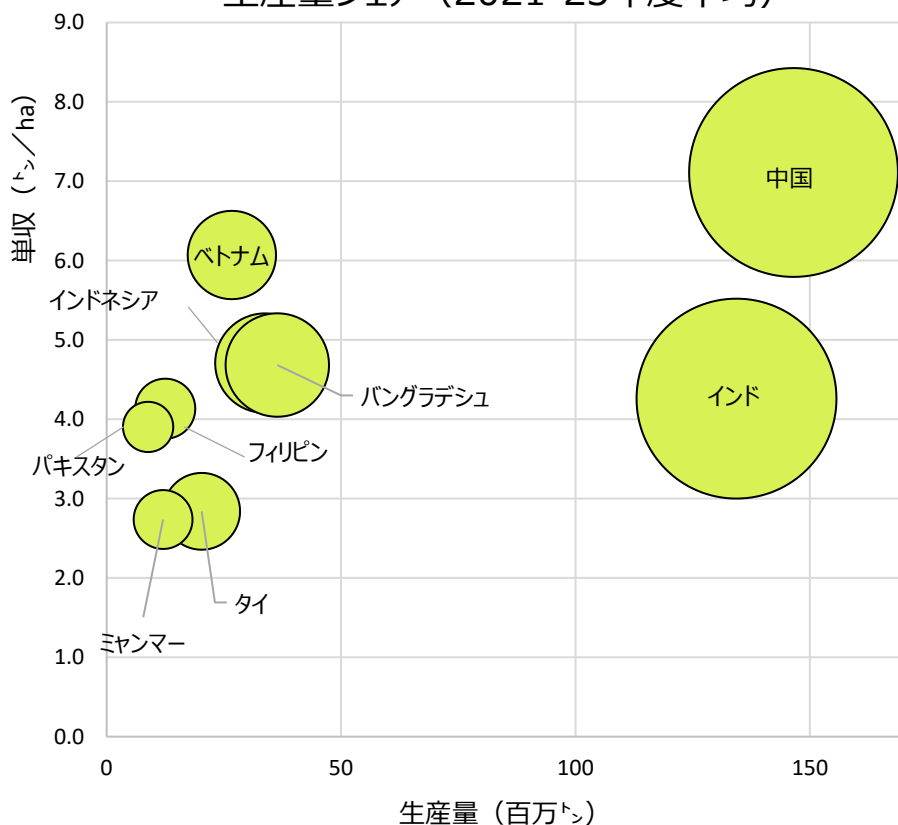


注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

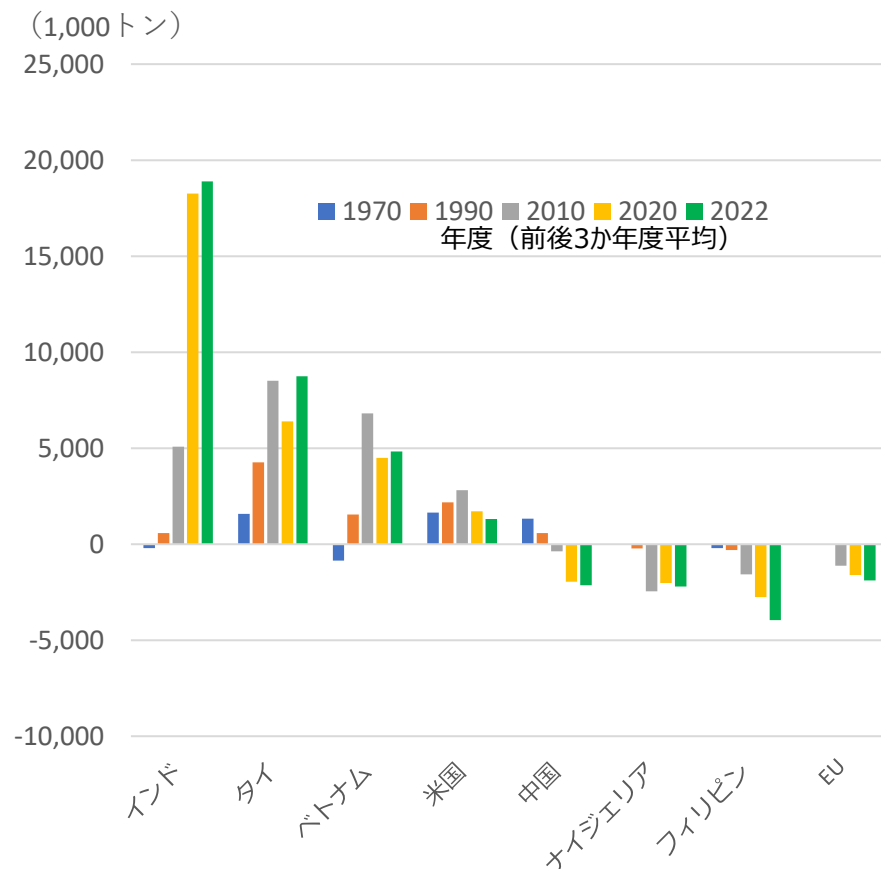
12 米需給と貿易動向

- 世界の米生産量(2021-23年度平均)は、アジアが生産量の9割を占める主要穀物。中国、インドの上位2か国で54%のシェアを占め、バングラディシュ、インドネシア、ベトナム、タイと続く。
- 輸出量は、インドが33%のシェアを占め、タイ、ベトナムが続く。
- 単収は、主要輸出国のインド、タイ、ベトナムや主要生産国の中国の間でも差が大きい。
- ナイジェリア等のアフリカ諸国の輸入量が増加。サブサハラ・アフリカの輸入量は世界の輸入量の約1/3。

① 世界の米生産量・単収と主要国の生産量シェア（2021-23年度平均）



② 国別米純輸出量の推移



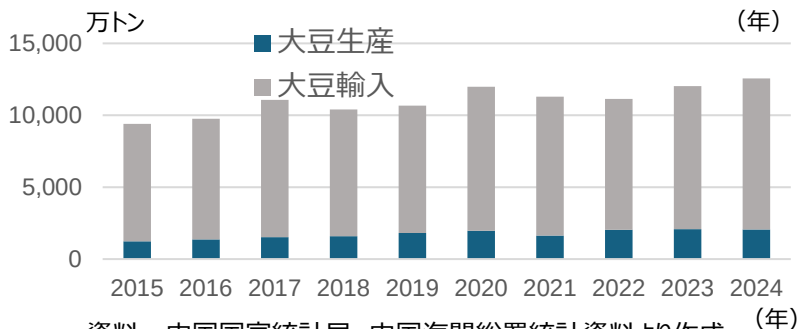
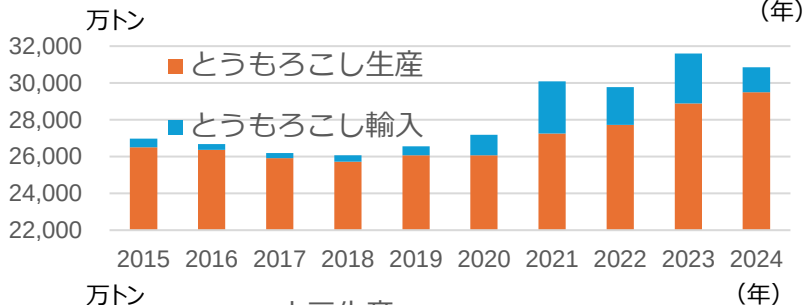
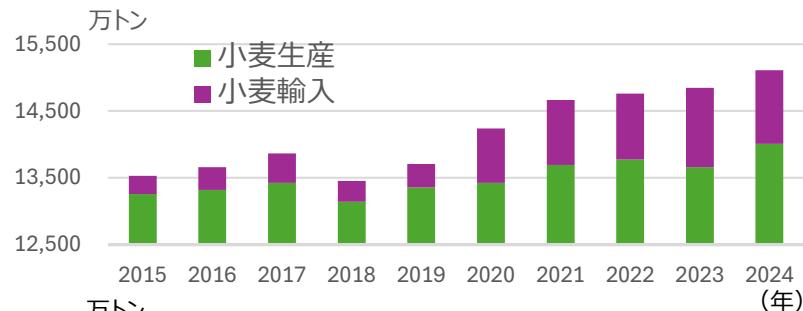
資料：USDA PS&D Online Dataより作成

資料：USDA PS&D Online Dataより作成

1 3 中国：国家安全優先に、食糧供給増強図る 単収と面積増で食糧生産は7億トンに

- 2024年の食糧(米、小麦、とうもろこし、その他穀類、豆類、いも類)の総生産量は初めて7億トン超を達成。2015年以降10年連続の豊収、とうもろこしは面積・単収が伸び、史上最高の2億9,492万トン(2%増)、小麦は1億4,010万トン(3%増)。米は2億0,754万トン(0.5%増)。大豆は面積、生産量とも減って2,065万トン(1%減)。
- 2024年の輸入は、大豆は前年より7%増の10,503万トンと4年ぶりに1億超に。7割超がブラジル産。とうもろこしは前年から半減1,364万トンに。5割弱がブラジル産。小麦は7%減1,101万トン、豪州等。米は4割減162万トン、ミャンマー等。
- 2024～30年の7か年の取組として「新たな食糧五千万トン生産能力向上活動」を展開、党の指導強化を前面に掲げ、栽培面積安定と単収向上を推進。生産能力向上の重点はとうもろこしと大豆。耕地保護と高規格化、品種革新に注力。
- 栽培補助金と最低買付価格制度で農民の収益を保障、「食糧安全責任制」を掲げ地方幹部の安定供給の責務徹底。

① 小麦・とうもろこし・大豆の生産と輸入



資料：中国国家统计局、中国海関総署統計資料より作成

② とうもろこし・大豆・米生産者補助制度（黒竜江省の例）

	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
とうもろこし	25元	30元	38元	68元	28元	14元	20元
大豆	320元	255元	238元	248元	248元	366元	352元
米	132.79元	133元	136元	133元	140元	172.67元	159.03元

注：1) 1ムー（1/15ヘクタール）当たりの単価。

2) とうもろこし・大豆は黒龍江・吉林・遼寧の3省と・内モンゴル自治区が補助対象。

米は黒龍江、湖南、江西、江蘇、湖北、安徽、四川等11省・自治区が補助対象。

3) 米は地表水の場合の単価。地下水の場合、各年50元低く設定。

③ 近年の米、小麦の最低買付価格の推移（単位：元／50kg）

	早生 インディカ	中・晩生 インディカ	ジャポニカ	白小麦、混合麦、 紅小麦
2016年	133	138	155	118
2017年	130	136	150	118
2018年	120	126	130	115
2019年	120	126	130	112
2020年	121	127	130	112
2021年	122	128	130	113
2022年	124	129	131	115
2023年	126	129	131	117
2024年	127	129	131	118
2025年	128	129	131	119
2026年				119

注：対象は米が黒龍江、湖南、江西等11省・自治区。小麦が河南、山東、安徽等6省

【参考】米は2024年の輸出が111万トン（香港、マカオを除くと109万トン）あり、ほぼ完全自給。輸出先は韓国15万トン、カメルーン11万トン（アフリカ合計で55万トン）等。

- ・ 食糧安全保障法を2024年施行、基本戦略は「自国で主導権確保、主食（米・小麦）の完全自給と「適度な輸入」が、国際情勢緊張の中、国内生産傾斜へ再転換。
- ・ 食用油の自給率向上も目指し、大豆とともに油料種子（特に菜種）の拡大も推進。
- ・ 国民の節約と生産・流通・加工各段階の減損抑止に注力、備蓄と食糧管理も重視。
- ・ 栽培補助金と政府買付と別に、新たに、農民が「食糧を生産して損」をせず、地方政府の財政力も支えるべく、食糧の流通先である「販売地域」からの「利益補償」を検討中。

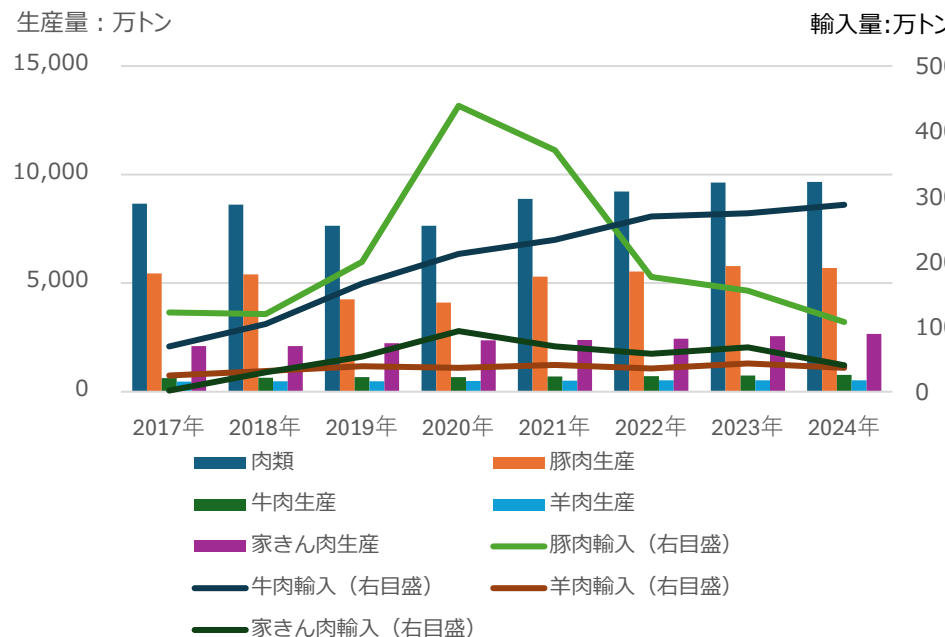
14 中国における食肉生産・輸入（豚肉・牛肉の価格動向等）

- 2024年豚肉生産:5,706万トン(前年比1.5%減)、輸入:107万トン(前年比31%減、4年連続減、スパイン等)
 - ・ 2018年－20年のアフリカ豚熱（ASF）拡大で縮小した豚肉生産の回復に向け、2021年から生産能力調整管理方策を導入。全国の母豚と肉豚のあるべき飼養頭数を確定・各地域に配分しモニタリングと地方政府の供給安定責任を徹底。政策として、金融対策や、立地規制の緩和、大規模養豚企業を中核とする供給体制等を推進。
 - ・ 豚肉生産は2020年の4,133万トンから2021年に5,296万トンに急回復。2021年以降、豚肉価格の下落・低迷続き、2023年、養豚経営は通年で赤字に。2024年3月に管理頭数目標を下方修正、価格水準はやや回復。
- 2024年の牛肉生産は779万トン（前年比4%増）、輸入は287万トン(5%増、ブラジル等)。羊肉生産は518万トン(3%減)、輸入は36万トン(13%減、豪州等)。家きん肉生産は2,660万トン（4%増、ブラジル等）、輸入は41万トン(41%減)。

注：家きん肉については輸出が50万トン（香港・マカオ除くと31万トン、輸出先はロシア等）

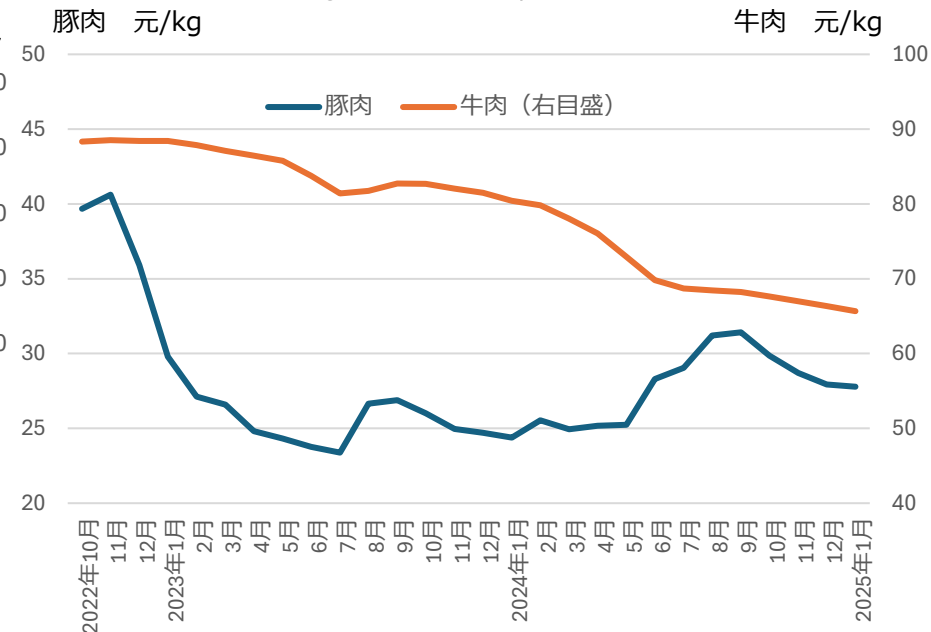
 - ・ 牛肉価格は、2023年初めから下落が継続。中国商務部はセーフガード発動に向け調査開始。
- 2025年末の自給率目標は、豚肉：95%（2024年の実際の数値は98%）、牛・羊肉：85%（同 牛73%・羊93%）、家きん肉：100%（同100%）。家畜家きんの遺伝的改良、育種・繁殖体制の強化を推進。

① 食肉の生産量と輸入



資料：生産量は国家統計局、輸入量は海関総署より作成

② 豚肉と牛肉の価格推移

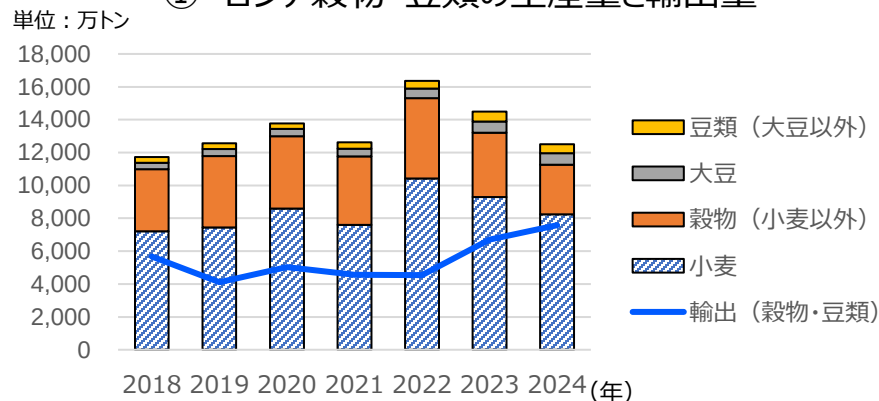


資料：農業農村部農産品需給形勢分析月報より作成

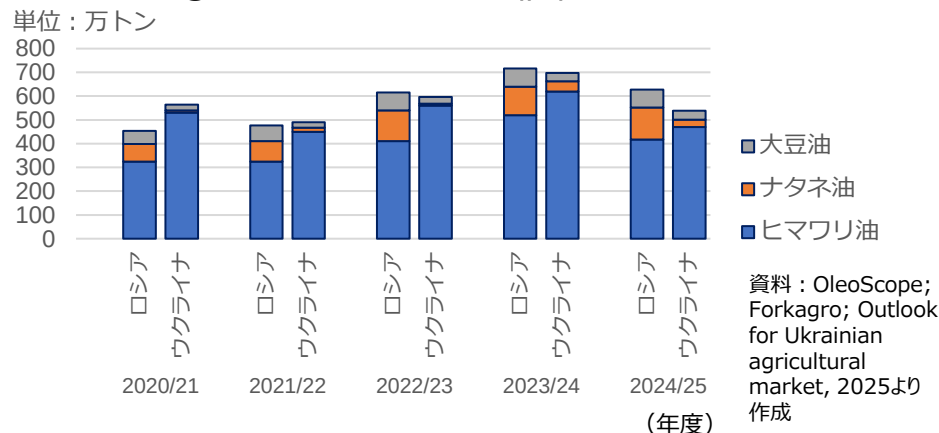
15 ロシアとウクライナ：天候不順により生産量・輸出量ともに減少傾向

- ロシア中央部と南部、およびウクライナの大部分で、夏から秋にかけて高温・乾燥が続いて農作物が被害を受け、生産量が落ち込んだ。ロシアは2024年も農産物輸出で好調を維持していたが、2025年には穀物輸出割当を大幅に減らしており、今後輸出量は減少の見通し。
- ロシアでは2024年5月7日付大統領令の中で、2030年までに農産物生産を2021年の25%以上増大させること、また農産物輸出を2021年の1.5倍以上にすることを目標とすることが示された。
- ウクライナでは欧米の支援を受けて、EU加盟に向けて農業の変革を進めようとしているが、EUのウクライナ農産物優遇政策の見直し案や米国国際開発庁(USAID)の活動停止を受けて、今後はウクライナの農業生産の拡大に歯止めがかかる可能性がある（2025年2月現在）。

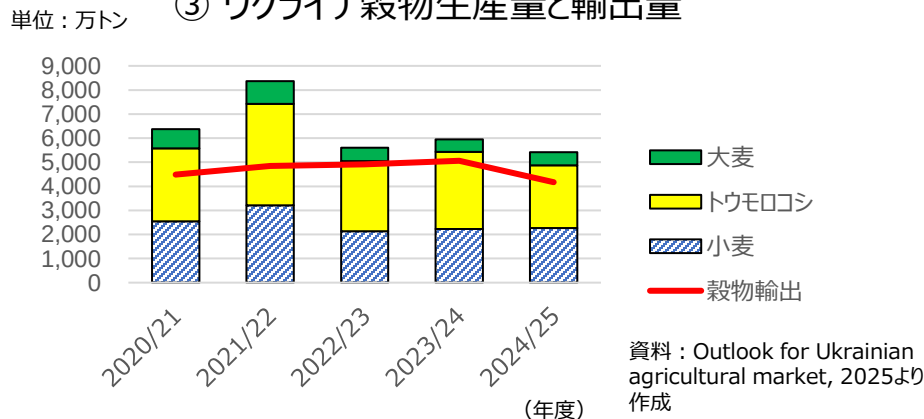
① ロシア穀物・豆類の生産量と輸出量



② ロシアとウクライナの植物油輸出量



③ ウクライナ穀物生産量と輸出量



④ ロシアの穀物輸出割当量

期間	割当量	詳細
2020年4月1日～6月30日	700万 t	
2021年2月15日～6月30日	1,750万 t	以後関税割当
2022年2月15日～6月30日	1,100万 t	うち小麦800万 t
2023年2月15日～6月30日	2,550万 t	穀物種類の区別なし
2024年2月15日～6月30日	2,400万 t	穀物種類の区別なし
2025年2月15日～6月30日	1,060万 t	小麦とメスリンのみ。大麦、ライ麦、トウモロコシはゼロ

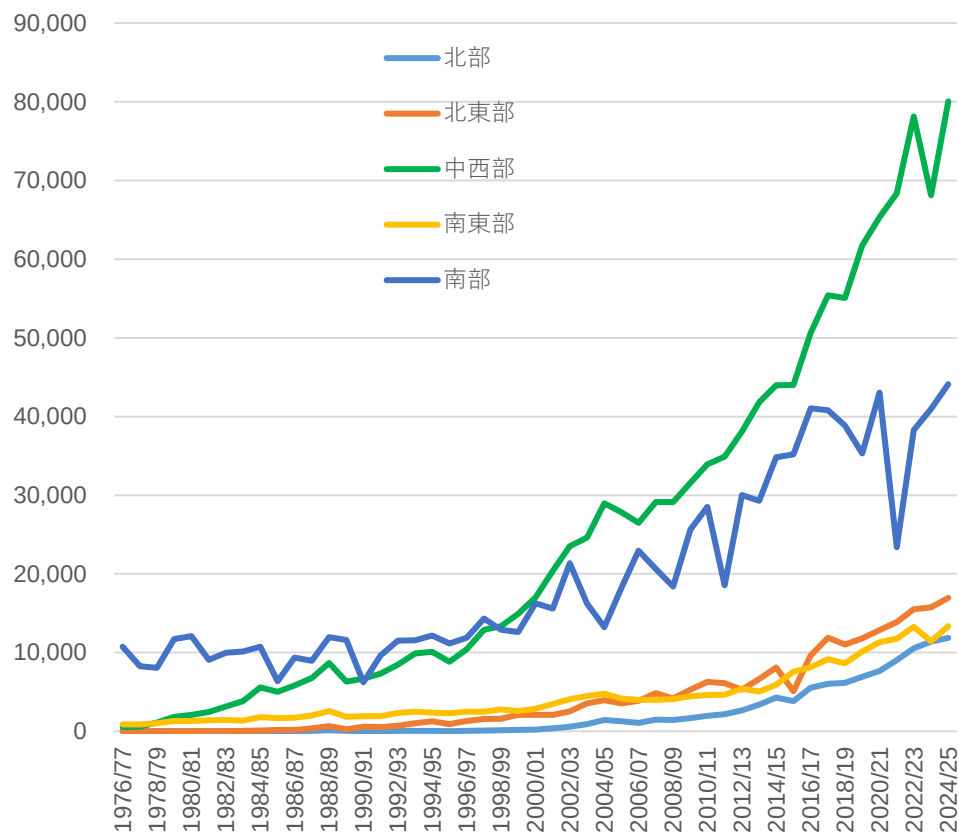
資料：Interfaks; Praimより作成

16 ブラジル：大豆・とうもろこしの生産動向

- 大豆やとうもろこし生産は、「セラード」地帯が位置する中西部を中心に生産。
- 大豆：中国の堅調な輸入需要により、2024年度の生産量は1億6,633万トンと過去最高の生産量の見込み。
- とうもろこし：国内におけるバイオエタノール需要ならびに中国をはじめとする国外の需要の増加により、2024年度の生産量は1億1,955万トンとなる見込み。

① 大豆生産量推移

(単位：1,000トン)

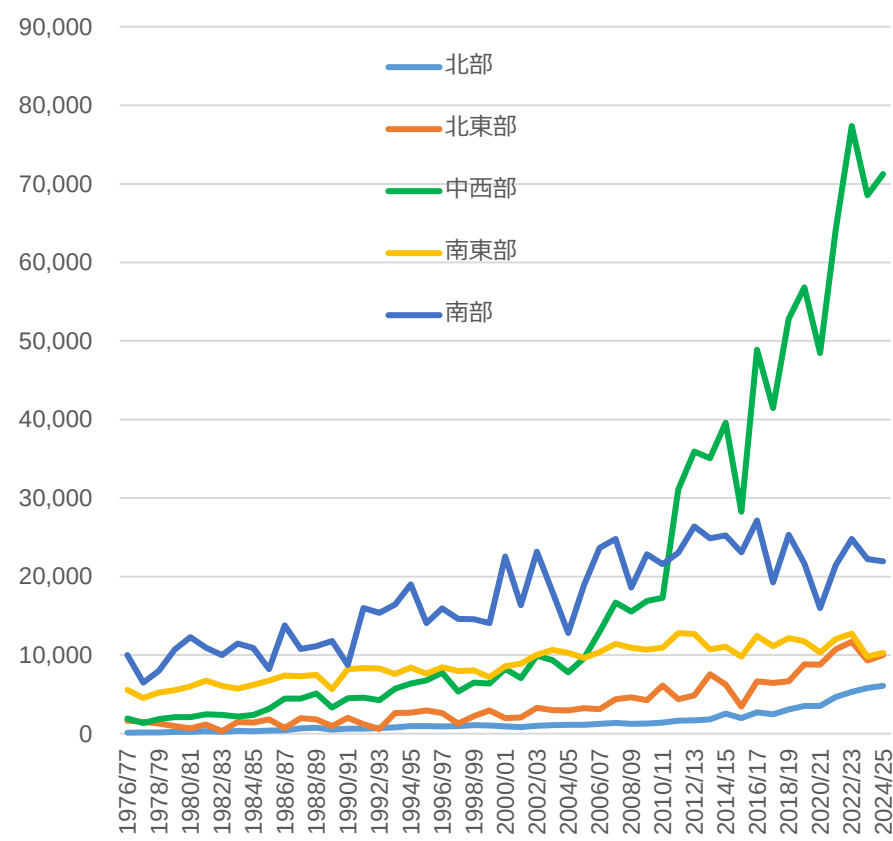


資料: CONAB (2025)より作成

(年度)

② とうもろこし生産量推移

(単位：1,000トン)

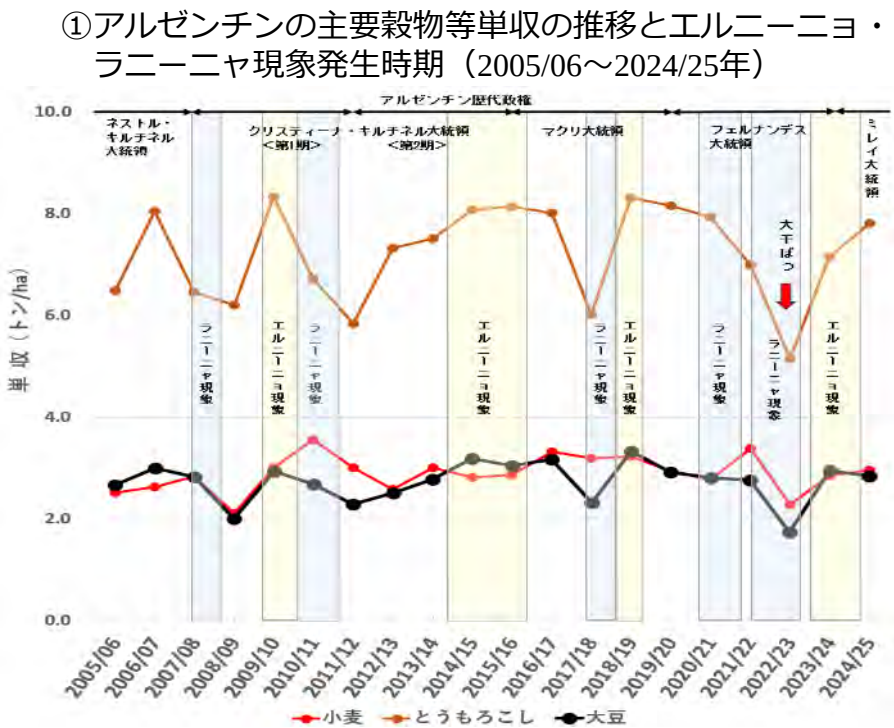


資料: CONAB (2025)より作成

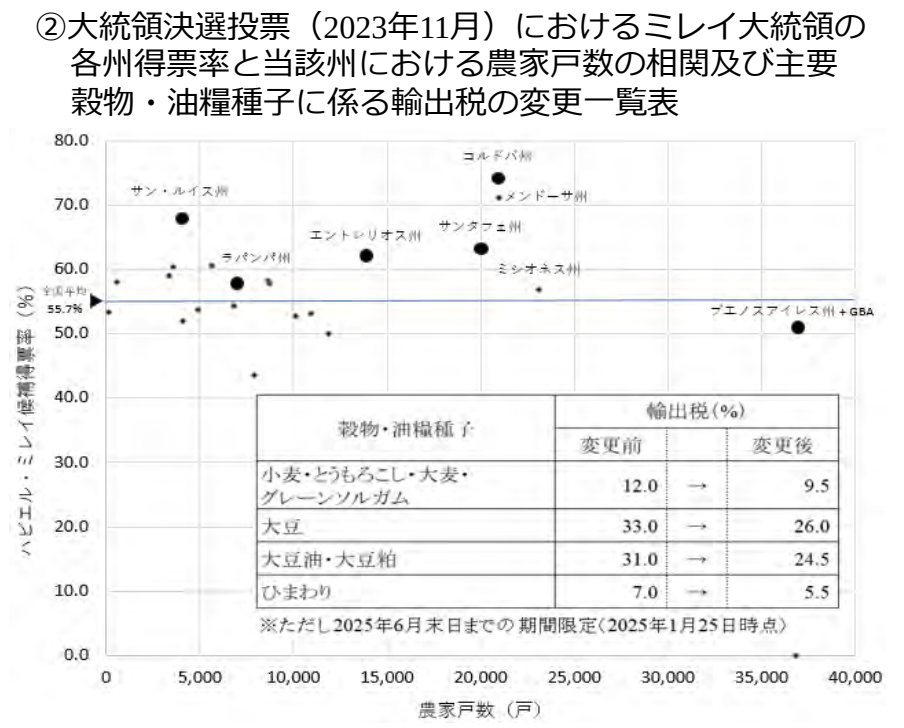
(年度)

1 7 アルゼンチン：異常気象による主要穀物等単収増減とミレイ大統領による穀物等輸出税軽減

- 2010年代以降、気候変動を背景としたエルニーニョ/ラニーニャ現象等の異常気象の影響により、エルニーニョ現象期間で降水量が増大、ラニーニャ現象期間で降水量が減少する傾向があり、2024年上半期まで続いたエルニーニョ現象下の降水量増大等が、主要穀物・油糧種子(小麦・とうもろこし・大豆)の単収増の要因となった。
- 主要穀物等の主産地であり多くの農家を擁するパンパ地域の6州のうち、ブエノスアイレス州を州のミレイ大統領得票率が全国平均(55.7%)を上回っており、2023年12月のミレイ大統領就任後、彼の公約の1つである穀物等輸出税軽減実現に対する農畜産業ステークホルダーの期待が高まった。
- 2025年1月下旬、政府経済省は主要穀物等にかかる輸出税を2025年6月末日までの期間限定で各々引き下げることを発表した(右下グラフ内の表参照)。



資料：USDA PS&D, 気象庁「エルニーニョ現象/ラニーニャ現象に関するデータ」から作成



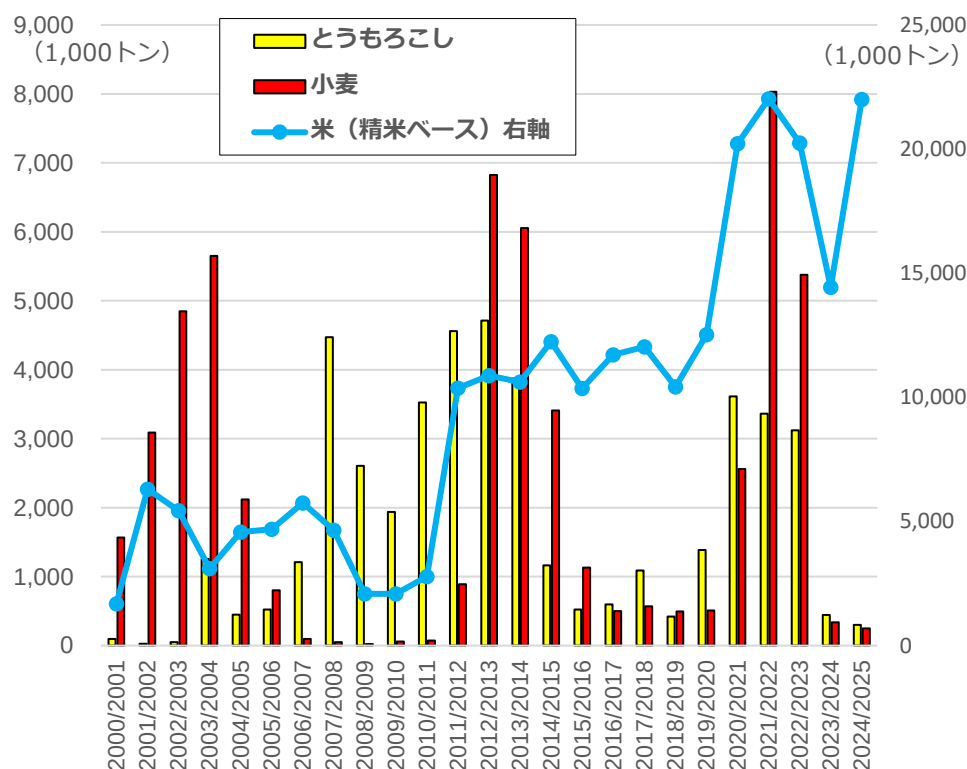
資料：アルゼンチン大統領府、アルゼンチン国家統計局(INDEC)「Censo Nacional Agropecuario 2018」から作成

17

1 8 インドの穀物輸出・植物油輸入動向

- インドの小麦や米等の主要穀物は基本的に自給し、輸出量も多い。米は2010年代後半にタイを抜いて世界一の輸出量を維持。小麦と米の輸出制限措置により2023/24年度の輸出量は大きく減少したが、米は輸出制限解除に伴い2021/22年度の水準に回復。
- 一方、インドの植物油の輸入は年々増加し、2000年代前半の500万トン程度の輸入量から、2010年代後半には3倍程度まで拡大。特に、パーム油の輸入量が多く、輸入量の半分以上を占める。大豆油、ひまわり油の伸びも大きい。インドの植物油の生産量の増加は、消費量に比べて限られ、伸びは限定的。

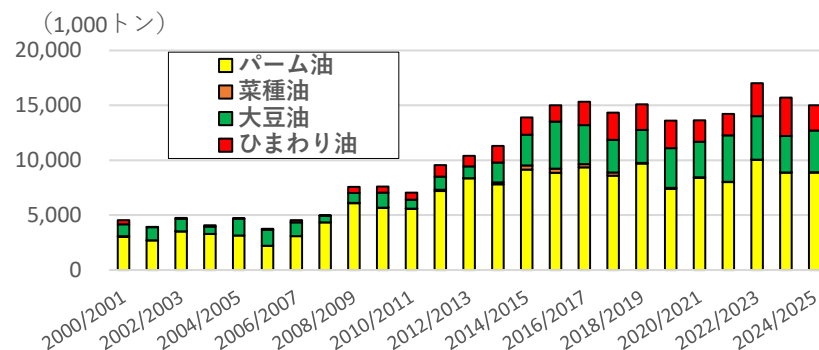
① インドの穀物輸出量



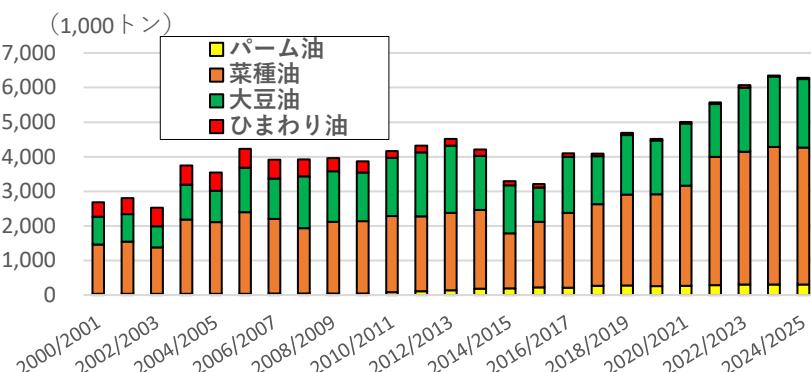
資料：USDA PS&D Online dataより作成

(年度)

② インドの植物油輸入量



③ インドの植物油生産量



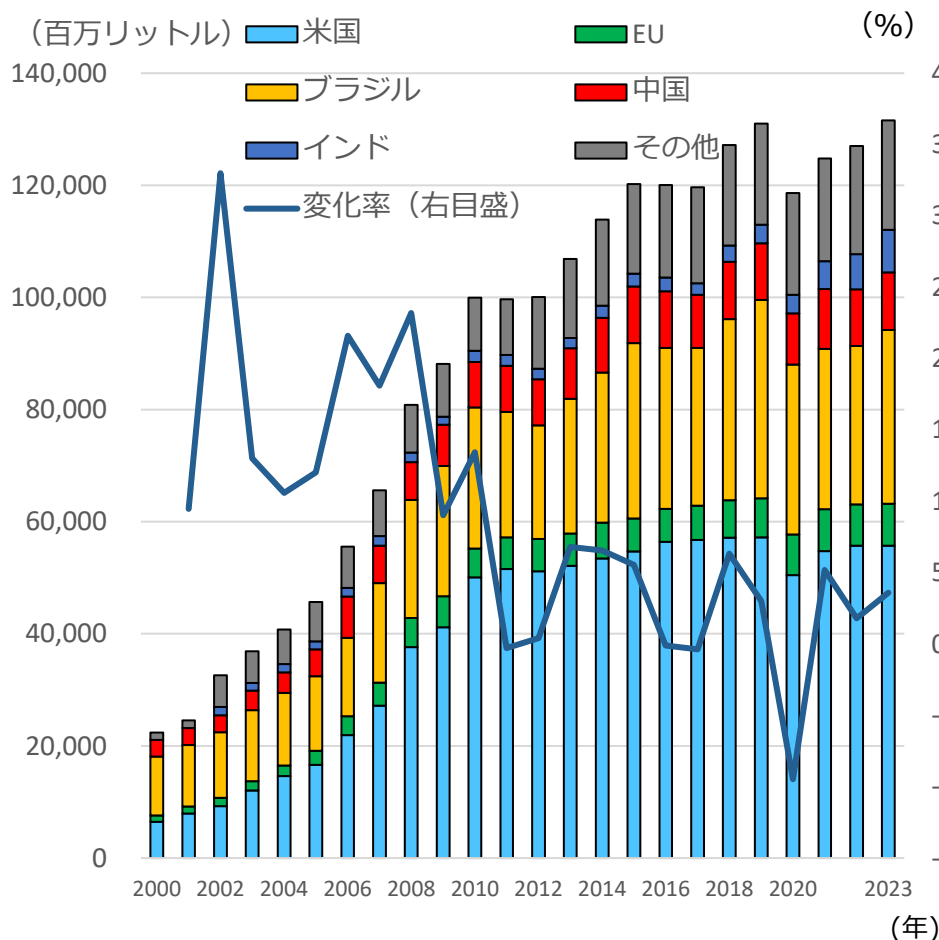
資料：USDA PS&D Online dataより作成

(年度)

19 バイオ燃料の需要動向

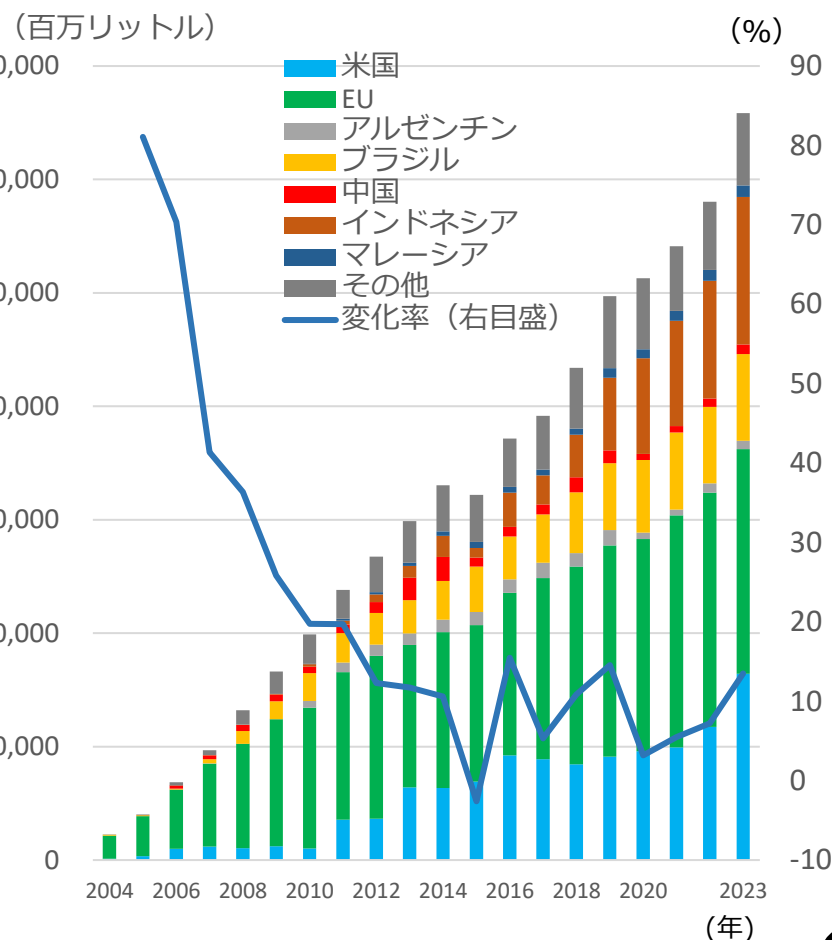
- 世界のバイオエタノール需要量は、COVID-19のパンデミックに対する各国の移動制限措置等の影響を受けて2020年は急減。2021年以降は輸送用燃料需要の回復等からバイオエタノール需要量は増加し、2023年にパンデミック以前の水準まで回復。
- バイオディーゼル需要量は、インドネシアを中心とする混合率上昇等の影響から2020年以降も増加。

① 世界のバイオエタノール需要量と増加率



資料：OECD-FAO Agricultural Outlook 2024-2033より作成

② 世界のバイオディーゼル需要量と増加率



資料：OECD-FAO Agricultural Outlook 2024-2033より作成

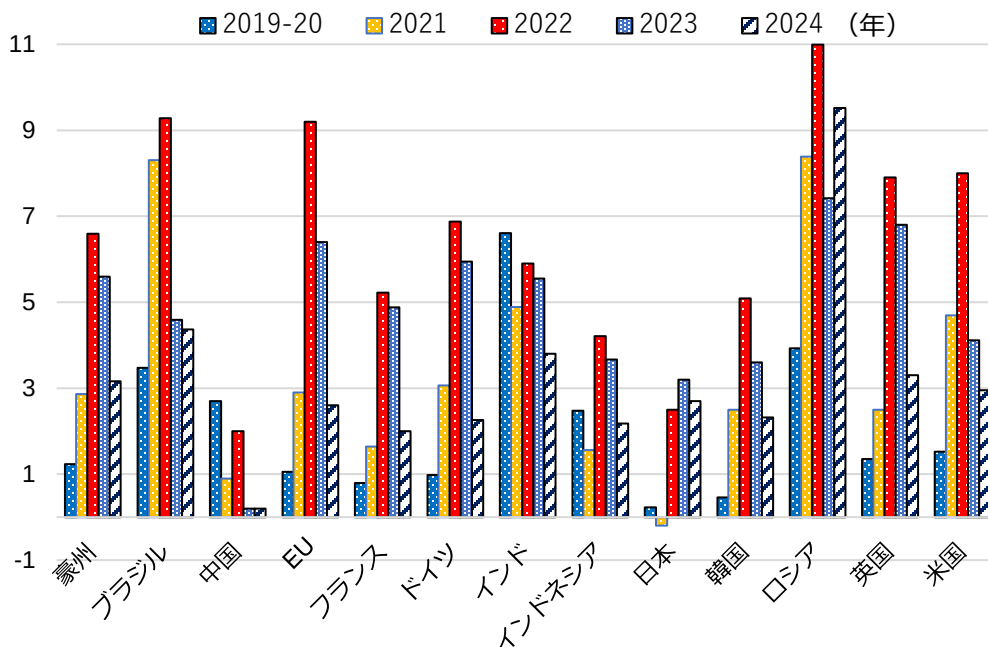
20 重なる紛争や政策的不確実性による消費者物価の変動と海上輸送運賃の変動

○ ウクライナ侵攻等の多方面への影響からエネルギーや資源・食料価格が上昇して、2022年は消費者物価数が多い国で急上昇した。イスラエル・ガザ衝突等の中東における紛争による影響も重なり、2023年以降も、多くの国で物価が高止まりする傾向にあった。ただし、中国等の一部で経済減速が散見され、主要国・地域における経済減速懸念により、物価を押し下げる動きがみられる。政策的な不確実性が高まる中、地域的なばらつきがある。

○ バルチック海運指数（BDI注）は、コロナ禍における世界的なサプライチェーンの混乱等から高騰したが2022年から落ち着きを取り戻したものの、ウクライナ侵攻やイスラエル・ガザの衝突等の混乱から紅海周辺の通航量が減り、パナマ運河の通航制限もあり、2023年後半から変動が大きくなっている。（注：鉄鉱石、石炭、穀物等のばら積み不定期船運賃に関する総合指標。）

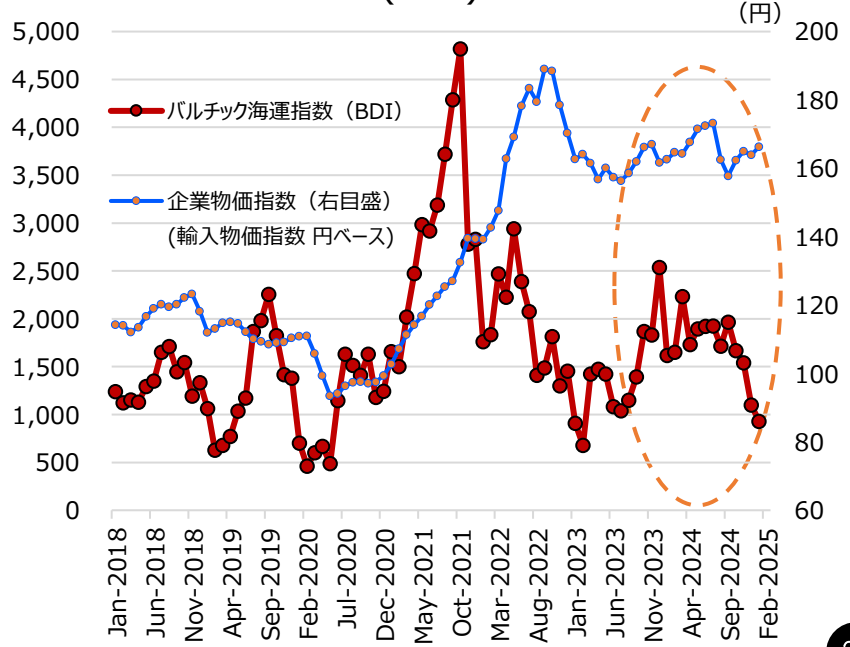
○ コンテナ船運賃は、コロナ禍でサプライチェーンの混乱等により世界的に高騰したものの、落ち着きを取り戻した。しかし、紅海周辺の混乱やパナマ運河の通航制限等で、アフリカを回る迂回ルートが増え、中国等で経済減速が懸念される中、同運賃は大きく変動し、2024年夏ごろのピーク時は上海積みロッテルダム向けのコンテナ船運賃が、前年平均の4倍を超えた。（日本海事センターによる主要航路コンテナ運賃動向より）

① 消費者物価指数 (CPI, %)



資料：OECD Statistics 注：2024年は推計値

② バルチック海運指数 (BDI)と日本の輸入物価指数

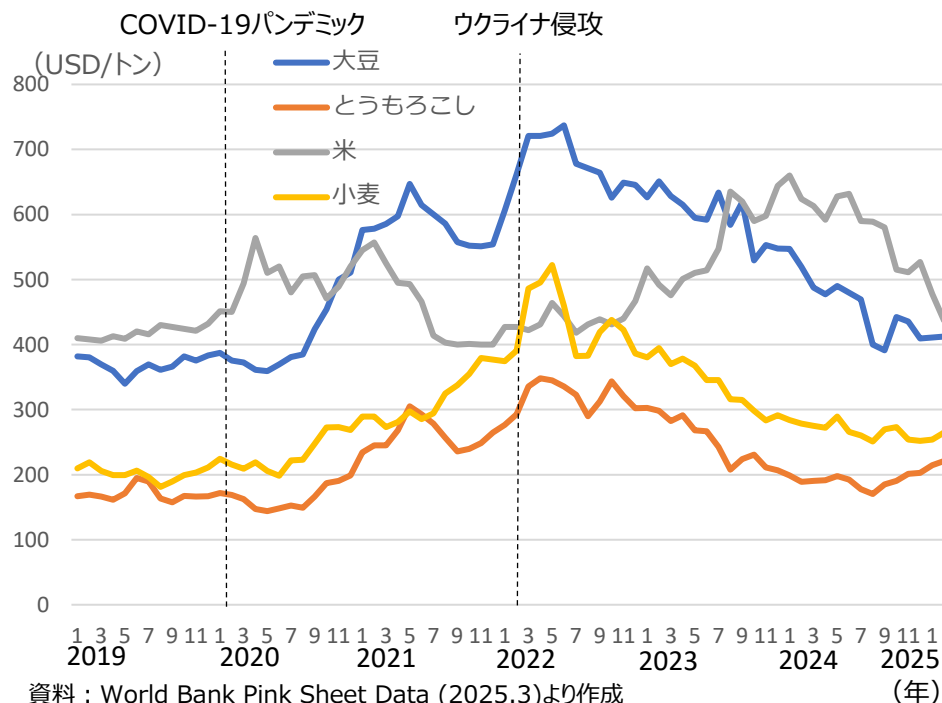


資料：日本海事センター企画研究部、日本銀行

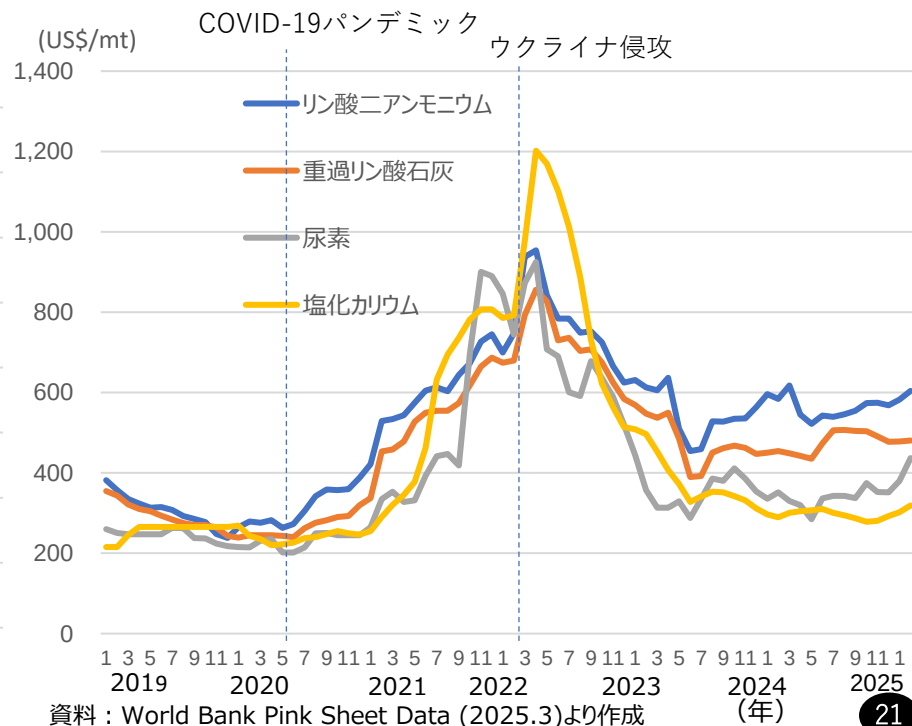
2.1 国際穀物等価格の動向

- 2020年夏以降、北米の乾燥、南米の降雨不足、飼料需要を中心とする穀物・大豆等市場で中国の輸入が急増。2021年には、ラ・ニーニャ現象等の影響による南米の乾燥や北米の高温乾燥、コンテナ船運賃高騰の継続も背景に、穀物・大豆価格は上昇基調で推移。
- ロシアによるウクライナ侵攻の影響により、2022年3月以降の穀物等の価格は急上昇し、小麦はシカゴ先物市場で史上最高値を更新し、とうもろこし、大豆は10年ぶりの高値。同年夏以降、下落し、COVID-19パンデミック発生以前の水準近くまで下落。
- 米は豊富な供給量を背景に比較的、安定的に推移したが、2023年以降、主要生産国における天候不良等から上昇基調で推移した。2024年10月以降は、インド政府の輸出規制の撤廃等により下落。
- 窒素肥料の原料となるアンモニア生産に必要な天然ガス価格の高騰、ロシアを中心とする肥料輸出国による輸出規制、肥料輸送の制約等により、2021年後半から肥料価格は高騰し、ウクライナ侵攻後の2022年4月にピークとなる。その後、下落基調で推移。ただし、COVID-19パンデミック発生以前の水準を上回って推移。

① 国際穀物・大豆の月次価格(2019-2025年)



② 化学肥料の月次価格(2019-2025年)

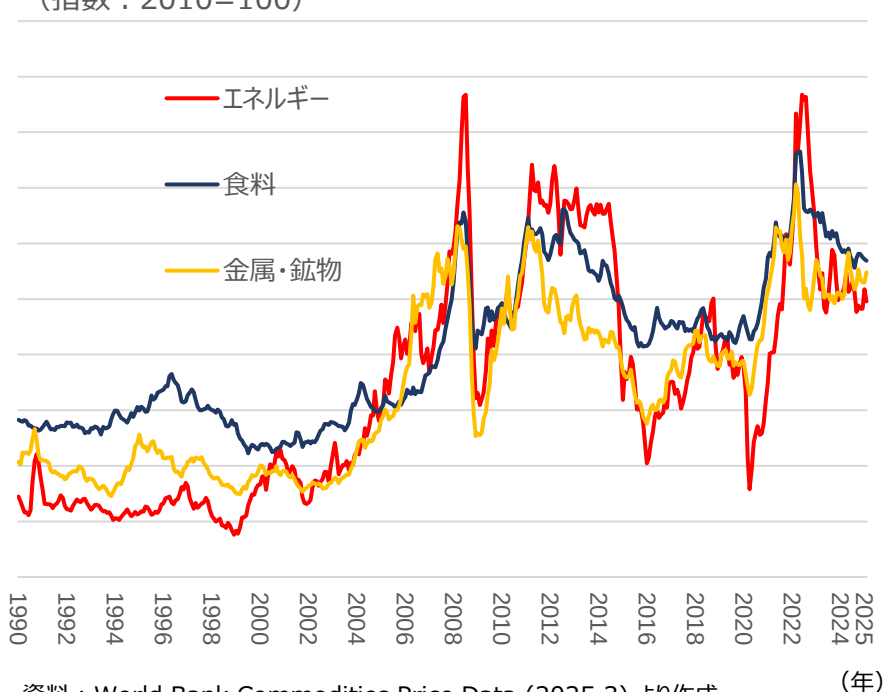


2.2 国際商品価格・FAO食料価格指数の推移

- エネルギー、食料、金属・鉱物の価格は、2021年以降、世界経済の回復基調とCOVID-19パンデミック禍の労働力不足やサプライチェーンの遅延、コンテナ船運賃の高騰等の影響もあり、堅調に推移。
- ウクライナ侵攻により、2022年3～6月にかけて国際商品価格はさらに上昇し、食料指数は2008年や2012年の価格高騰の水準を更新。2022年7月以降は下落し、前年同月の水準を下回るものの、パンデミック以前の水準を上回って推移。
- FAO食料価格指数の推移をみると、穀物等価格の上昇を受けて、2021年から上昇し、ウクライナ侵攻直後の2022年3月には160.2と過去最高値を記録。その後、下落し、侵攻発生前の水準に戻ったものの、パンデミック以前の水準を上回って推移。

① 国際商品価格の月次推移

(指数：2010=100)



資料：World Bank Commodities Price Data (2025.3) より作成

注：食料は、穀物、植物油、肉類、砂糖、バナナ、オレンジ、エビ、フィッシュミールを含む。金属・鉱物は、鉄鉱石、銅、アルミニウム、すず、ニッケル、銅、亜鉛、鉛を含む。エネルギーは、原油、天然ガス、石炭を含む。

② FAO食料価格指数の推移

(指数：2014-2016=100)



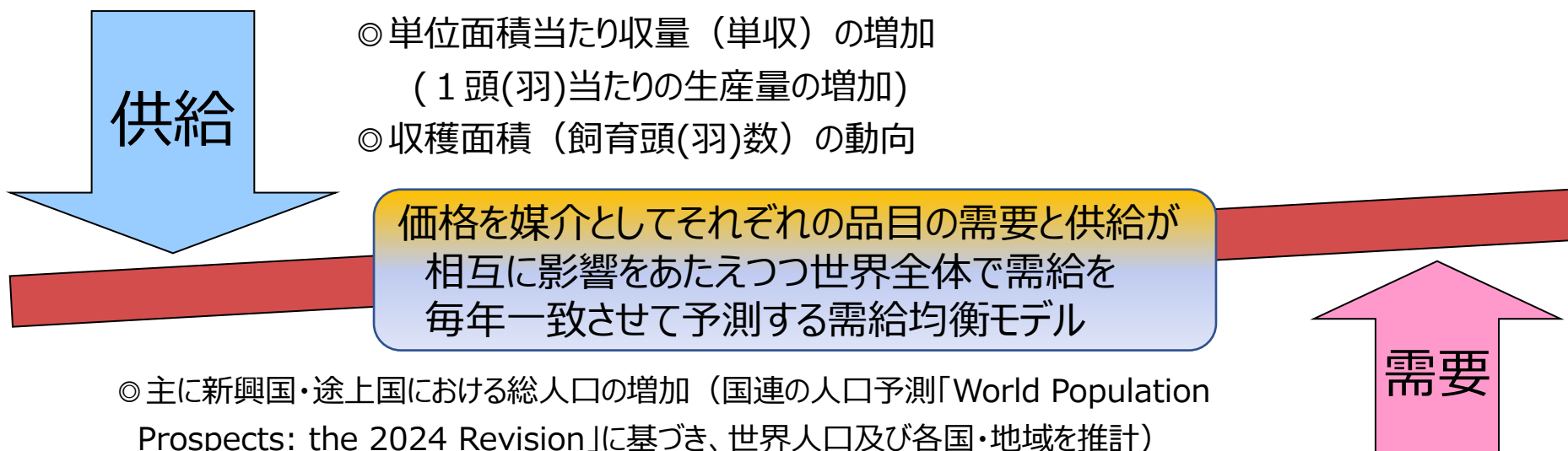
資料：FAO Food Price Index (2025.3)より作成

注：2014-2016年の穀類、植物油、乳製品、肉類、砂糖の平均価格を100として、同年の各輸出額に占める割合で加重平均した価格指数である。

Ⅱ．見通し編

1 世界食料需給モデルによる予測の目的及び前提

- 「世界食料需給モデル」による世界の食料供給と需要の予測は、農産物輸入国である立場から、独自の将来の食料需給を自然体で見通し、我が国における食料の安定供給に資することを目的。
- 予測は、収穫面積（延べ面積）の変動に特段の制約がなく、現行の単収の伸びが継続し、各国の農業・貿易政策が現状を維持し、突発的紛争・天候等の不確実性を含まず平年並みの天候を前提。



- ◎主に新興国・途上国における総人口の増加（国連の人口予測「World Population Prospects: the 2024 Revision」に基づき、世界人口及び各国・地域を推計）
- ◎世界経済は、現在も続くウクライナ侵攻や中東の衝突等の影響を背景に、一様でない各国の成長や一部の主要国等の景気減速後退が懸念される一方で、中期的には各国の経済成長は緩やかに回復し、新興国・途上国の経済成長は相対的に高い見通し（GDPは世界銀行の「World Development Indicators」（2024）、実質経済成長率の見通しはIMF「World Economic Outlook 2024及びUpdate 2025」に基づき、世界及び各国・地域を推計）
- ◎緩やかな所得の向上に伴う畜産物・飼料穀物及び油糧種子の需要は増加するも伸びは低下
- ◎バイオ燃料(バイオエタノール・バイオディーゼル)原料用の農産物需要は下支えするも横ばい

2 2034年における世界の食料需給見通し－『食料需要の伸びの低下を懸念』－【概要】

2020年代に入り新型コロナウイルス感染症(COVID-19)による世界的流行やロシアによるウクライナ侵攻の長期化、中東情勢等の不確実性の影響から、世界経済は減速して回復途上にあるとみられるものの、それらの影響は多方面に及んで、多様な状況となっている。世界の農産物等の需給・価格は大きく変動し、これらの収束に向けた道のりは途上にある。

現在、各国の経済回復は一樣ではなく、ロシアのウクライナ侵攻の長期化や中東情勢も不透明で、多くの国で経済成長の鈍化が強まる懸念がみられ、中国等の経済の減速感も強まっている。中期的には、中国の人口減少や経済成長の低下が見込まれる一方で、インドやASEAN等の新興国・途上国において、相対的に高い経済成長率が見込まれる。将来的に、先進国だけでなく途上国の多くの国で、経済の成長率はCOVID-19以前の水準より鈍化する見通しで、世界経済はこれまでより緩やかな成長となる。

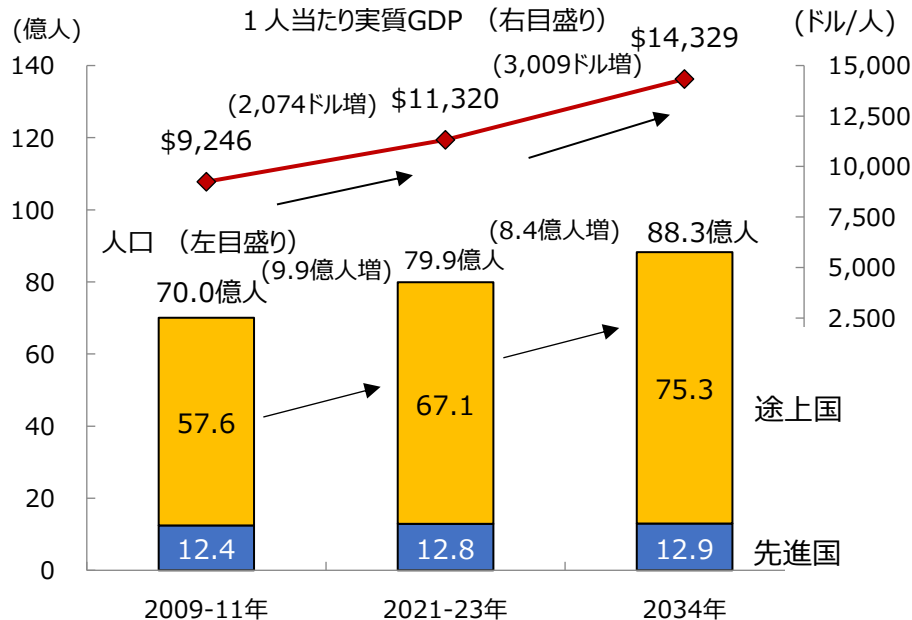
世界の穀物等の需給について、需要面では、アフリカ・南アジア等の途上国の総人口の増加、新興国・途上国を中心とした相対的に高い所得水準の向上等に伴って食用・飼料用需要の増加は今後も中期的に継続する。ただし、先進国だけでなく中国等の新興国・途上国においても今後の経済成長の鈍化を反映して、穀物等の需要の伸びは低下してCOVID-19以前より緩やかとなる。供給面では、穀物や油糧種子の収穫面積がわずかに減る一方、穀物等の生産量は、主に生産性の向上によって増加する見通し。

穀物等の国際価格について、中国の畜産物需要の伸びの低下が強まる中で、世界の穀物等の需要量と供給量の増加がほぼ拮抗するものの、穀物・大豆等の価格は低下傾向を強める見通し。ただし、ウクライナ侵攻の長期化や中東情勢の緊迫化、米国等の農業・貿易政策の不確実性に加えて、経済成長の減速のリスク等によるサプライチェーンの混乱や貿易摩擦等の不確実性によっては、2025年以降、穀物等価格が本見通しとは相違する結果になることにも注意が必要である。

3 世界食料需給モデルの試算の前提に使用した総人口及びGDPの見通し

- 総人口は、COVID-19を経て伸び率が鈍化するが、サブサハラアフリカ・中東・南アジア等を中心に、途上国で増加が続く。
- 世界経済は、2020年以降、COVID-19パンデミック、ロシアによるウクライナ侵攻の長期化、中東情勢等によって減速し、それらの影響は多方面に及び、経済回復の途上にあるものの、各国における経済への下押し圧力の強まりが懸念され、多様な状況となっている。一方で中期的には、世界経済はパンデミック以前の経済成長より鈍化するが、緩やかに成長する見通し。一人当たりGDPの成長もより緩やかになる。
- 各国・地域の経済は、ウクライナ侵攻や中東情勢等による多方面への影響を受け、さらに政策的不確実性を背景に、景気下押し圧力が強まる中、経済成長は多様な状況となる。中期的には、中国の経済成長の低下や人口減少が見込まれつつも、新興国・途上国の経済成長は先進国より相対的に高くなる見込み。

① 世界の総人口及び一人当たり実質GDPの推移



注：2023年まで実績値で、2024年以降は推計値及び予測値。
1人当たり実質GDPは2015年基準。2021-23年はCOVID-19の影響を含んでいる。

② 主要国の実質経済成長率の推移と見通し

(単位：%)

	2010-2014年 平均	2015-2019年 平均	2020-2022年 平均*	2023年	2024年	2025-2034年 平均
中国	8.6	6.7	4.5	5.2	4.8	3.9
インド	6.6	6.7	3.6	8.2	6.5	6.5
日本	1.6	0.8	-0.1	1.7	-0.2	0.7
ブラジル	3.4	-0.5	1.5	3.2	3.7	2.4
ロシア	3.0	1.0	0.6	3.6	3.8	1.2
インドネシア	5.8	5.0	2.3	5.0	5.0	5.1
米国	2.2	2.6	2.1	2.9	2.8	2.1
EU	1.0	2.4	1.5	0.6	1.0	1.6

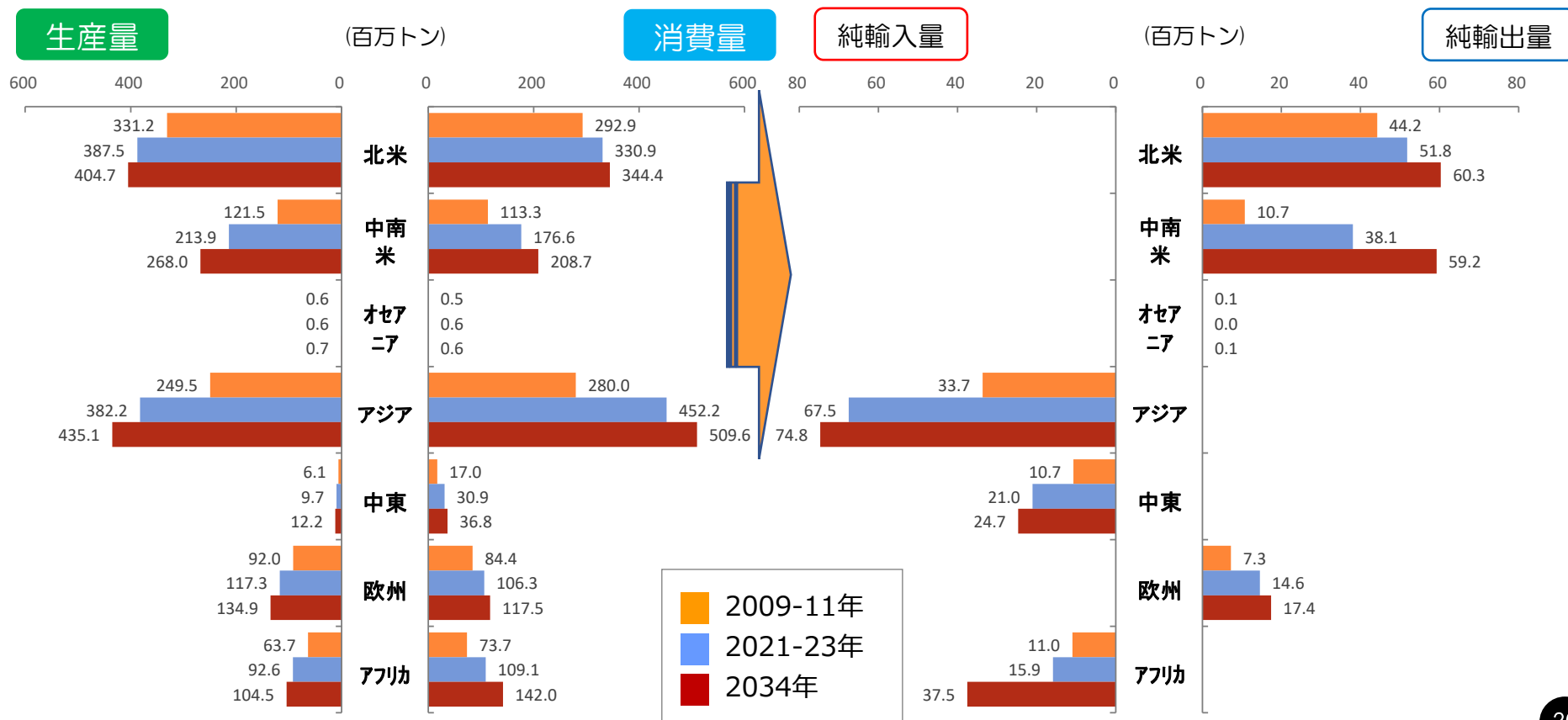
注：世界銀行「World Development Indicators」(2024)、
国連「World Population Prospects : The 2024 Revision」(2024)、
IMF「World Economic Outlook」(2024)及び
「World Economic Outlook Update」(2025)の見通しから試算。
(*2020年のマイナス成長を含めた平均値)

4 地域別の需給見通し：とうもろこし

- 世界の生産量及び消費量は、畜産物需要の増加に伴って飼料用消費量を中心に今後も増加する見通し。ただし、多くの地域でその伸び率は鈍化。生産量の伸び率は中南米、消費量の伸び率はアフリカが、高い見通し。
- 世界全体で、総消費量に占める飼料用消費量の割合が65%程度まで上昇する。一方でアフリカは、食用等消費量が7割弱を占め、人口の増加に伴ってその割合は徐々に上昇する見通し。世界経済の減速が懸念され、経済成長率が鈍化する見込みで、飼料用需要や食用需要の伸びも鈍化する。
(※ウクライナ情勢や中東情勢による影響は不確実)
- とうもろこしの貿易は、アジア・中東・アフリカにおける純輸入量の増加を、北米・中南米が中心に純輸出量の増加でまかなう見通し。輸入量はアフリカの伸び率が、輸出量は中南米の伸び率が高い。
- 米国では純輸出量が増加し、中南米はブラジル・アルゼンチンが牽引して純輸出量が増加。ウクライナの純輸出量は侵攻前の水準には戻らない。

① とうもろこしの地域別生産量及び消費量の見通し

② とうもろこしの地域別貿易量(純輸出入量)の見通し



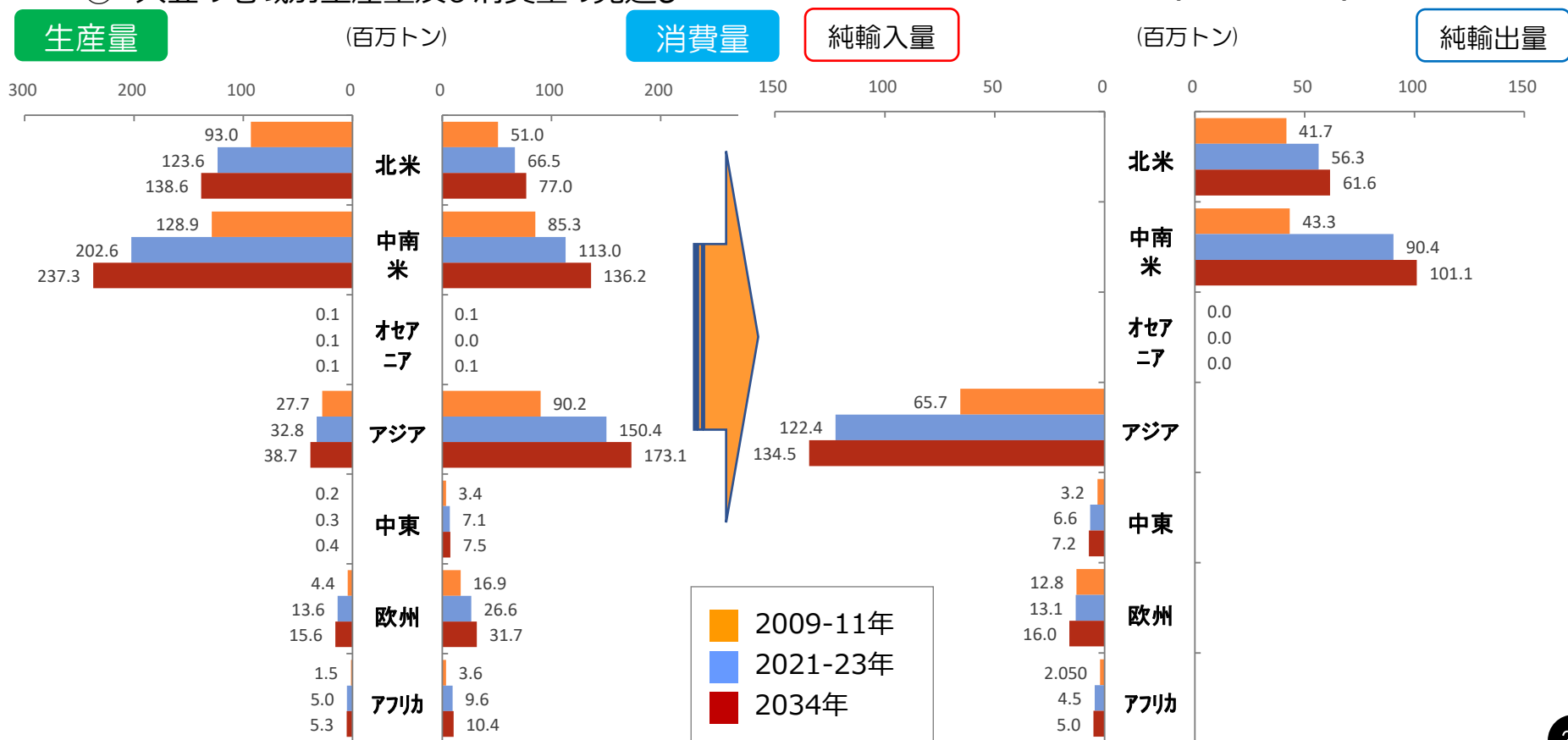
資料：2034年における世界の食料需給見通し

5 地域別の需給見通し：大豆

- 今後、消費量は中国を中心としたアジアの途上国を中心に拡大し、欧州も増加する一方で、中南米・北米を中心に生産量が拡大する見通し。
(※ウクライナ情勢や中東情勢による影響は不確実)
- 大豆は搾油後、主に食用の大豆油と飼料用の大豆ミール(粕)として消費される。大豆油は、食用として中国、インド、バングラデシュ等のアジアで増加。大豆油の一部は、中南米・北米で大豆油等由来のバイオディーゼルとして輸送用燃料に混合されることにより、需要を支える。大豆ミールの需要は、飼料用としてアジアだけでなく中南米や欧州でも増加する。
- 大豆の純輸入量はアジアが最大で、純輸出量は中南米と北米で増加。輸入量の伸び率は欧州が高く、輸出量の伸び率は中南米が高い。
- 大豆の貿易市場は、中国・東南アジア諸国等のアジアにおける純輸入量の増加を、中南米・北米の純輸出量の増加でまかなう見通し。ブラジルが米国を大きく超えて輸出する傾向が続く。ウクライナの純輸出量は侵攻前の水準には戻らない。

① 大豆の地域別生産量及び消費量の見通し

② 大豆の地域別貿易量(純輸出入量)の見通し

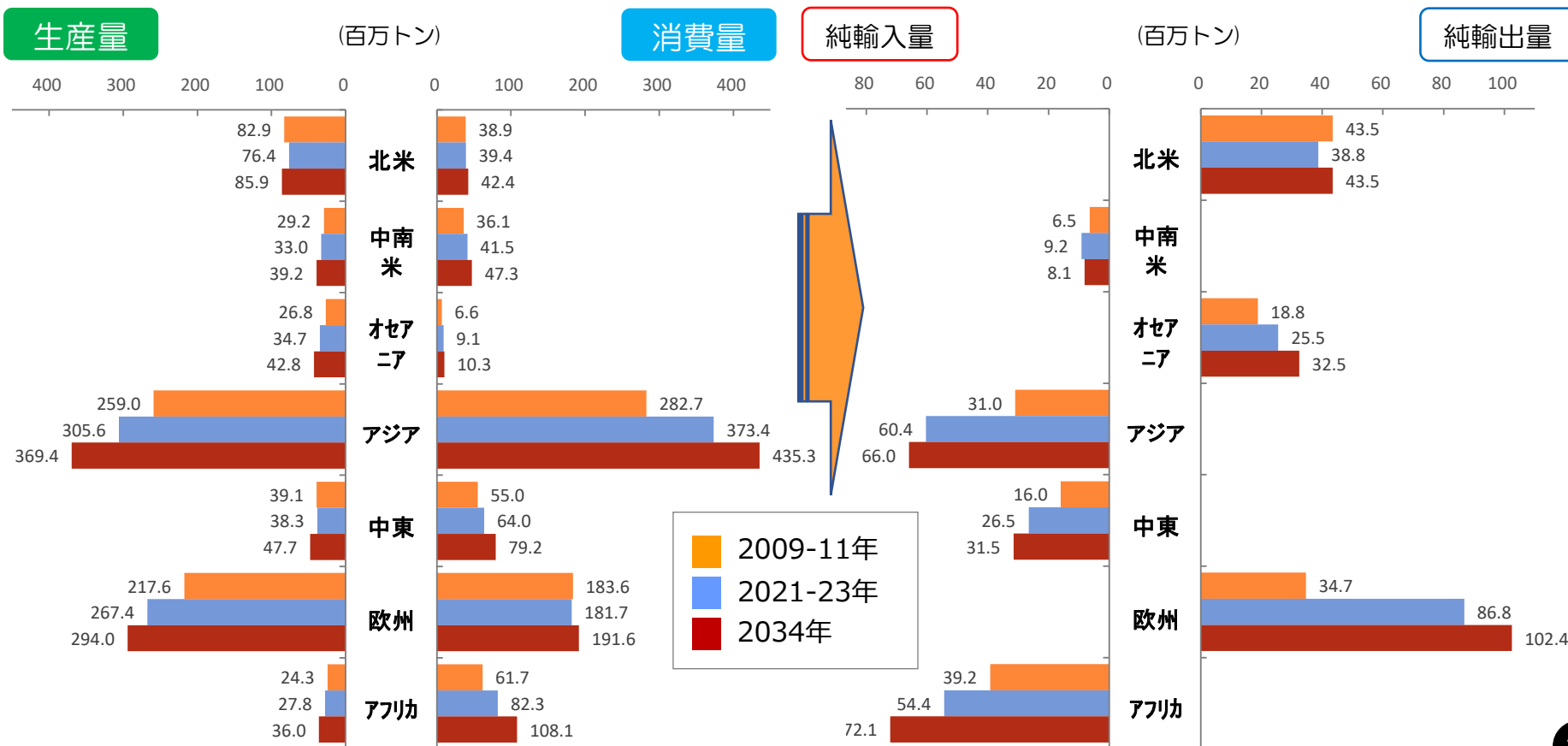


6 地域別の需給見通し：小麦

- 世界の生産量はアジアが4割で欧州が3割を超え、同消費量はアジアが5割弱で欧州が2割程度を占める見通し。
- 消費は主に食用で増加するが飼料用も増えて、飼料用は世界の総消費量の2割程度を占める見通し。アジアや中東・アフリカの消費量の増加は、今後も継続する。
(※ウクライナ情勢や中東情勢による影響は不確実)
- 貿易市場では、米国等の伝統的な輸出国が輸出量を増やす一方で、台頭したロシア等の新興の輸出国も輸出量を増やし、ロシアは世界一の輸出国を維持。輸出国として台頭したウクライナは侵攻前の輸出量の水準には戻らない。東南アジア諸国は生産量が限定的であり、消費の拡大に伴い輸入量は今後も拡大する見通し。
- アフリカ、中東、アジアでは、相対的に少ない生産量の増加に対して消費量の増加が大きく、今後も純輸入量は増加。特にアフリカの輸入量の伸び率が高い。また、純輸出量は伝統的な輸出国を含む欧州、北米、オセアニアで増加する。ただし今後も、主要な産地(欧州や北米等)における高温乾燥や熱波による減産のリスクに注視が必要。

① 小麦の地域別生産量及び消費量の見通し

② 小麦の地域別貿易量(純輸出入量)の見通し

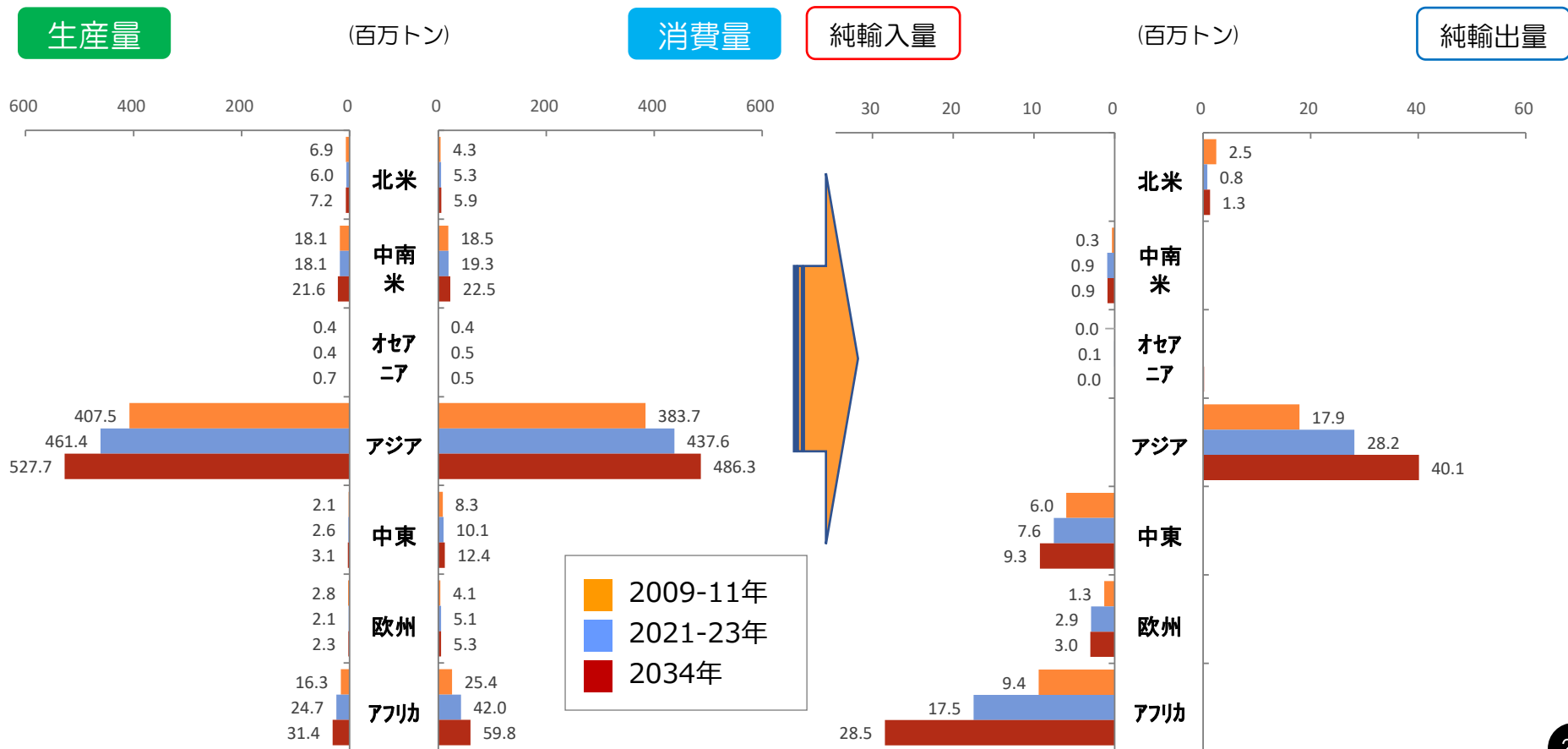


7 地域別の需給見通し：米

- 世界の生産量の9割弱、消費量の8割超をアジアが占め、アジア中心の品目として需給量は今後も拡大する。
- 米の消費量のほとんどが食用で、アフリカ・アジアの途上国を中心に総人口の増加に伴って消費量の増加を押し上げる。
- 消費量は、今後もアジアが最大の消費地域である一方で、相対的に高い総人口の伸びが見込まれるアフリカ(特にサブサハラ)及び中東でも増加する。アフリカの消費量の伸び率が最も高い見通し。
- 純輸入量について、消費量の増加を背景にアフリカや中東で増え、特にサブサハラ・アフリカ地域の増加が著しい。欧州は日本食の浸透もあり、わずかに純輸入量が減少する。純輸出量は、インドがさらに拡大して世界一を維持し、次いでタイ、ベトナムでそれぞれ輸出量を増やす見込み。また、新興の輸出国としてミャンマー、カンボジア等が台頭しアジアで純輸出量が増加し、北米の純輸出量が若干増加する見通し。アジアの輸出量の増加が、アフリカ・中東の輸入量の増加をまかなう。

① 米の地域別生産量及び消費量の見通し

② 米の地域別貿易量(純輸出入量)の見通し

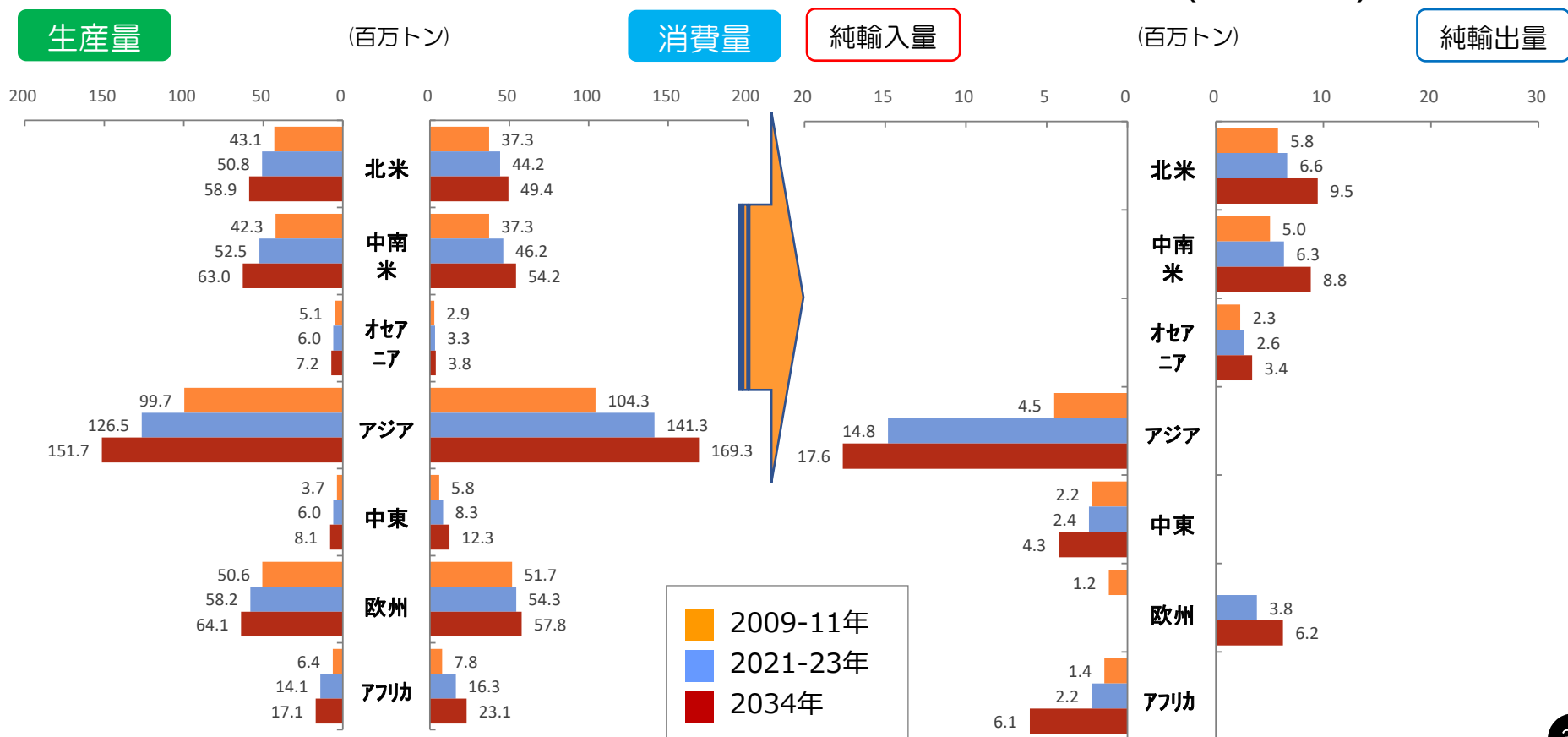


8 地域別の需給見通し：肉類

- 世界経済はウクライナ侵攻の長期化や中東情勢の不安定化等の渦中で回復途上にある中で、今後、経済成長は低下することが見込まれ、所得の伸びの鈍化から肉類消費量の伸びも抑えられて鈍化する見通し。
- 生産量及び消費量は、健康志向や生産性の向上等により、鶏肉の伸びが肉類のうちで最も高く、増加量が最も大きい。豚肉は、アジアが世界の6割程度の消費量を占め、そのうち中国の経済成長の低下と人口減少が見込まれることから肉類のうちで消費量の伸びが最も鈍化する。牛肉はアジアが最も消費量の増加や増加率も高い見通し。
- 肉類の純輸入量は、アフリカ、アジア、中東で増加する見通しで、アジアやアフリカに比べて平均所得の高い中東の純輸入量の伸びが最も高い。サブサハラ・アフリカは純輸入量が増加する。
- 肉類の貿易市場は、所得の増加に伴って需要量が増えるアジアを中心に純輸入量が増加し、中南米のブラジル・アルゼンチン、北米の米国、オセアニアの豪州等を中心として純輸出量が増加。中国の需要量の伸びは鈍化。

① 肉類の地域別生産量及び消費量の見通し

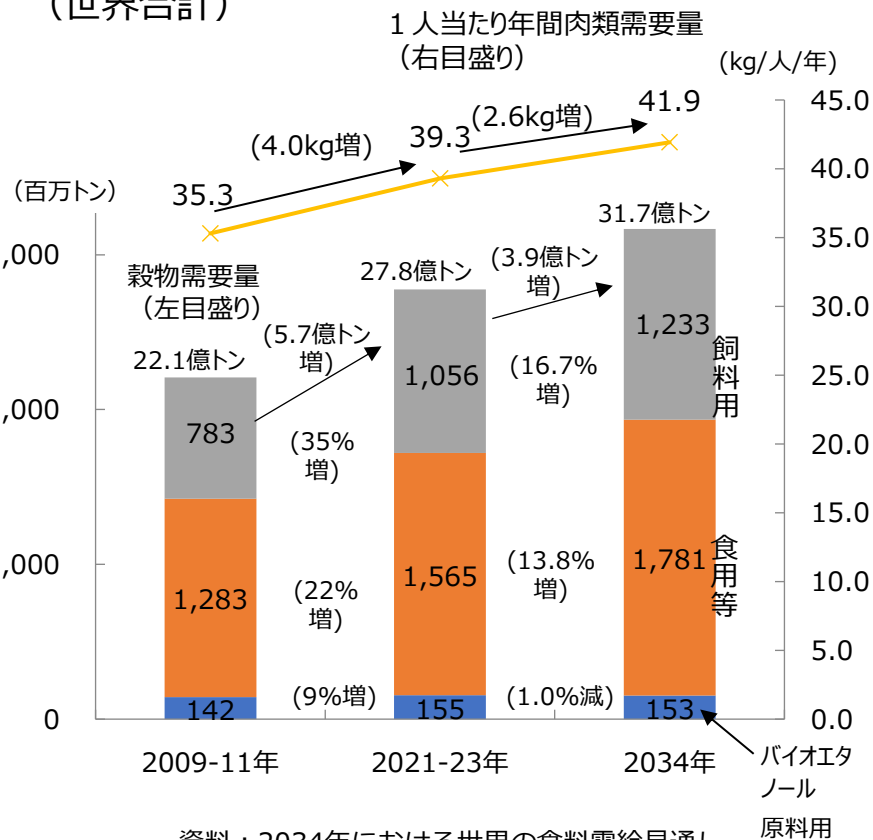
② 肉類の地域別貿易量(純輸出入量)の見通し



9 穀物の需給見通し：世界の穀物の消費・生産量の内訳

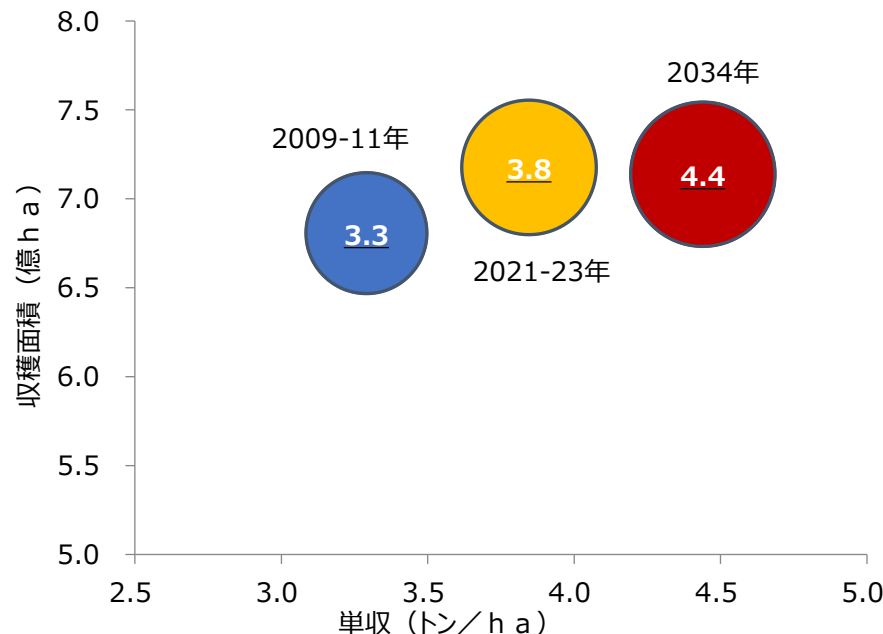
- 穀物生産量について、すべての穀物の収穫面積がやや減少となる中で、単収の伸びがこれまでに比べてやや鈍化するが、生産量は主に単収の増加によって増加する見通し。
- 穀物消費量について、世界経済は、COVID-19パンデミックやウクライナ侵攻の長期化等の不確実性を経て回復に向かう途上で、各国の経済回復は一様でなく下押し圧力を受ける国々があり、中国の経済成長の低下や人口減少の見込みがある中でも、将来的に、新興国及び途上国を中心として、所得の向上を背景に肉類消費量の増加に伴う飼料用需要が増加し、伸び率が鈍化しつつも、総人口の増加によって食用消費は増加する見通し。

① 用途別穀物消費量と1人当たり年間肉類消費量（世界合計）



② 穀物の生産量、単収、収穫面積（世界合計）

世界合計	2009-11年 (I)	2021-23年 (II)	2034年 (III)	増加率 (II)/(I)	増加率 (III)/(II)
収穫面積（億ha）	6.8	7.2	7.1	5.4%	-0.5%
単収（トン/ha）	3.3	3.8	4.4	16.9%	15.4%
生産量（百万トン）	2,240	2,760	3,169	23.2%	14.8%

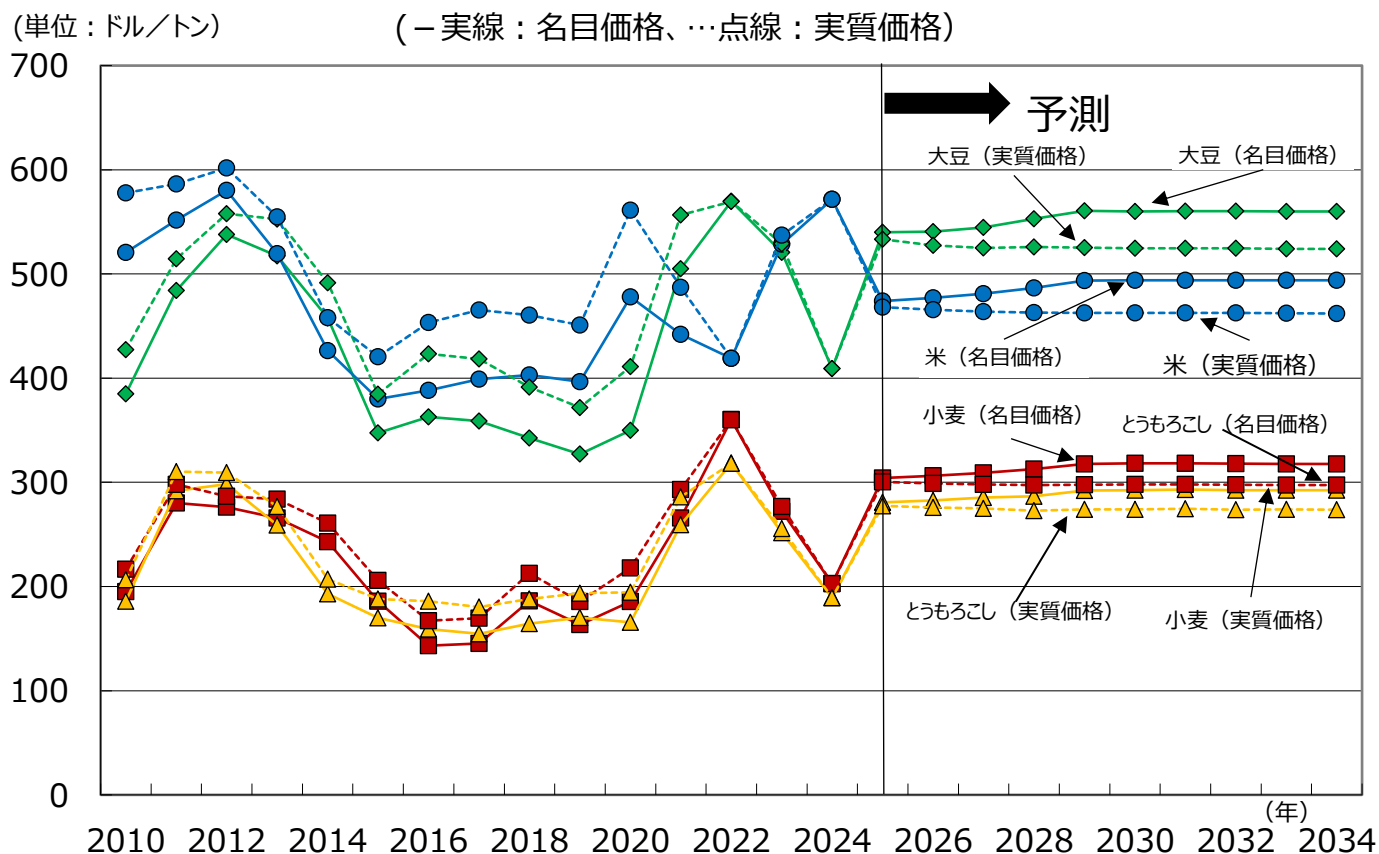


注：数字は単収（トン/ha）、円の大きさが生産量。

資料：2034年における世界の食料需給見通し

10 穀物・畜産物等の需給見通し：穀物及び大豆の国際価格見通し

- 穀物及び大豆の国際価格は、実質価格ベースで、ウクライナ侵攻や中東の衝突等による多方面への影響から下押し圧力が強まり、将来の経済成長が鈍化する見込みから、食料需要の伸びの低下を強めるため、弱含む見通し。ただし、さまざまな不確実性によっては、2025年以降穀物等価格が本見通しとは相違する結果になることにも注意が必要である。
- 物価上昇を勘案すると、穀物及び大豆の国際価格は名目ベースで上昇する見通し。
(これら国際価格の推移に対して、日本国内の円貨ベースは円安傾向にあり、輸入価格も為替動向によって上昇のリスク)

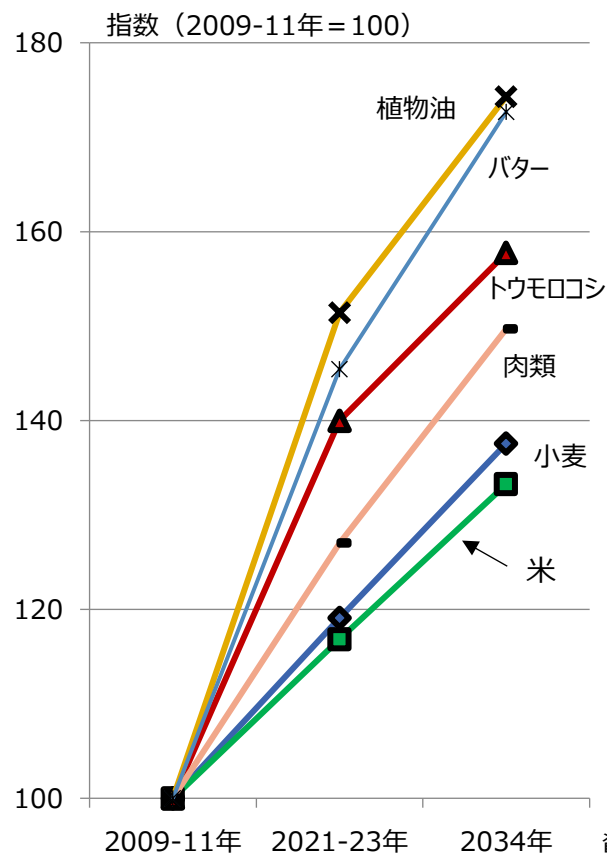


注：2024年までが実績値で、2025年から2034年までは需給データによる予測値。名目値について、小麦，とうもろこし，米，大豆は、製造業輸出価格指数（Export price of manufactures、IMFによるインフレーション指数の一つ）を基に算出。

1 1 穀物・畜産物等の需給見通し：世界における各品目の消費増加と食料価格

- 2020年以降、COVID-19パンデミックやウクライナ侵攻の長期化等を経て、世界経済は回復の途上で、インフレ高止まりのリスクもあり、経済減速が懸念される。中期的には、中国が経済成長の鈍化や人口減少が見込まれて、食料需要の伸びが低下し、新興国・途上国を中心とした所得の向上と総人口の増加等による世界の食料需要の増加率が鈍化する品目が増える見通し。
- 穀物や油糧種子の実質価格はマイナスとなる見通し。豚肉や植物油も実質価格はマイナスとなる一方で、肉類等の実質価格の伸びはプラスとなる。今後、これらの需要の伸びは鈍化する傾向となる見通し。
- 各品目の実質価格の上昇・下落の変動は、食の嗜好の変化や加工度の違い等によって異なる。

① 主要品目の世界の総消費量の変化



② 各品目の実質価格の増減率に差異

（単位：ドル/t（耕種作物）、ドル/100kg（畜産物））

品 目	基準年 (2021-23年) 価格	2034年（目標年）	
		実質価格	増減率 (%)
小麦	299	297	-0.7
とうもろこし	276	274	-1.0
米	463	462	-0.2
その他穀物	190	189	-0.7
大豆	532	524	-1.5
植物油	1,388	1,386	-0.1
牛肉	526	534	1.5
豚肉	196	195	-0.7
鶏肉	360	368	2.3
バター	483	550	13.7
脱脂粉乳	317	375	18.3
チーズ	408	423	3.5

資料：2034年における世界の食料需給見通し

(参考 1) OECD-FAO、USDAにおける中期的な世界食料需給見通しの概要

- 中長期的な世界食料需給見通しに関しては、各機関が公表しているが、目的の違いにより、それぞれ輸出国の立場や加盟国の農業政策の影響への強い関心等が反映されている。
- 我が国の「世界食料需給モデル」では、国際機関や食料輸出国の予測だけに依存することなく、食料の輸入国の立場から分析を行うという視点に立ち、日本と同様に食料輸入国であるアジア各国の需給分析も強化して、我が国独自の将来の食料需給を自然体で見通し、世界の食料事情の変化に対応した食料戦略の検討等に活用されている。

機関名	公表資料名 (公表年月)	見通しの目的	見通しの概要
経済協力開発機構 (O E C D) 及び 国連食糧農業機関 (F A O)	OECD-FAO Agricultural Outlook 2024- 2033 (2024年7月)	各国の農業政策が世界の農産物需給に与える影響について分析することを目的として中期的な世界食料需給見通しを実施	今後10年間、ほとんどの農作物の実質価格は現在の水準から下落する見込み。ただし、世界の農産物市場は様々な不確実性（農業・貿易政策の変更、異常気象の頻発、戦争の勃発、感染症・動物伝染病等）によって、見通し結果が変わる可能性。
米国農務省 (U S D A)	USDA Agricultural Projections to 2034 (2025年2 月)	米国の農業政策コストを予測するとともに、米国の中期的農産物貿易動向を予測するために、米国農産物市場を中心に中期的な食料需給見通しを実施	今後10年間、ほとんどの農産物の実質価格は現在の水準から下落する見込み。世界の農産物市場において米国農業は、ブラジル、ロシア等の主要輸出国との競争が激化する見込み。

(参考2) 世界食料需給モデルの概要

1 対象品目 (合計20品目)

- ① 耕種作物 6 品目 (小麦、とうもろこし、米、その他穀物、大豆、その他油糧種子)
- ② 食肉・鶏卵 5 品目 (牛肉、豚肉、鶏肉、羊肉、鶏卵)
- ③ 耕種作物の加工品 4 品目 (大豆ミール、その他のオイルミール、大豆油、その他の植物油)
- ④ 生乳・乳製品 5 品目 (生乳、バター、脱脂粉乳、チーズ、全脂粉乳)

2 目標年次、基準年次、比較年次

- ① 目標年次：2034年 (現在から10年後)
- ② 基準年次：2021～2023年の3年平均
- ③ 比較年次：2009～2011年の3年平均

3 予測項目

品目別・地域別の消費量、生産量、純輸出入量及び品目別国際参照価格 (実質・名目)

4 対象範囲及び地域分類

- ① 対象範囲：世界全体 (全ての国)
- ② 地域分類：
 - i 予測に用いるデータの地域分類は、地理的基準により8地域区分に分類した。
(小分類として31か国・地域に分類)
 - ii 品目毎の需給予測は、基本的にこの8地域区分により示した。
なお、各種パラメータ等について精度を向上させたことから、この8地域区分に加え参考値として品目毎に主要な生産・消費国の需給予測の結果も併せて示した。

(参考 2 : 続き) 世界食料需給モデルの国・地域分類

- 世界全体を対象範囲として、予測に用いるデータの地域分類は、
地理的基準により8地域区分
- 小分類として31か国・地域
- モデルは世界全体としての食料需給の基調を予測するため、国別での予測は行わず、
8地域区分の予測値を示す
- 各品目の主要生産・消費国のみを参考値として追記

地域区分	小分類(国名・地域名)
北米	米国、カナダ
中南米	アルゼンチン、ブラジル、メキシコ、その他中南米
オセアニア	豪州、ニュージーランド
アジア	日本、中国、韓国、タイ、ベトナム、インドネシア、 マレーシア、フィリピン、インド、パキスタン、 バングラデシュ、台湾、 その他アジア（中央アジア含む）
中東	中東
欧州	EU（27か国）＋UK、ロシア、ウクライナ、 その他ヨーロッパ
アフリカ	南アフリカ共和国、ナイジェリア、北アフリカ、 その他アフリカ（サブサハラ・アフリカ）
その他世界	その他世界
合計	31か国・地域

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・ 食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・ 食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・ 米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・ 食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・ 砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・ 野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・ 畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・ 国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・ 国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・ 経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・ 農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・ 米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・ カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・ 豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2025 年 4 月中旬までに発表した情報を引用しています。（最新年度 2024/25 年度です）

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大
学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、
その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
中国の需要・輸入動向
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
中長期（10 年先）、超長期（30 年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html

